

茂原古墳群



平成2年3月

宇都宮市教育委員会



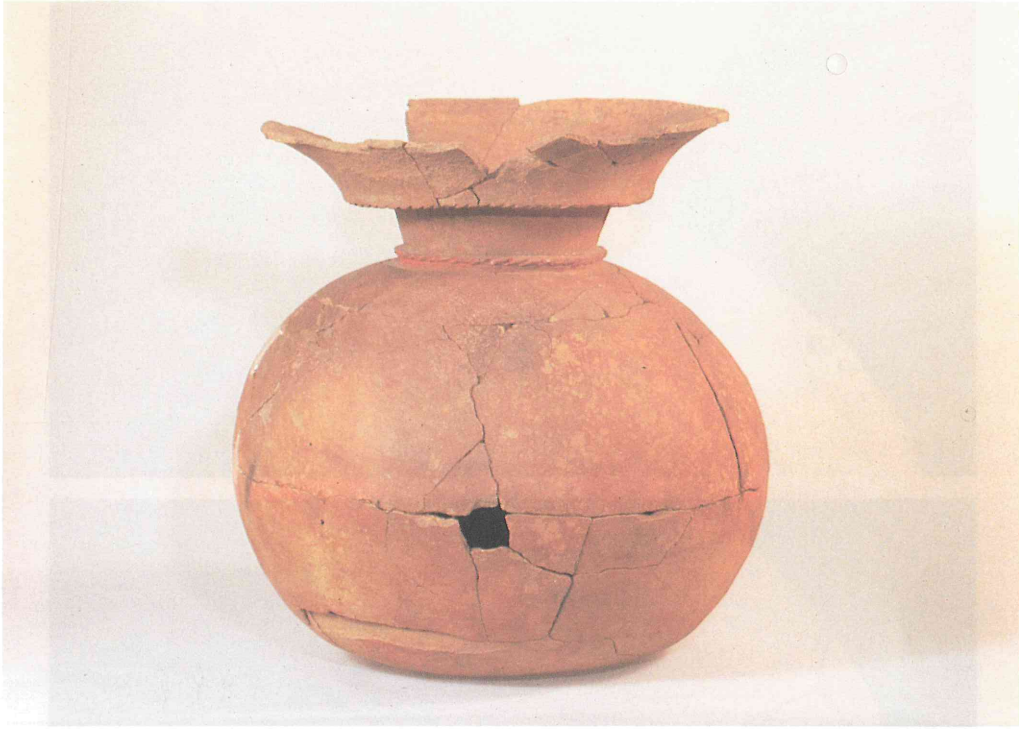
愛宕塚古墳埋葬主体部



(1) 愛宕塚古墳鏡出土状況



(2) 大日塚古墳鏡出土状況



愛宕塚古墳くびれ部東側出土土器（上土器1，下土器2）



愛宕塚古墳出土土器1 細部（上頸部，中底部，下底部）

発刊にあたって

宇都宮市の南部・雀宮地内は、県内でも有数の遺跡密集地として古くから知られています。とりわけ、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は多く、北関東弥生時代後期の土器編年の標式となった二軒屋遺跡、画文帯神獸鏡や鈴鏡など豊富な副葬品の出土で全国的に知られた牛塚古墳などもこの雀宮地内に所在しておりました。このような歴史的環境にある茂原古墳群は、本地域さらには栃木県における古墳文化解明の鍵を握る古墳群の一つとして、古くより注目されてきたものであります。

この古墳群の重要性にいち早く着目され、詳細な現地踏査や資料収集などをなされていたのが、昨年5月に他界された久保哲三先生であります。当時宇都宮大学におられた久保先生は、昭和52年よりこの古墳群の本格的な調査を開始され、以来昭和60年に至るまで、愛宕塚古墳・大日塚古墳の発掘調査、権現山古墳・五領山古墳の墳丘測量調査さらには関連集落遺跡である権現山北遺跡の発掘調査を手がけられ、非常に多くの成果をあげてこられました。なかでも、愛宕塚古墳・大日塚古墳の発掘調査では、前方後方型の墳形を確認するとともに埋葬方法や副葬品がセットとして明らかにされ、栃木県における前期古墳の在り方が極めて具体的に提示されました。

さて、以上の成果につきましては、すでに新聞、雑誌、シンポジウム資料などで紹介されてまいりましたが、本市教育委員会ではこの古墳群の重要性にかんがみ、一冊の報告書として発刊することにいたしました。本書が埋蔵文化財の保護精神高揚の一助となり、広く御活用いただければ幸いです。

文末になりましたが、久保先生の御冥福をお祈りするとともに、報告に携わった皆様に対しまして、心からお礼申し上げます。また、今回の報告にあたり、終始御指導いただきました国士館大学教授・大川 清先生、ならびに東京国立博物館・本村豪章先生に対しまして感謝の意を表します。

平成2年3月

宇都宮市教育委員会教育長

藤 田 昌 平

例 言

1. 本書は栃木県宇都宮市茂原町に所在する茂原古墳群の発掘調査報告書であり、調査した古墳（遺跡）・所在地・期間および調査の内容等は次表のとおりである。

古墳(遺跡)名	所在地	調査期間	備考
愛宕塚古墳	茂原町字御馬前412他	第1次 昭和52年3月9日～4月13日 第2次 同年 7月13日～8月25日 第3次 同年 9月28日～11月10日 第4次 同年 11月18日～12月10日	
権現山北遺跡	茂原町字花欠273他	第1次 昭和52年4月14日～5月9日 第2次 同年 7月13日～7月31日	昭和54年3月 報告済み。
権現山古墳	茂原町字五領山311他	昭和56年4月29日～5月10日	墳丘測量のみ。
大日塚古墳	茂原町字御馬前401-2他	昭和55年4月29日～5月10日 第1次 昭和58年7月28日～9月3日 第2次 昭和59年7月16日～8月31日 第3次 昭和60年7月16日～8月31日	墳丘測量のみ。

なお、権現山北遺跡は、開田工事に伴う緊急発掘調査であり、既に宇都宮市教育委員会より報告済み（昭和54年3月）であるが、本古墳群とのかかわりで重要な集落跡であるため、本書にその要旨を集録した。

2. 本古墳群の発掘調査は、久保哲三が「関東における前期古墳の研究」で文部省科学研究費補助金を受けて、宇都宮大学考古学研究会が中心となり実施した。
3. 遺跡・遺物の実測・トレースは各報文執筆者が、写真撮影は斎藤 均・小山宏之・大蔵雅之・大森久美子・津布榮一樹が主体となってあつた。なお、愛宕塚古墳の埋葬主体部の撮影は森昭氏に、遺物の撮影は大川 清氏に、また遺物のレントゲン写真撮影は本村豪章氏による。
4. 本書の執筆・編集は、久保の総括のもと、各発掘・整理参加者が協議して分担した。また、玉類については本村氏より、化学的分析については馬淵久夫・平尾良光両氏および見城敏子氏より玉稿を賜った。なお、執筆分担は次のとおりである。

久保 哲三 第4編第3章，結第3章

小森 紀男 結第1章4

水品 信男 第1編第2章2-(3)・3・4・第4章2・3-(1)~(5)

小森 哲也 序2，第1編第2章2-(6)，結第1章3

梁木 誠 序1，第1編第2章2-(4)，第4章1，第3編，第4編第1・2章

宮崎 光明	第1編第1章・第2章2-(1)(2)(7)・第3章1・2, 結第1章1・2
柳田 和子	第1編第2章1・2-(5)
梶 和彦	第1編第4章3-(6)
長谷川 操	第2編第1章・第2章1・2・第6章1, 結第2章1
長谷川純子	第2編第6章3-(2)
河俣 雅久	第2編第3章
今平 利幸	第2編第2章3・第4章・第5章・第6章2・3-(1)(3)(4)(5), 結第2章2・3

5. 写真図版中の遺物番号は、挿図の番号と一致する。
6. 挿図中の土器で、赤色のものにはスクリントーンをかけた。また、須恵器の断面は黒ぬりとした。ところで弥生式土器や土師器に赤色の土器がある。これらの土器には、
- A 焼きあがった土器に赤色顔料（多くは酸化第二鉄）を塗ったり文様を描いたもの。
- B 焼く前に顔料（酸化第二鉄）を塗布したりして焼きあげた土器。
- C きわめて多量の鉄分を含んだ粘土で成形して焼きあげた土器で、割れ口を見ればわかる。そして普通の土器より若干重い。

の三種がある。

上記のうち、Bには作法によって三種がある。

- 1 赤色顔料（酸化第二鉄）を塗布する。
- 2 赤色顔料（酸化第二鉄）溶液に浸す。

1, 2とも顔料が器面上に塗布されたもので、両者は識別がむずかしい。また、顔料塗布の時間が問題で、比較的乾燥の進行した段階と、若干生っぽい段階とでは、顔料の浸透度合に違いがある。このことは、同一粘土に対してテストすれば理解できる。同じ遺跡の土器であっても粘土の違いもあるから、一概に、斯うと断言できない。しかし、いずれにしても焼く前に鉄系顔料が加えられたもので、土器の割れ口を見ればわかる。

3 赤色顔料を粘土に混ぜた泥漿を器面に塗り、磨きを加えたり、施文したりして焼きあげた。この種の土器は、外見上は2との相違を指摘し難いが、割れ口などの観察から判断し得る。このような焼成前の顔料塗布の方法を研究の便宜上分類したが、それを表現する名称が必要である。そこで

1は鉄系顔料塗布焼成土器、2は鉄系顔料溶液浸掛け焼成土器ということになる。つまり、この1, 2は鉄系顔料によって化粧したものであるから、鉄化粧土器で、これを簡略化すると「鉄化粧」となる。したがって「鉄化粧文様」「鉄化粧による赤色土器」「鉄化粧赤色土器」「鉄化粧土器」といった表現でよろしかろう。

3は鉄系泥漿塗布焼成土器で、「鉄泥漿による赤色土器」「鉄泥漿赤色土器」「鉄泥漿土器」と表してよろしかろう。

上記の作法で器面仕上げを行うが、色調に変化があり、あざやかな赤、くすんだ赤などの色

調が見られる。これは酸化鉄の量の多寡と温度の関係で違いがある。ことに温度上昇とともに美しい色になるが、度を過ぎると赤から褐色に変る。

はじめのCの多量に鉄分を含んだ粘土による赤色土器については、「含鉄系粘土による土器」で「含鉄粘土土器」つまり「含鉄赤色土器」「含鉄系土器」と表現してみたらと思う。本書ではこの分類と名称によって土器を理解する。

7. 本古墳群出土の遺物および図面・写真は、すべて宇都宮市教育委員会で保管している。
8. 本古墳群の調査に係る概要は一部公表されているが、本書をもって正報告とする。なお、これまで公表された主なものは次のとおりである。

久保哲三「愛宕塚古墳」『日本考古学年報』30（1977年度版）日本考古学協会 昭和54年4月

久保哲三他「シンポジウムⅡ 関東における古墳出現期の諸問題」『日本考古学協会昭和56年度大会』資料 昭和56年10月

久保哲三他「宇都宮市茂原町大日塚古墳第1次発掘調査概報」『峰考古』第5号 宇都宮大学考古学研究会 昭和60年3月

久保哲三他「宇都宮市茂原町大日塚古墳第2・3次発掘調査報告」『峰考古』第6号 宇都宮大学考古学研究会 昭和61年3月

久保哲三他『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』学生社 昭和63年2月

久保哲三「古墳出現期の社会」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館第1回企画展図録』栃木県教育委員会 昭和62年10月

9. 調査・整理および本書の作成に際しては、次の方々から多大な御援助、御教示を賜った。記して心から感謝の意を表す。（敬称略、五十音順）

秋元陽光，赤石澤亮，石部正志，岩崎卓也，今井 堯，池上 悟，五十嵐利勝，岩淵一夫，石川陸郎，石川 均，市橋一郎，糸永郁美，上野修一，上野とも子，海老原郁夫，大塚初重，大金宣亮，大橋泰夫，大塚政一，大沢順子，大森八重子，大野節子，大沢伸啓，大塚雅之，笠野 毅，神野安伸，賀来孝代，河野一也，木村光男，木村 等，梶 國男，車崎正彦，小出義治，小松俊夫，小島豪市郎，小林三郎，小林由加子，定岡明義，篠原 勝，篠原 豊，清水康二，城川亥一，梶山林継，鈴木 勝，鈴木茂兵衛，鈴木芳子，関沢 昇，田熊信之，田代 隆，玉口時雄，竹沢 謙，鶴見武道，手塚英男，中村紀男，中山 晋，野沢 涉，塙 静夫，橋本澄朗，橋本博文，橋本兵治，橋本明治，福田責久栄，古谷 毅，水野順敏，茂谷（旧姓小野）恵子，森 昭，森田久男，森田 優，屋代方子，山崎勝富，山ノ井清人，吉田章一郎，

栃木県教育委員会，（財）栃木県文化振興事業団，栃木県立博物館，栃木県立しもつけ風土記の丘資料館，日本窯業史研究所，東京国立博物館，東京国立文化財研究所，関東財務局，宇都宮市水道局，宇都宮市立雀宮中学校郷土部，下野考古学研究会，

10. 本書の最終稿は久保にかわって大川が校訂した。

目 次

発刊にあたって

例 言

序 経緯と環境

- 1 調査に至る経過と体制 1
- 2 茂原古墳群の地理的・歴史的環境 3

第1編 愛宕塚古墳

第1章 調査の経過 13

第2章 墳丘と周塹の調査

- 1 発掘調査前の状況 15
- 2 周塹の調査 15
- 3 墳丘の調査 34
- 4 遺物出土状況 37

第3章 埋葬主体部の調査

- 1 埋葬主体部の構造 40
- 2 副葬品の出土状況 43

第4章 出土遺物

- 1 副葬品 44
- 2 盛土内出土の土器 47
- 3 周塹出土の土器 48

第2編 大日塚古墳

第1章 調査の経過

- 1 調査に至るまでの経過 59
- 2 調査の経過 59

第2章 墳丘と周塹の調査

- 1 発掘調査前の状況 62
- 2 墳丘と周塹の調査 62
- 3 遺物出土状況 82

第3章 埋葬主体部の調査 84

第4章 出土遺物	
1 副葬品	86
2 墳丘及び周湟出土土器	86
3 墳丘盛土内出土土器	91
第5章 墳丘下の住居跡	
1号住居跡	94
2号住居跡	94
3号住居跡	100
4号住居跡	100
第6章 その他の遺跡と遺物	
1 穴 跡	104
2 溝 跡	106
3 その他の遺物	106
第3編 権現山古墳の墳丘測量	
第1章 調査の経過	113
第2章 墳形と規模	114
第3章 まとめ	116
第4編 権現山北遺跡	
第1章 調査の経過	117
第2章 住居跡と出土遺物	
1 住居跡	117
2 出土遺物	119
第3章 まとめ	120
結 茂原古墳群をめぐる諸問題	
第1章 愛宕塚古墳	
1 墳丘と周湟	151
2 埋葬主体部	152
3 愛宕塚古墳出土の鏡について	159
4 土師器の系譜	166
第2章 大日塚古墳	
1 古墳の平面形態について	173

2 大日塚古墳出土の小型素文鏡について	177
3 大日塚古墳出土土器について	187
第3章 下野における古墳出現期の様相	197

付 編 化学的分析

土壌分析について	(見城 敏子)	205
倣製鏡の化学組成と鉛同位体比	(馬淵 久夫・平尾 良光)	207

挿 図 目 次

第1図 栃木県中・南部の台地と低地	3
第2図 茂原古墳群および権現山北遺跡と周辺の地形	4
第3図 大日塚古墳周辺出土銅鏃	5
第4図 茂原古墳群付近地籍図	5
第5図 茂原古墳群周辺の遺跡分布図	6
第6図 周辺遺跡出土遺物	9
第7図 周辺の古墳墳丘測量図	10
第8図 文殊山古墳出土遺物	11
第9図 愛宕塚古墳墳丘実測図	16
第10図 愛宕塚古墳トレンチ配置図	17
第11図 愛宕塚古墳後方部北側トレンチ平面図・断面図	18
第12図 愛宕塚古墳後方部西側トレンチ平面図	19
第13図 愛宕塚古墳後方部西側トレンチ断面図	20
第14図 愛宕塚古墳くびれ部西側周辺トレンチ平面図	21
第15図 愛宕塚古墳くびれ部西側周辺トレンチ断面図	22
第16図 愛宕塚古墳前方部西側トレンチ平面図	25
第17図 愛宕塚古墳前方部西側トレンチ断面図	26
第18図 愛宕塚古墳前方部西側グリッド断面図	26
第19図 愛宕塚古墳G-F 1土器4・5出土状況図	27
第20図 愛宕塚古墳前方部東側グリッド平面図	28
第21図 愛宕塚古墳前方部東側トレンチ平面図	29
第22図 愛宕塚古墳前方部東側トレンチ断面図	30
第23図 愛宕塚古墳G-B 4土器出土状況図	31
第24図 愛宕塚古墳G-B 4土器・焼土確認状況図	32

第25図	愛宕塚古墳後方部東側トレンチ平面図	33
第26図	愛宕塚古墳後方部東側トレンチ断面図	34
第27図	愛宕塚古墳前方部東側墳丘断面図	35
第28図	愛宕塚古墳T-28断面図	35
第29図	愛宕塚古墳T-22断面図	36
第30図	愛宕塚古墳T-27平面図・断面図	37
第31図	愛宕塚古墳土器出土位置図	39
第32図	愛宕塚古墳埋葬主体部平面図・断面図	41・42
第33図	愛宕塚古墳玉類出土状況図	43
第34図	愛宕塚古墳副葬品出土状況図	43
第35図	愛宕塚古墳鏡・櫛出土状況図	43
第36図	愛宕塚古墳出土鏡実測図	45
第37図	愛宕塚古墳出土櫛および木質実測図	46
第38図	愛宕塚古墳出土玉類実測図	46
第39図	愛宕塚古墳出土刀子実測図	46
第40図	愛宕塚古墳出土土器実測図(1)	52
第41図	愛宕塚古墳出土土器実測図(2)	53
第42図	愛宕塚古墳出土土器実測図(3)	54
第43図	愛宕塚古墳出土土器実測図(4)	55
第44図	愛宕塚古墳出土土器実測図(5)	56
第45図	愛宕塚古墳出土弥生式土器拓影図	57
第46図	大日塚古墳全測図	63
第47図	大日塚古墳トレンチ配置図	64
第48図	大日塚古墳実測図	65
第49図	大日塚古墳後方部トレンチ平面図	67・68
第50図	大日塚古墳前方部トレンチ平面図	69・70
第51図	大日塚古墳トレンチ断面図	71・72
第52図	大日塚古墳くびれ部南側トレンチ平面図・断面図	75
第53図	大日塚古墳くびれ部北側トレンチ平面図・断面図	76
第54図	大日塚古墳後方部南側断面図	79・80
第55図	大日塚古墳遺物出土位置図	83
第56図	大日塚古墳埋葬主体部実測図	85
第57図	大日塚古墳出土鏡実測図	86
第58図	大日塚古墳出土遺物実測図(1)	87

第59図	大日塚古墳出土遺物実測図(2)	90
第60図	大日塚古墳盛土内出土遺物実測図	93
第61図	1号住居跡実測図	95
第62図	1号住居跡出土遺物実測図	96
第63図	2号住居跡実測図	97
第64図	2号住居跡出土遺物実測図(1)	98
第65図	2号住居跡出土遺物実測図(2)	99
第66図	4号住居跡実測図	100
第67図	4号住居跡出土遺物実測図	101
第68図	大日塚古墳周辺穴跡平面図・断面図	105
第69図	大日塚古墳周辺出土石器実測図	107
第70図	大日塚古墳周辺出土弥生土器拓影図	107
第71図	大日塚古墳周辺出土土器実測図	108
第72図	大日塚古墳周辺出土平安時代遺物実測図	108
第73図	中・近世の遺物(1)	109
第74図	中・近世の遺物(2)	110
第75図	中・近世の遺物(3)	111
第76図	権現山古墳墳丘測量図	115
第77図	五領山古墳墳丘測量図	116
第78図	権現山北遺跡分布図	123
第79図	権現山北遺跡 1号住居跡, 2号住居跡実測図	124
第80図	権現山北遺跡 4～6号住居跡実測図	125
第81図	権現山北遺跡 7・8号住居跡, 9号住居跡実測図	126
第82図	権現山北遺跡 3号住居跡, 14・15号住居跡, 10・11・17号住居跡実測図	127
第83図	権現山北遺跡12号住居跡, 13号住居跡実測図	128
第84図	権現山北遺跡16号住居跡, 18号住居跡実測図	129
第85図	権現山北遺跡カマド実測図	130
第86図	権現山北遺跡穴跡実測図	131
第87図	権現山北遺跡 1号住居跡出土土器実測図	132
第88図	権現山北遺跡 2号住居跡出土土器実測図(1)	133
第89図	権現山北遺跡 2号住居跡出土土器実測図(2)	134
第90図	権現山北遺跡 3号住居跡出土土器実測図	134
第91図	権現山北遺跡 4号住居跡出土土器実測図(1)	134
第92図	権現山北遺跡 4号住居跡出土土器実測図(2)	135

第93図	権現山北遺跡 4号住居跡出土土器実測図(3)	136
第94図	権現山北遺跡 4号住居跡出土土器実測図(4)	137
第95図	権現山北遺跡 5号住居跡出土土器実測図(1)	137
第96図	権現山北遺跡 5号住居跡出土土器実測図(2)	138
第97図	権現山北遺跡 5号住居跡出土土器実測図(3)	139
第98図	権現山北遺跡 6号住居跡出土土器実測図	140
第99図	権現山北遺跡 7号住居跡出土土器実測図(1)	140
第100図	権現山北遺跡 7号住居跡出土土器実測図(2)	141
第101図	権現山北遺跡 7号住居跡出土土器実測図(3)	142
第102図	権現山北遺跡 7号住居跡出土土器実測図(4)	143
第103図	権現山北遺跡 8号住居跡出土土器実測図	143
第104図	権現山北遺跡 9号住居跡出土土器実測図	144
第105図	権現山北遺跡 9号住居跡南P10出土土器実測図	144
第106図	権現山北遺跡10号住居跡出土土器実測図	144
第107図	権現山北遺跡11号住居跡出土土器実測図	144
第108図	権現山北遺跡12号住居跡出土土器実測図	145
第109図	権現山北遺跡13号住居跡出土土器実測図	145
第110図	権現山北遺跡14号住居跡出土土器実測図	146
第111図	権現山北遺跡16号住居跡出土土器実測図(1)	146
第112図	権現山北遺跡16号住居跡出土土器実測図(2)	147
第113図	権現山北遺跡17号住居跡出土土器実測図・瓦拓影図	148
第114図	権現山北遺跡18号住居跡出土土器実測図	148
第115図	権現山北遺跡穴跡出土土器実測図	148
第116図	権現山北遺跡出土石製模造品・土玉実測図	149
第117図	権現山北遺跡出土鉄製品・砥石実測図	150
第118図	愛宕塚古墳の舟形木棺復元図	153
第119図	舟形木棺集成図	156
第120図	愛宕塚古墳出土鏡関連鏡	160
第121図	二段口辺壺形土器の系譜	167
第122図	広口口辺壺形土器の系譜	170
第123図	前方後方墳後方部長・幅相關図	175
第124図	前方後方墳後方部長・前方部長相關図	175
第125図	前方後方墳後方部幅・前方部幅相關図	176
第126図	遺跡の種類別割合図	181

第127図	面径毎の面数及び時代別割合	181
第128図	総高と面径の比	182
第129図	素文鏡分布図	183・184
第130図	時代別遺跡数割合図	185
第131図	S字・樽共伴遺跡分布図	189
第132図	「壺E類」分布図	192
第133図	胴部に山形文と綾杉文をもつ壺	194
第134図	下野および常陸における前方後方墳の分布	197
第135図	下野における主要古墳の変遷（前期～中期を中心として）	200
第136図	下野の東海系土器	201
第137図	下野の東海系土器分布図	202
第138図	本邦出土の青銅器と愛宕塚古墳出土倣製鏡の鉛同位体比分布	209

表 目 次

第1表	周辺の弥生時代遺跡	7
第2表	周辺の古墳	8
第3表	周辺で調査された集落跡・その他の遺跡	8
第4表	愛宕塚古墳地点別土器出土状況	38
第5表	愛宕塚古墳出土玉類一覧	46
第6表	愛宕塚古墳出土弥生式土器片	56
第7表	大日塚古墳の形態，規模，構造的特徴一覧	81
第8表	1号住居跡出土土器観察表	101
第9表	2号住居跡出土土器観察表(1)	102
第10表	2号住居跡出土土器観察表(2)	103
第11表	4号住居跡出土土器観察表	103
第12表	権現山北遺跡住居跡一覧	118
第13表	石製模造品出土住居跡一覧	121
第14表	権現山北遺跡出土須恵器観察表（追加分）	150
第15表	東国における前期古墳の埋葬主体部(1)	154
第16表	東国における前期古墳の埋葬主体部(2)	155
第17表	鏡が出土した前方後方墳一覧(1)	162
第18表	鏡が出土した前方後方墳一覧(2)	163
第19表	前方後方墳（前方後方形周溝墓）墳丘各部計測値一覧	174

第20表	素文鏡一覽(1)	179
第21表	素文鏡一覽(2)	180
第22表	S字・樽共伴遺跡一覽	189
第23表	S字・樽共伴遺跡關係表	190
第24表	胴部文様に山形文をもつ東海系壺一覽	193
第25表	下野の前方後方墳一覽	198
第26表	茂原古墳群・前方後方墳の規模	199
第27表	虎塚古墳土壤のPH	205
第28表	愛宕塚古墳埋葬主体部内外の土壤のPH	205
第29表	鉛同位体比測定結果	209
第30表	化学組成測定結果	210

図版目次

巻頭図版 1	愛宕塚古墳埋葬主体部	
巻頭図版 2	(1) 愛宕塚古墳鏡出土状況	(2) 大日塚古墳鏡出土状況
巻頭図版 3	愛宕塚古墳くびれ部東側出土土器	
巻頭図版 4	愛宕塚古墳出土土器 1 細部	
図版 1	茂原古墳群周辺航空写真	図版 2 愛宕塚古墳全景
図版 3	(1) 大日塚古墳全景	(2) 権現山古墳全景
図版 4	(1) 愛宕塚古墳遠景	(2) 愛宕塚古墳近景
図版 5	(1) 愛宕塚古墳第18トレンチ (3) 愛宕塚古墳第12・13トレンチ	(2) 愛宕塚古墳第10トレンチ (4) 愛宕塚古墳第4トレンチ
図版 6	(1) 愛宕塚古墳第6トレンチ・E4グリッド接合部	(2) 愛宕塚古墳第6トレンチ・E4グリッド接合部
図版 7	(1) 愛宕塚古墳E4グリッド	(2) 愛宕塚古墳E4グリッド近景
図版 8	(1) 愛宕塚古墳E4グリッド	(2) 愛宕塚古墳第3トレンチ穴跡
図版 9	(1) 愛宕塚古墳E4グリッド・第3トレンチ接合部 (3) 愛宕塚古墳第9トレンチ	(2) 愛宕塚古墳第3トレンチ (4) 愛宕塚古墳第23トレンチ
図版10	(1) 愛宕塚古墳第21トレンチ	(2) 愛宕塚古墳F1グリッド
図版11	(1) 愛宕塚古墳F1グリッド (3) 愛宕塚古墳F1グリッド遺物出土状況	(2) 愛宕塚古墳F1グリッド遺物出土状況
図版12	(1) 愛宕塚古墳B0グリッド	(2) 愛宕塚古墳B0グリッド
図版13	(1) 愛宕塚古墳第20トレンチ (3) 愛宕塚古墳B0グリッド・第19トレンチ	(2) 愛宕塚古墳第5トレンチ (4) 愛宕塚古墳第11トレンチ

- 図版14 (1) 愛宕塚古墳第16トレンチ
(3) 愛宕塚古墳第1トレンチ
- 図版15 愛宕塚古墳B4グリッド遺物出土状況
- 図版16 (1) 愛宕塚古墳B4グリッド遺物出土状況 (2) 愛宕塚古墳B4グリッド遺物出土状況
- 図版17 (1) 愛宕塚古墳B4グリッド遺物出土状況 (2) 愛宕塚古墳B4グリッド遺物出土状況
- 図版18 (1) 愛宕塚古墳B4グリッド (2) 愛宕塚古墳B4グリッド
- 図版19 (1) 愛宕塚古墳第8トレンチ (2) 愛宕塚古墳第2トレンチ
(3) 愛宕塚古墳第15トレンチ (4) 愛宕塚古墳第14トレンチ
- 図版20 (1) 愛宕塚古墳第27トレンチ (2) 愛宕塚古墳第27トレンチ内墳丘下竪穴
(3) 愛宕塚古墳第17トレンチ (4) 愛宕塚古墳第28トレンチ
- 図版21 (1) 愛宕塚古墳D8グリッド (2) 愛宕塚古墳D8グリッド
- 図版22 (1) 愛宕塚古墳埋葬主体部確認状況 (2) 愛宕塚古墳埋葬主体部断面
- 図版23 (1) 愛宕塚古墳埋葬主体部全景 (2) 愛宕塚古墳埋葬主体部全景
- 図版24 (1) 愛宕塚古墳埋葬主体部全景 (2) 愛宕塚古墳埋葬主体部北側の粘土
- 図版25 (1) 愛宕塚古墳埋葬主体部断ち割り (2) 愛宕塚古墳埋葬主体部断ち割り
- 図版26 (1) 愛宕塚古墳埋葬主体部断ち割り (2) 愛宕塚古墳埋葬主体部断ち割り
- 図版27 (1) 愛宕塚古墳鏡・管玉出土状況 (2) 愛宕塚古墳鏡・管玉出土状況
- 図版28 (1) 愛宕塚古墳鏡出土状況 (2) 愛宕塚古墳鏡出土状況近景
- 図版29 (1) 愛宕塚古墳鏡・櫛出土状況 (2) 愛宕塚古墳鏡・櫛付近木質確認状況
- 図版30 (1) 愛宕塚古墳管玉出土状況 (2) 愛宕塚古墳櫛出土状況
- 図版31 愛宕塚古墳出土鏡 図版32 愛宕塚古墳埋葬主体部出土遺物
- 図版33 愛宕塚古墳出土土器1 図版34 愛宕塚古墳出土土器1細部(1)
- 図版35 愛宕塚古墳出土土器1細部(2) 図版36 愛宕塚古墳出土土器2
- 図版37 愛宕塚古墳出土土器3 図版38 愛宕塚古墳出土土器4
- 図版39 愛宕塚古墳出土土器 図版40 愛宕塚古墳出土土器
- 図版41 愛宕塚古墳出土土器 図版42 愛宕塚古墳出土土器(弥生式土器)
- 図版43 (1) 大日塚古墳全景 (2) 大日塚古墳全景
- 図版44 (1) 大日塚古墳後方部東辺 (2) 大日塚古墳後方部東辺
- 図版45 (1) 大日塚古墳後方部南東コーナー (2) 大日塚古墳後方部南東コーナー
- 図版46 (1) 大日塚古墳後方部南辺 (2) 大日塚古墳後方部南辺
(3) 大日塚古墳後方部南辺
- 図版47 (1) 大日塚古墳後方部北東コーナー (2) 大日塚古墳後方部北東コーナー
(3) 大日塚古墳後方部北辺
- 図版48 (1) 大日塚古墳くびれ部南側 (2) 大日塚古墳くびれ部北側

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| 図版49 (1) 大日塚古墳くびれ部北側 | (2) 大日塚古墳くびれ部北側断ち割り状況 |
| 図版50 (1) 大日塚古墳くびれ部北側断ち割り断面 | (2) 大日塚古墳くびれ部北側断ち割り断面 |
| 図版51 (1) 大日塚古墳くびれ部北側 | (2) 大日塚古墳くびれ部北側 |
| 図版52 (1) 大日塚古墳くびれ部北側断ち割り断面 | (2) 大日塚古墳くびれ部北側断ち割り断面 |
| 図版53 (1) 大日塚古墳前方部南辺 | (2) 大日塚古墳前方部南側周湟断面 |
| (3) 大日塚古墳前方部北辺 | (4) 大日塚古墳前方部北辺 |
| 図版54 (1) 大日塚古墳前方部西辺 | (2) 大日塚古墳前方部南西コーナー |
| 図版55 (1) 大日塚古墳遺物出土状況 | (2) 大日塚古墳遺物出土状況 |
| 図版56 (1) 大日塚古墳遺物出土状況 | (2) 大日塚古墳遺物出土状況 |
| 図版57 (1) 大日塚古墳埋葬主体部調査区全景 | (2) 大日塚古墳埋葬主体部確認状況 |
| 図版58 (1) 大日塚古墳埋葬主体部確認状況 | (2) 大日塚古墳埋葬主体部断面 |
| 図版59 (1) 大日塚古墳鏡出土状況 | (2) 大日塚古墳前方部墳頂部調査区全景 |
| 図版60 (1) 1号住居跡遺物出土状況 | (2) 1号住居跡遺物出土状況 |
| 図版61 (1) 1号住居跡床面 | (2) 1号住居跡完掘状況 |
| 図版62 (1) 2号住居跡 | (2) 2号住居跡遺物出土状況 |
| 図版63 (1) 3号住居跡 | (2) 4号住居跡遺物出土状況 |
| (3) 4号住居跡 | |
| 図版64 (1) 1号穴跡 | (2) 2号穴跡 |
| 図版65 (1) 3号・4号穴跡 | (2) 3号穴跡断面 |
| (3) 4号穴跡断面 | |
| 図版66 大日塚古墳出土遺物 | 図版67 大日塚古墳出土土器 |
| 図版68 大日塚古墳出土土器 | 図版69 大日塚古墳出土土器 |
| 図版70 大日塚古墳出土土器 | |

序 経緯と環境

1 調査に至る経過と体制

近年、栃木県における古墳文化研究の深化にはめざましいものがある。とりわけ注目されるのは前方後方墳に関する研究の進展であり、類例の増加もさることながらその大部分が前期古墳に位置付けられるという想定は興味深い。かつて、本県的那須地方における前方後方墳は、駒形大塚古墳・八幡塚古墳・上下侍塚古墳などの存在で全国的にも知名度が高く、該地方特有の文化と理解されていた。しかしその後、県南の藤岡町に所在する山王寺大塚古墳が発掘調査により前方後方墳であることが判明したのを契機とし、県央部さらには県東部の芳賀地方においてもこの存在が指摘されるようになった。現在では、県内に20数基の前方後方墳を数えることができ、その分布も県内の主要河川流域ほぼ全体に及んでいると言える。しかもこれは、発掘調査されたいくつかの例や周辺の遺物の状況などから、ほとんどが前期古墳である可能性が高いとされている。言い換えれば、本県の各地域における出現期の古墳は、大部分が前方後方墳であるという状況を想定するに至っている。現在、全国には250基を越える前方後方墳が確認されている。今後、墳丘測量や周漕調査が活発に実施されれば、この数はさらに増えるであろう。しかし、以上のような状況下にある本県が、前方後方墳研究の上で全国的に最重要な地域の一つであることには、今後とも変わりがないであろう。

さて、今回研究の対象とした茂原古墳群は、栃木県の中央部に位置し、県北的那須地方を除けば比較的早くより前方後方墳の存在が確かめられていた古墳群である。特にこの可能性が注目されていたのは愛宕塚古墳であり、前方部が低いという墳形的特徴に加えて近距離で銅鏃が発見されていたこと、また周辺に弥生後期から古墳時代前期にかけての集落が多く分布していることなどから出現期の古墳であることも想定されていた。さらに興味深いことは、この愛宕塚古墳の北方にやはり前方後方墳とみられる大日塚古墳、権現山古墳（かつては、前者が帆立貝型の前方後円墳、後者が前方後円墳とみられていた）が並ぶことであり、前方後方墳が継続して築造されたとみられる地域でもある。このように、茂原古墳群は、本地域における古墳の出現とその後の展開を知る上で極めて重要であり、これらの内容が解明されることは本県の古墳文化研究に計り知れない影響を与えるものと考えられた。

以上のようなことから、われわれは昭和52年より本古墳群の本格的な調査を実施することとした。ただし、本古墳群の重要性は前述したとおりであり、貴重な文化遺産として永く後世に残されなければならないものである。従って、調査にあたっては墳形、規模、時期および埋葬主体部などを判断するための最低限の資料を得るに留め、周漕の全掘や墳丘築造状況の確認など遺跡の破壊に通じることは極力避けることとした。なお、調査の体制は次に示すとおりである。

調 査 体 制

愛宕塚古墳第1次～4次調査・権現山北遺跡第1次～2次調査（昭和52年3月～12月）

担当者 久保哲三 宇都宮大学助教授

参加者 小森哲也，藤沢敬幸，梁木 誠，山崎正男，石川美智子，伊津井芳子，牛島康男，薄井美知子，大島和子，谷井 彰，長谷川一朗，宮崎光明，渡部肇子，青柳三恵子，石川幸夫，小川晴代，大方俊吾，加藤修一，北井 清，小林仙哉，吉田土亨，斎藤 均，篠原菜穂子，田村一代，鶴見早苗，中村京子，野沢悦子，保坂育子，増山美年子，森 和昭，柳田正弘，飯田 誠，五十嵐勝巳，荻野直子，梶 和彦，金沢正子，上吉原明夫，小林富幸，高橋由勝，徳原久美子，直井正行，中山一郎，西田勇一，前原美彦，和気敏章，渡辺秀夫，渡辺照子（以上宇都宮大学学生） 斎藤一男，岩上照朗，石橋知明，小森紀男，水品信男，満石力也（以上宇都宮大学OB） 大草義造，榊原秀雄，高埜栄治，松尾秀紀（以上専修大学学生） 田熊清彦，下口昭子，中沢 悟，村田健二（以上専修大学OB） 五十嵐利勝，山崎芳家（以上下野考古学研究会）

権現山古墳測量調査（昭和56年4月～5月）

担当者 久保哲三 宇都宮大学教授

参加者 海老原裕子，川又政明，斉藤暁巳，佐藤恵子，大橋玲子，國府紀明，篠崎勝彦，福田十三男，若林 正，板橋礼子，黒羽 剛，小寺直子，染宮浩美，手塚靖子，藤田文子，増山 薫（以上宇都宮大学学生）

大日塚古墳第1次～3次調査（昭和58年7月～昭和60年8月）

担当者 久保哲三 専修大学教授

参加者 市川安子，岩月知子，大蔵雅之，大貫陽子，大森久美子，河俣雅久，木下真由美，黒羽 剛，國府紀明，駒場順子，小山宏之，今平利幸，篠原万里子，菅沼克博，関根穂高，長谷川操，藤田主計，増淵純子，築島佐知子，山崎弘貴，若林 正，渡辺直子，桐原博道，鈴木香代子，園部和枝，津布楽一樹，古口秀子，細田佳苗，宮本尚美，山田裕己，山本圭子，山本正仁，吉田 香，渡辺晶子，阿久津仁，川嶋千雪，佐々木真一，竹澤英生，多胡 均，田所幸子，丹野佳苗，船木明夫，堀越るみ，麦倉規子，村上智美，矢口久美子（以上宇都宮大学学生） 荒井敏光，海老原裕子，梶 和彦，川井健市，北井 清，水品信男，森 和昭，梁木 誠，柳田和子，柳田正弘，和気敏章，宮崎光明，小森哲也，小森紀男（以上宇都宮大学OB） 菊地雅彦，水沼良浩（以上早稲田大学学生） 茂木克美（専修大学学生）

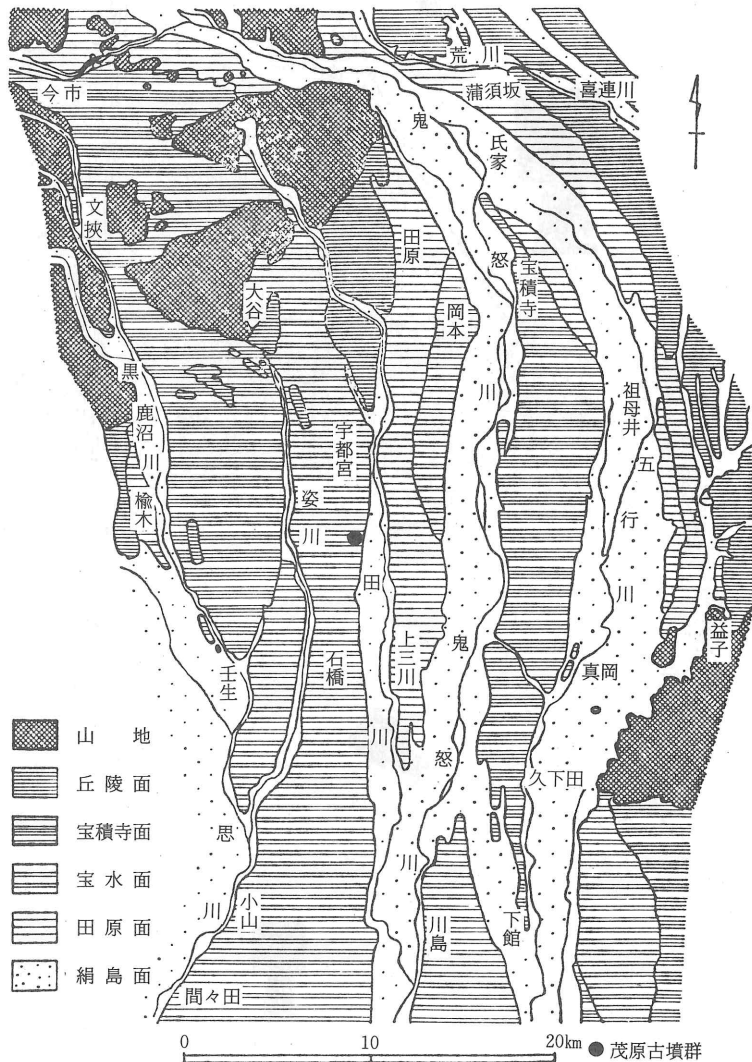
2 茂原古墳群の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

茂原古墳群は宇都宮市街より南方約10km、東北本線雀宮駅の南南東約2.3kmに位置する。南から順に本古墳群を概観すると、まず愛宕塚古墳があり、その北北西約100mには大日塚古墳、同じく北北西約400mには権現山古墳と、3基の前方後方墳がほぼ南北に分布している。さらに愛宕塚古墳の南西に小古墳(方墳か)3基、大日塚古墳の付近にもかつて古墳があり(墳形不明)があり銅鏃・管玉が出土している(第3図)。また権現山古墳の北東約100mには五領山古墳がある。この古墳は横穴式石室を伴うと判断され時期が下降する。権現山古墳の北約200mには権現山北遺跡があり、古墳時代前期～後期を中心とする時期の集落である(第2図)。

愛宕塚古墳は、宇都宮市茂原町412番地にあり、小字名は御馬前とする。大日塚古墳は茂原町401番地、小字名は同じく御馬前、権現山古墳は茂原町311番地、小字名は五領山である(第4図)。

本県の中央部及び南部には、東から五行川、鬼怒川、田川、思川等が南流しながら沖積地を形成し、関東平野北部の一画を占めている。この地域には、上記河川により南北に延びる台地と低地が交互に形成されている。標高やローム層の層序関係などを基準にして、形成時期の古い順から鬼怒川左岸の宝積寺段丘、田川右岸の宝木段丘、鬼怒川及び田川に挟まれ上三川付近



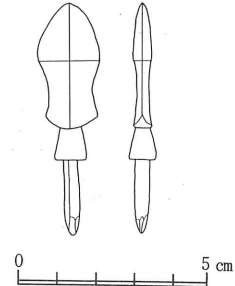
第1図 栃木県中・南部の台地と低地 (①より)



第2図 茂原古墳群および権現山北遺跡と周辺の地形

までのびる田原段丘，各河川沿いに分布する沖積低地である絹島面に大分されている（第1図）。

愛宕塚古墳と大日塚古墳は，田川及び姿川に挟まれ南北に延びる宝木段丘東端，標高約85mの台地上に立地し，東方約150mの崖下に広がる田川の沖積地との比高は約9mである。東方約1kmのところを田川が南流する。権現山古墳と大日塚古墳の間には浅い開析谷が入り込んでおり現況では水田として利用されている。権現山古墳は標高約80m，東側水田面との比高は3mと他の2古墳と比べてやや低位にある。



第3図 大日塚古墳周辺出土銅劔（鈴木長雄氏所蔵）

水稻栽培の受容に関しては，発達段階等社会的要因とともに，地理的な要因も勘案されなければならない。弥生後期の二軒屋式土器の濃密な分布を示すこの地域の気候は，いわゆる内陸性をしめし，関東平野の中では気温の年較差が大きい地域である。植生は暖温帯林とされ，台地上は，落葉樹林および常緑広葉樹林（照葉樹林）でおおわれていたであろう事が予想できる。一方，本古墳群を載せる宝木段丘の両側には，肥沃な沖積地が広がり，現在でも宇都宮市の農業用水の受益面積と取水量は，中規模の田川が群を抜いている事が示すように治水及び灌漑も比較的容易であった事がうかがわれる。水稻栽培の初期の段階においては田川及び姿川の沖積地や姿川沿いの

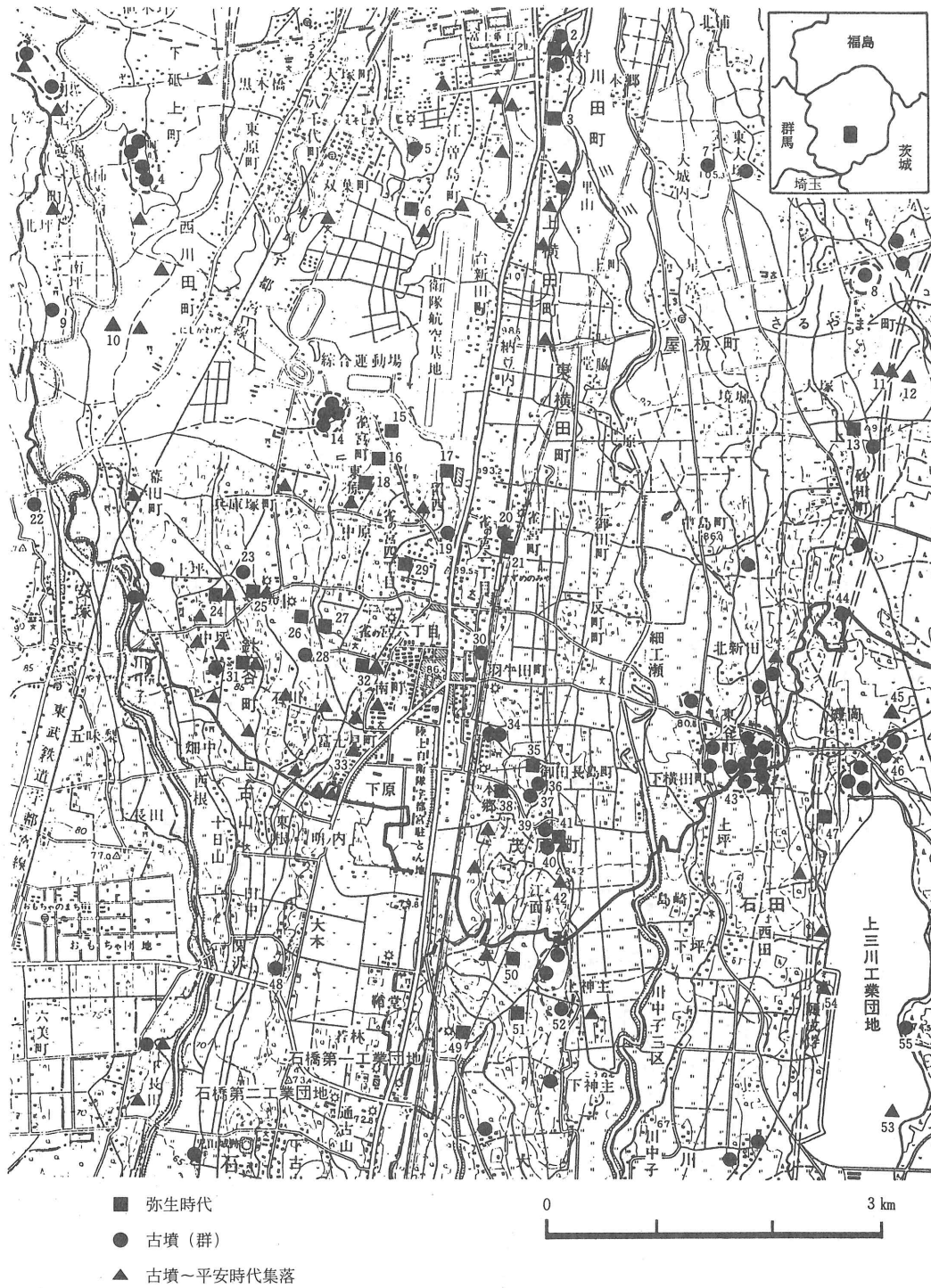
「針ヶ谷町」，田川沿いの「東谷町」，大日塚古墳と権現山古墳とのあいだに入り込む小さな谷の部分の字名「東谷田」「北谷田」などの地名があらわすような台地に入り込む小さな谷沿いで小規模な米づくりが営まれたのであろう。

宇都宮南部のこの地域は，縄文時代における採集経済を支える照葉樹林・中規模河川，その延長線上にある水稻栽培受容というしっかりした生産基盤をもち得るに足る気候条件・地形条件を兼ね備えている。このことは弥生後期二軒屋式土器が濃密に分布することの一大要因と考えられると共に，県央部にあっては最初に古墳が築造されるこの地域を考える場合に重要な意味を持つと考えている。一方鬼怒川流域に古墳文化がやや希薄なのは「治水できない大河川」であったためであろう。

交通に関しては，後述するが，鬼怒川の支流としての田川が，大きな意味での生産基盤になっていたであろうことは，両岸に多数の集落



第4図 茂原古墳群付近地籍図



第5図 茂原古墳群周辺の遺跡分布図

跡・古墳が散在することからして想像に難くない。

周辺の近年における宅地化・道路の整備はめざましいものがあり地形の改変、自然破壊が日々進んでいる。地理的・歴史的景観の記録を怠るとかけがえの無い遺産を我々は失うことになる。

(2) 歴史的環境

本古墳群が営まれた宝木段丘上は、県東部の五行川・小貝川流域とともに弥生後期後半の二軒屋式土器が濃密に分布する地域である。次代の古墳時代においてもひき続き多数の集落および古墳が営まれている。また古墳時代中期以降になると古墳及び集落の分布が広がり、田川を挟んで東側に南北に延びる田原段丘や姿川を隔てた壬生町周辺にも多数の遺跡が知られる。本項では、本古墳群周辺地域における歴史的環境を前代の弥生時代及び直接関わり合う古墳時代の遺跡を中心に述べる。なお、各遺跡に付した番号は、遺跡分布図（第5図）の番号と一致する。

弥生時代

周辺地域における中期の遺跡は、ほとんど確認されていない。後述する権現山北遺跡において古墳時代の住居跡及び穴跡の埋土中より同期の土器片が出土している程度である。しかし後期後半の遺跡は濃密な分布を示している。以下に表記する。（第1表）。

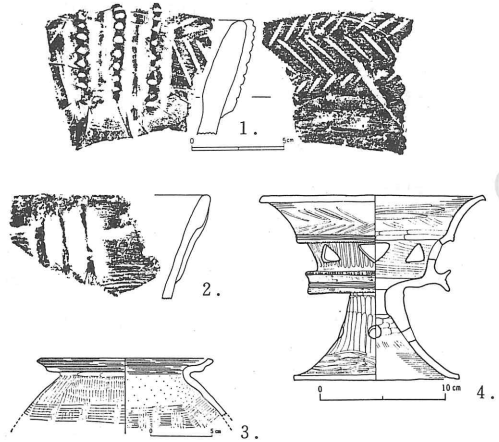
No	遺 跡 名	所 在 地	概 要（出土遺物・土器型式等）
2	東川田 A 遺跡	宇都宮市西原町・川田町	弥生（二軒屋式）・古墳（五領式）
3	東川田 B 遺跡	宇都宮市川田町	弥生（二軒屋式）
6	江曾島四丁目遺跡	宇都宮市江曾島四丁目	弥生（二軒屋式）・古墳（五領式）
13	瑞穂部内遺跡	宇都宮市下桑島町飛地	弥生
15	西原遺跡	宇都宮市雀宮町	縄文（中）・弥生（二軒屋式）・古墳
16	二軒屋遺跡	宇都宮市雀宮町	縄文・弥生・古墳
17	本田技研西遺跡	宇都宮市雀宮二丁目	縄文・弥生
18	東原遺跡	宇都宮市雀宮町	縄文（加 B）・弥生（二軒屋式）
21	雀宮駅東遺跡	宇都宮市雀宮一丁目	弥生・土師器・須恵器
24	上坪遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	弥生（二軒屋）
25	上坪新田遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・弥生・奈良
26	二子塚北遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・弥生
27	雀宮中西遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生（二軒屋）
29	裏山遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生
31	見明遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・弥生・奈良
32	天狗原遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生（二軒屋式）・古墳（五領式）
35	権現山北遺跡	宇都宮市茂原町	弥生（中～後）・古墳（五領～鬼高）・平安
38	北原遺跡	宇都宮市茂原町	弥生・土師器
41	愛宕塚東遺跡	宇都宮市茂原町	弥生（二軒屋式）・古墳（五領式）
47	磯岡 B 遺跡	上三川町磯岡	弥生
49	上原遺跡	上三川町多功	弥生（二軒屋式）・土師器・須恵器
50	後志部遺跡	上三川町上神主	縄文・弥生・土師器・須恵器
51	殿山遺跡	上三川町上神主	弥生（二軒屋式）・土師器・須恵器

第1表 周辺の弥生時代遺跡

これらの遺跡は、ほとんど学術的調査がなされず、推定の域を脱し得ないが、遺物出土量及び範囲、他地域の集落のあり方等から判断して大規模な集落跡の存在は考えられない。おそらく数軒程度の散在が予想される。宝木段丘の両縁辺近くに居住し、小さな谷沿いの「谷田」において小規模な水稻栽培が営まれていたのであろう。現段階では、本県においてはまだ弥生後期の“墓”は、確認されていない。この時期の社会構成は、はっきりしない面があるが古墳時代前代の様相の一端を示す遺跡立地のあり方である。

古墳時代

古墳時代前期の五領式土器を出土する遺跡の分布は、前代の弥生後期の遺跡と重複する場合（2 東川田遺跡・6 江曾島4丁目遺跡・32 天狗原遺跡・35 権現山北遺跡・41 愛宕塚東遺跡）がある。後期のどの時期なのか十分吟味する必要があるが資料的にやや制約があり果たせない。ただし、群馬県における弥生後期の樽式土器が北西部の山間部に、古墳時代前期の石田川式土器が南東部の平地を中心に分布するのとは、様相が異なり、分布が一部重複する点が特徴である。



1 雀宮裏原遺跡 (③より) 2 天狗原遺跡 (③より)
3 権現山北遺跡表採 (⑤より) 4 雀宮中央小学校所蔵 (④より)

第6図 周辺遺跡出土遺物

二軒屋式土器と五領式土器とは、器形的にも

セット関係にも大きな隔たりがあり型式的に連続しない。これは、本県における古墳築造開始という歴史的な一大画期が、共同体内部の構造の変化と共に外部からの影響を強く受けていることを物語る。二軒屋式土器と五領式土器が出土する遺跡は、付近には5遺跡しか確認されていない。しかし、この2つの型式をつなぐ型式が今のところ確認されておらず、今後も見出される可能性はほとんど無いと考えられる。この点において、時間的そして何にもまして二軒屋式土器を作りそれを使用した人間と五領式土器を作りそれを使用した人間とのかかわり合いは、非常に興味深いものがある。

周辺から出土した本古墳群出土土器との対比資料としては、雀宮裏原遺跡出土の口辺の内外面に羽状の疑似縄文を施し粘土紐貼付文に刻みをつけた壺の口辺部(第6図1)、32 天狗原遺跡出土例(第6図2)、本書の第4編で紹介する35権現山北遺跡表採のS字状口辺台付甕の口辺部(第6図3)等があげられる。以下、本古墳群周辺地域の主な古墳及び集落跡について簡単に述べる。

① 古墳 (第7図・第2表)

4 下砥上愛宕塚古墳 宇都宮市立姿川小学校付近にある下砥上古墳群中の径24.5m、高さ5mの円墳。両袖をもつ切石使用横穴式石室が開口している。奥壁は1枚、側壁は2枚の切石を2段に積む。石室と墳丘面で須恵器片が表採されている。

5 江曾島雷電山古墳 墳丘は、中世城館による変形や江戸末期から昭和にかけて削平されて

いるが、滑石製模造品（短甲・斧・鎌など）や鏡の出土が知られている。全長230mの前方後円墳とする説もあり、数少ない中期古墳として精査が望まれる。

14 塚山古墳群 塚山古墳（前方後円墳・95m）、塚山西古墳（帆立貝式前方後円墳・63m）、塚山南古墳（帆立貝式前方後円墳・55～60m）の3基よりなる。しかし周辺にはかつて多数の古墳が散在していたと伝えられる。1976年、塚山西古墳の周湟部分の記録保存調査がなされ、多数の円筒埴輪及び古式須恵器片、土師器等が出土した。5世紀後半代に位置づけられる。塚山古墳は

No	古墳(群)名	所在地	概要
1	聖山公園	宇都宮市上欠町	將軍塚古墳(円・30m)他円墳6基
4	下砥上古墳群	宇都宮市下砥上町	愛宕神社古墳(円・24.5m)他円墳3基
5	江曾島雷電山古墳	宇都宮市江曾島三丁目	墳形不明・前方後円墳の可能性有
7	下栗大塚古墳群	宇都宮市下栗町	大塚古墳(円・30m)他円墳1基
8	さるやま古墳群	宇都宮市下栗町	前方後円墳2基・円墳10基
9	下欠亀塚古墳	宇都宮市下欠町	前方後円墳(50m以上)・墳頂部に石室
14	塚山古墳群	宇都宮市西川田町	前方後円墳1・帆立貝式前方後円墳2・円墳多数
19	十里木古墳	宇都宮市雀宮町	前方後円墳?・凝灰岩切石使用石室
20	綾女塚古墳	宇都宮市雀宮町	前方後円墳(規模不明)・女子人物埴輪出土
22	壬生亀塚古墳	壬生町安塚	前方後円墳(55m)・前方部改変
23	針ヶ谷新田古墳群	宇都宮針ヶ谷町	円墳4基・凝灰岩切石使用石室
28	針ヶ谷二子塚古墳	宇都宮市針ヶ谷町	前方後円墳(45m)・須恵器提瓶出土
30	雀宮牛塚古墳	宇都宮市新富町	帆立貝式前方後円墳(56.7m)
34	多功神塚古墳群	宇都宮市茂原町	円墳2基
36	五領山古墳	宇都宮市茂原町	円墳(18m)
37	茂原権現山古墳	宇都宮市茂原町	前方後方墳(63m)詳細は本書
39	茂原大日塚古墳	宇都宮市茂原町	前方後方墳(35.8m)詳細は本書
40	茂原愛宕塚古墳	宇都宮市茂原町	前方後方墳(約50m)詳細は本書
43	東谷古墳群	宇都宮市東谷町	前方後円墳2・円墳12
44	琴平塚古墳	上三川磯岡飛地	帆立貝式前方後円墳(46m)
46	磯岡古墳群	上三川町磯岡	前方後円墳1・円墳4
48	文珠山古墳	石橋町上古山	墳形不明・鏡・剣・銅鏃・管玉出土
52	上神主古墳群	上三川町上神生	浅間神社古墳(円・58m)他前方後円墳2・円墳21
55	上郷瓢箪塚古墳	上三川町上郷	前方後円墳(68m)

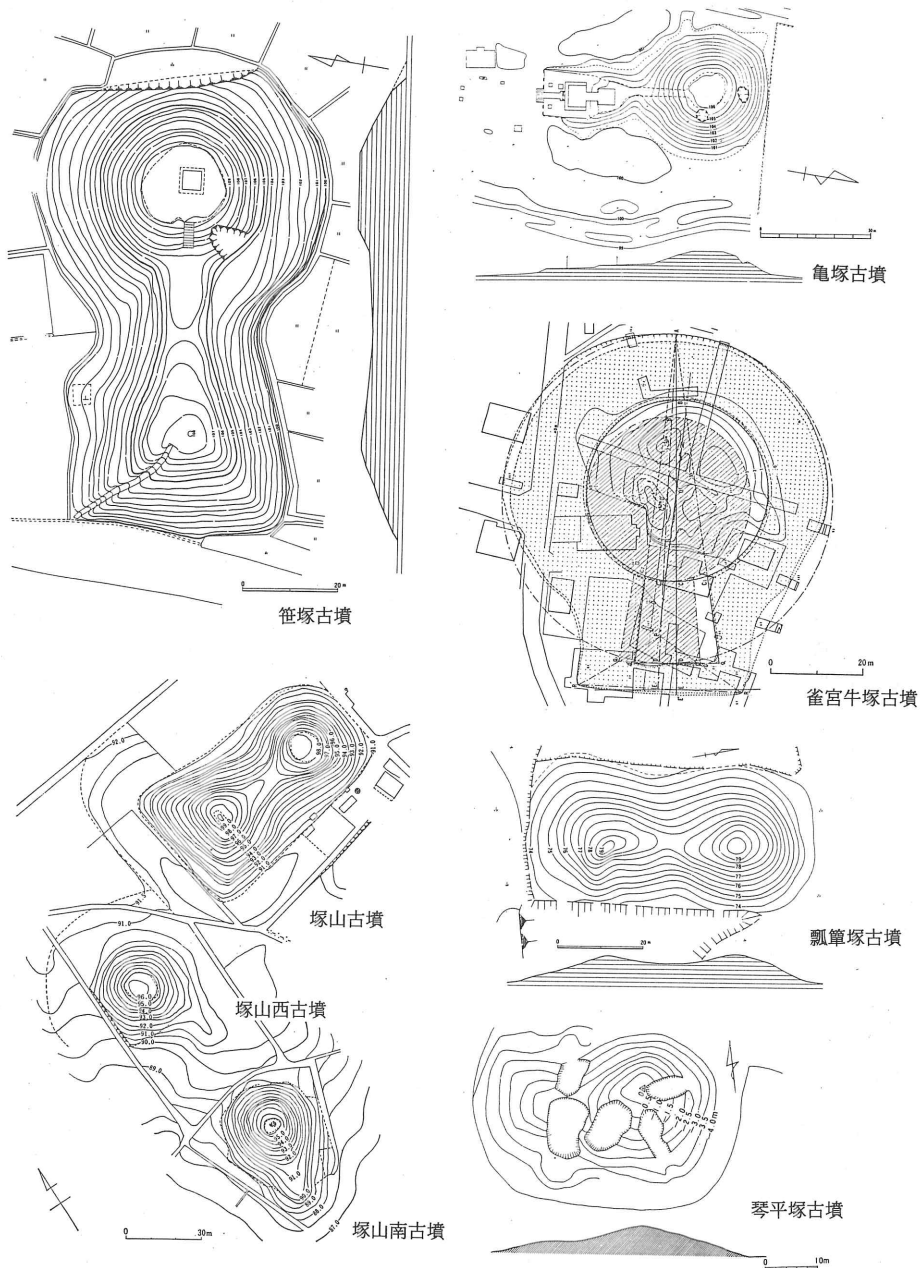
第2表 周辺の古墳

No	遺跡名	所在地	概要
1	聖山公園遺跡	宇都宮市上欠町	古墳時代後期34軒・奈良時代16軒
10	花の木町遺跡	宇都宮市西川田町	古墳時代前期8軒
11	さるやま遺跡	宇都宮市さるやま町	猿山A遺跡も含めて古墳時代後期～平安時代の住居跡10軒
12	瑞穂野遺跡	宇都宮市瑞穂台	
33	富士見向山遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	遺跡は不明であるが古式須恵器(坏身・坏蓋)出土
35	権現山北遺跡	宇都宮市茂原町	詳細は本書第4編所収
42	上神生庵寺跡	宇都宮市茂原町・上三川町	未調査・人名瓦等多数の瓦出土
45	西赤堀遺跡	上三川町西洋字西赤堀	奈良・平安時代10軒
53	大野遺跡	上三川町上蒲生	古墳時代中期1軒・後期6軒
54	願成寺遺跡	上三川町上蒲生	古墳時代中期の遺物出土

第3表 周辺で調査された集落跡・その他の遺跡

埴輪の特徴から塚山西古墳の前段階、塚山南古墳の埴輪は一型式新しい。本古墳群は5世紀後半を中心とする時期のものであろう。

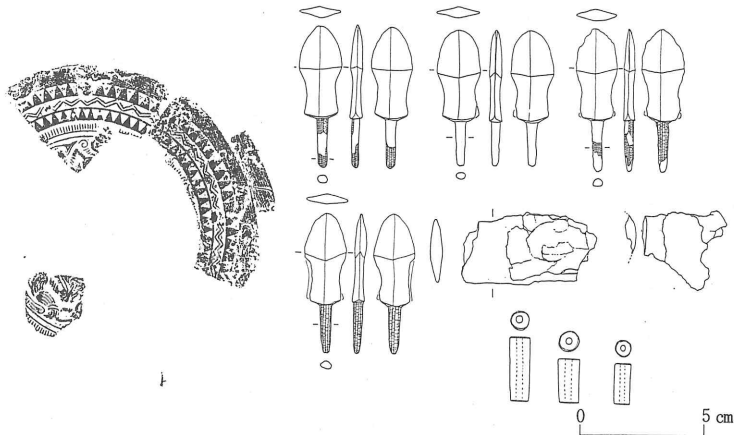
30 雀宮牛塚古墳 江戸時代から明治時代にかけて墳丘はほとんど削平されている。帆立貝式の前方後円墳で全長56.7m、後円部径39m、前方部は幅と長さが等しく17.7mである。画文帯神獸鏡，変形獸形鏡，五鈴五獸鏡，四鈴鏡，直刀，鈴釧，鈴杏葉，玉類，須恵器，埴輪等が出土し



第7図 周辺の古墳墳丘測量図(⑥~⑨より)

ている。須恵器は、5世紀後半段階の特徴を有し、5世紀後半～末の古墳と推定される。

43 東谷古墳群 茂原古墳群と田川を挟んで対峙する。立地は田川左岸の低段丘上である。笹塚古墳（前方後円・100m）を中心にそのすぐ南に接する鶴舞塚古墳（円・43m）、南東に位置



第8図 文殊山古墳出土遺物（⑩より）

する松野塚古墳（円・50m）、さらにその東方の車塚古墳（円・35m）、権現塚古墳（円・30m）等の大型円墳が分布する。北側には双子塚古墳（前方後円墳）が知られる。笹塚古墳は墳形及び埴輪の特徴から5世紀中葉に築造されたと推定される。

48 文殊山古墳 姿川河岸丘陵の西縁部に立地する。開田により完全に削平されてしまった。墳形・規模は地籍図等からも推定できない。副葬品は大正年間に出土したとされる鏡1、鉄剣の破片、銅鏃4、管玉3が知られる（第8図）。前期に遡る古墳と考えられ本古墳群から直線距離で3km弱と至近距離にある古墳である。

② 集落（第3表）

本古墳群が営まれた時期と一部重なる時期の集落である35 権現山北遺跡については第四編で触れることにする。調査が行われ内容が判明している遺跡は数少なく“墓”に比べて“集落”の検討が立ち遅れているのが現状である。

10 花の木町遺跡 姿川によって形成された非常に低い段丘上に立地する。古墳時代前期でもやや新しい時期の住居跡が8軒確認されている。当時の人々の居住域は高燥な台地に限らないことを我々に教えてくれる遺跡である。

33 富士見向山遺跡 出土状態等は不明であるが須恵器の坏蓋8点、坏身13点が出土している。祭祀に伴う遺物であろうか。第I型式の後半段階の須恵器である。これほど多数の須恵器が出土するのは異例のことであり5世紀後半段階の本地域の卓越した様相を物語る遺跡である。

周辺地域の古墳時代の遺跡を概観したが、最後に、前方後円墳・前方後方墳を中心に主要古墳の変遷を記しまとめとしたい。

前期に比定される古墳は、前方後方墳である大日塚古墳(39)、愛宕塚古墳(40)、墳形不明の文殊山古墳(48)で宝木段丘上の比較的狭い地域に集中する。権現山古墳(37)もこの系列の中に位置づけることが出来る。田川と鬼怒川に挟まれた南河内町磯部にも2基の前方後方墳が知られ、小地域を治める首長の存在が想定される。前方後方墳の時代である。

中期になると大型の前方後円墳である塚山古墳(14)、笹塚古墳(43)がそれぞれ宝木段丘上、田川を越えた田原段丘西縁にも築造されるようになる。前方後円墳が埴輪樹立の習と共に導入されたことが注意される。前期に比べてより広い範囲を掌握するようになった首長の姿を思い浮かべることが出来る。前方後円墳の時代である。

5世紀後半から6世紀初頭にかけては、雀宮牛塚古墳(30)、塚山古墳群(14)中の塚山西古墳、塚山南古墳のように帆立貝式前方後円墳が築造される。その後横穴式石室が導入される時期になると、周辺にはあまり前方後円墳がみられなくなる。一方、それまで古墳の分布の希薄だった宇都宮市北東部の北山古墳群の方にその中心が移って行くようである。しかし、円墳は周辺でもさかんに築造され続ける。本県域を巨視的にみるならば大型古墳の分布が宇都宮南部から県南部の小山市北部(摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳)に移ったとすることも出来る。

集落跡については、ほぼ古墳の分布と同じ傾向を持つようである。しかし古墳時代以降、本古墳群のある宝木段丘よりもむしろ田原段丘上にさるやま遺跡(11)、瑞穂野団地遺跡(12)、西赤堀遺跡(45)の調査にみられる様な大規模な集落が営まれるようになる。これは、あたかも上三川町多功付近から宇都宮市東部の鬼怒川沿岸地区を通ると推定される古代東山道を位置づける可能性もある。この様な背景のもとに上神主廃寺(42)の位置づけがなされよう。

つまり、本古墳群周辺地区は弥生時代後期から古墳時代中期にかけて県央部にあってはその中核となったであろうことが想定される。また、東国において前方後円墳が集中して築造される地域として、宮城県名取市周辺、本県北部の那須地域などと共に、前方後円墳の性格及び古代の下野国、ひいては東国の社会を考えると、非常に重要な意味をもつ遺跡と思われる。上野地方との関連でとらえられる県西部の足利地方を除けば、県域で初めて前方後円墳が採用された地域であり、茂原古墳群をその首長の母胎となる勢力の奥津城と考えてさしつかえあるまい。

(引用文献)

- ① 阿久津 純 1979「栃木県の地形・地質」『栃木県史』資料編考古一 栃木県
- ② 吉村 光右 1979「宇都宮の植生・水」『宇都宮市史』原始・古代編 宇都宮市
- ③ 堀 静夫 1976「天狗原遺跡」『栃木県史』資料編考古一 栃木県
- ④ 和気 敏章 1979「雀宮中央小学校所蔵の土器」『峰考古』第2号 宇都宮大学考古学研究会
- ⑤ 山ノ井清人 1979「古墳時代」『宇都宮市史』原始・古代編 宇都宮市
- ⑥ 栃木県史編さん委員会 1981『栃木県史』通史編1 栃木県
- ⑦ 常川秀夫・大金宣亮・石川 均・熊倉直子 1979『塚山古墳群』 栃木県教育委員会
- ⑧ 大和久震平 1969『雀宮牛塚古墳』 宇都宮市教育委員会
- ⑨ 上三川町 1982『上三川町史』 上三川町
- ⑩ 田代 隆 1984「文殊山古墳」『石橋町史』 石橋町

第1編 愛宕塚古墳

第1章 調査の経過

本古墳の発掘調査は、1977年3月9日より開始され、同年12月10日にすべてを終了した。実際には、この半年間を宇都宮大学の休暇スケジュールに合わせ、四次に分けて実施した。詳しい調査期間は、第1次調査が3月9日～4月13日、第2次調査が7月13日～8月25日、第3次調査が、9月28日～11月10日、第4次調査が11月18日～12月10日であった。各次調査とも、当初の予定より長引き、期日の延長の繰り返しであった。

調査はトレンチ法によって行ったが、学術調査の性格上、墳丘封土と埋葬主体部の調査以外は、極力古墳平面形を確認するにとどめ、「調査による破壊」を避けた。また地権者の方々の要望により、樹木の伐採は必要最小限にとどめた。そのため、トレンチの設定位置・本数が適切ではなく、拡張も制限され、周湟の調査は十分には行えなかった。確認した遺跡は、図取りに当って、従来の表現の他に、10cmコンター・ラインによる方法を併用した（本報告書では、20cmコンターに変更して図化した）。出土した遺物は、すべて原位置を記録した。

以下、各次調査ごとの経過と概要を述べる。

第1次調査

第1次調査は、周湟調査に主眼を置き、墳形・周湟の形状を確認することに全力を注いだ。まず、調査区約3000㎡の全域にわたり、5m方眼のグリッドを設定した。グリッドは、現在の墳丘の主軸線（N—2°—E）と平行する方向にアラビア数字、それと直交する方向にアルファベットをあてることにより、各杭の名称とした。これらの杭を基準点として、墳丘と周囲の測量を行った。トレンチによる調査は、墳端と周湟上に22本を設定した。特に、東西のくびれ部・前方部隅の墳裾部確認には、面での把握が可能ないように、グリッド法の性格をもたせた。墳形確認のため、墳裾の確認を急いだ。その後、周湟の調査に移った。

以上の結果、本古墳は従来言われてきたように、前方後方墳であることが確認された。しかし、周湟の形状については、いま一つ明確にはできなかった。また、後方部西辺墳裾に土橋状の部分を確認した。前方部西辺墳裾には、造り出しを想わせるロームの起伏が見られた。出土した遺物は、その多くが弥生土器・土師器の破片であるが、古墳の祭祀に伴うと考えられる古式土師器も数点見られた。

4月に入り、調査が写真撮影・図取りの段階で、本古墳の北方0.7kmに所在する権現山北遺跡の緊急調査依頼が、宇都宮市教育委員会より本調査団へあった。事が急を要するので、我々は協議の末、引き受けることとし、本古墳の調査は一応の成果を取めたので、4月13日をもって打ち

切った。

第2次調査

第1次調査の補足調査であるが、権現山北遺跡第2次調査と併行して実施した。作業の進行状況に応じ、両遺跡の間で人員の移動を行い、どちらかと言えば権現山北遺跡に重点をおいた。調査は毎日のように夕立に悩まされ、1次の調査で掘り上げたトレンチの多くが写真撮影・図取りが全く手着かずに残っていたが、降雨のたびに作業のやり直しが続いた。

前方部南側の周湟外側線と前方部西辺の造り出し状部分の確認の為に、新たにトレンチを設定した。前方部前端にも土橋状の部分の存在することが判明した。また、造り出し状部分は精査の結果、その存在が増々濃厚になった。

旧盆休みの後、数本のトレンチを残し埋め戻しを行い、8月下旬から、本調査団は権現山北遺跡に移り、本次調査を終えた。

第3次調査

本次は埋葬主体部の調査と墳丘封土（盛土）の築造状態の調査を目的とした。また、前方部前端の精査も併せて行った。埋葬主体部の調査は、後方部墳頂に設定したグリッドを、表土より移植ゴテで排土し、出土した遺物はすべて原位置を記録することとした。墳頂下約50cm掘り下げた段階で、壙穴と思われる平面形を確認した。これを壙穴と考えて掘り下げたが、底面にはなかなか到達できなかった。このことから、先の平面形を埋葬主体とすることに疑問を感じ、検討の結果、旧墳丘の主軸が現墳丘より西へ約140cmほど偏していることが判明した。即ち、埋葬主体部の中軸線も西へ偏する可能性がある。我々は、旧墳丘の主軸線を中心として、再度埋葬主体部の平面形の確認を行い、その南端はつかめなかったが、幅約4mの壙穴平面形の一部を確認したのである。

この時点で、当初の調査期間をすでに大幅に延長しており、一応の区切りが着いたので本次の調査を打ち切り、11月中旬よりの第4次調査に再度埋葬主体部の調査を実施することとした。

第4次調査

本次は第3次調査で確認した埋葬主体部の精査を目的とした。確認された壙穴の平面形は、幅（東西）約4m、長さ（南北）12mの大型長方形で、南辺が不鮮明であった。取りあえず、南北に1本、東西に3本のセクションベルトを設定して、壙穴の掘り下げを開始した。壙穴は予想以上に深く、約1.5m掘り下げて底面にたった。結局この間は盛土状の埋土であったわけであるが、副葬品などの出土を警戒したために、かなりの時間を費すこととなってしまった。なお、壙穴の南壁は、やはり確認されず、掘り進めていくとともに逆に外に開くことが確認された。

壙穴の底面を精査した段階で、幅約1.5m、長さ約6mの木棺の安置部跡を確認した。また、木棺の両小口部でも粘土を確認した。新たにセクションベルトを設定し、木棺部跡の掘り下げを開始した。40～50cmで丸味のある底面にたっし、櫛・玉・刀子などの副葬品が確認された。なお、鏡は、中央に残したセクションベルトの真下であった。以上で一応の調査を終了した。

第2章 墳丘と周湟の調査

1 発掘調査前の状況

墳丘全体は雑木に覆われ、後方部頂には杉の大木も見られる。前方部後方には木製の鳥居があり、後方部平坦面には、石の祠が祀られていた。

墳丘測量の結果、本墳は全長49mと確認された。ただし、後方部北側は溝により若干切断されている。後方部は、やや南北に長い平面形で、長辺28m・短辺24.8mであった。墳頂部平坦面は、それほど広くはなく、一辺が4.4mの不整形、高さは5mで、西側には土を掘り取ったあとがあった。くびれ部幅は13m、前方部幅は17m、高さ2.2m、低くて比較的狭い前方部である。また前方部端は、やや東側に向かって土が流れているのが認められた。

周湟は、北側だけが溝で切られているためはっきりしたことはわからないが、西側が最も広く16～22m前後、東側では10～18m前後の幅をもつ。また南側は、東側・西側に比べると狭く、幅4m程度の周湟で、現状から判断すると、北側にも南側と同様な幅をもった周湟があったと推定され、本墳の廻りには方形の周湟がめぐっていたと考えられた。

また、前方部南東方8mの地点に本墳の周湟をはさんで、直径10m前後、高さ1m程度の円墳(方墳とも考えられる)が存在する。これと同様な小古墳が、西側の雑木林の中にも2基存在する。

なお、本墳北側の水田、及び西側雑木林の標高は85m、東側水田の標高は83mである。

2 周湟の調査

周湟・墳形確認の目的で25本のトレンチを設定したが、ここでは個々のトレンチの説明を避け、古墳を7つの部分にわけて所見を述べる。

(1) 後方部北側 (第11図)

後方部北端の墳裾を把握する目的でT-18を設定した。水田と本墳のある雑木林との間を走る断面V字形の根切り溝が墳丘を削っており、墳裾部の確認があやぶまれたが、テラス部分を確認したにとどまった。テラス平坦面の標高は84.30mで、トレンチ内ではほぼ水平であり、最も近いT-4のテラス平坦面の標高とほぼ等しい。盛り土で築造された墳丘斜面はほぼ45°で立ち上がる。出土遺物はなかった。

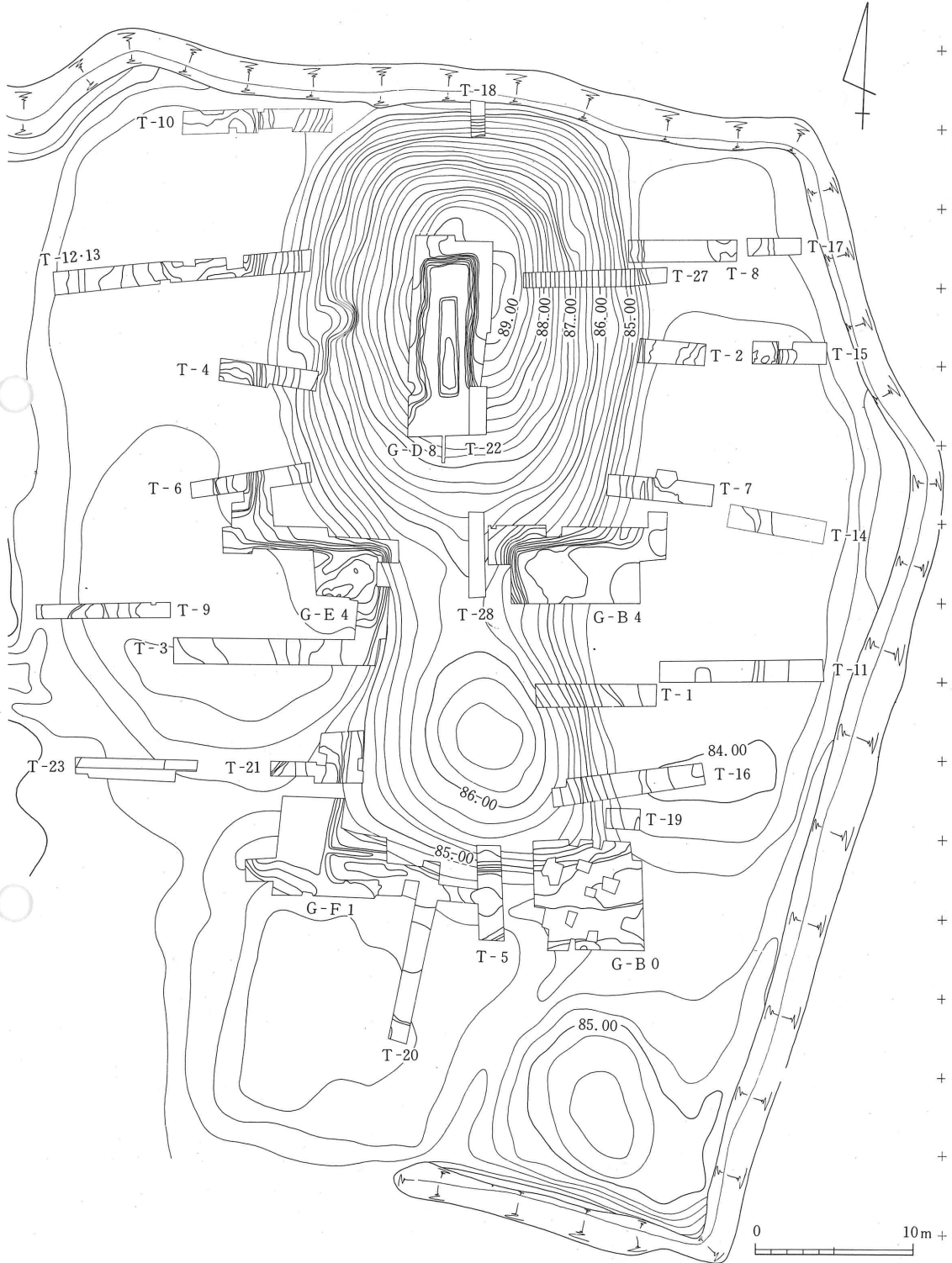
(2) 後方部西側 (第12・13図)

後方部西側にはT-4・10・12-13の3本を設定し、特にT-10では後方部北東隅を、T-12-13では周湟外側を確認する目的をもった。

墳丘測量図の所見では、周湟の存在をつかむことはできたが、後述する土橋の存在を予見することはできなかった。後方部西側はトレンチごとに複雑な状況で、トレンチ調査の限界を感じた。



第9図 愛宕塚古墳墳丘実測図 (1/400)



第10図 愛宕塚古墳トレンチ配置図 (1/400)

いずれのトレンチにおいてもローム層まで掘削して墳裾部と周湊をつくっていたが、土橋が墳裾部に取りつくこと・周湊底面が平坦ではないことから、墳裾と湊の接点の認定がむずかしかった。T-10では接点の確認が比較的容易であったが、T-4・12-13では土橋の端との屈曲部を確認することによって辛うじて把握することができた。この3点はほぼ一直線上に並ぶことから首肯できよう。

周湊底からの墳丘の立ち上がりは45~60°の角度で、硬いローム層を削っていたため確認は比較的容易であった。標高84.00~84.20mで幅1.5~2.0mのローム層の平坦面を形成していた。この平坦面の上に30~45°の角度をもって盛り土(封土)されていた。

T-4の周湊底面は北に高く、T-12-13では南に高くなっていることが認められた。すなわち、両トレンチの中心にむかって高く、土橋の存在を推定できる。残念ながら両トレンチ間に新たにトレンチを設定できなかったため、土橋の存在を明確にすることはできなかった。

T-12-13では、周湊外側の立ち上がりを確認した。底面よりなだらかに立ち上がり平坦なローム面となる。旧表土と考えられる層は認められなかった。

なお、テラスに1条・周湊外平坦面に2条の小溝があったが、土層断面の観察から後世の掘込みであることがわかった。

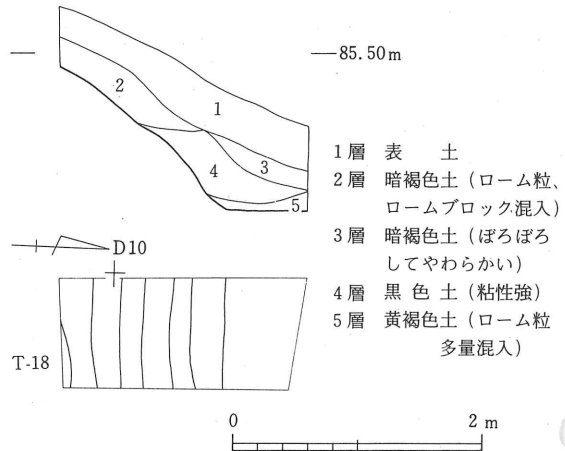
(3) くびれ部西側(第14・15図)

G-E 4, T-6, T-3, T-9は、墳丘くびれ部の西側部分に設定したもので、くびれ部および後方部南西隅を確認、周湊の形態把握を目的とした。

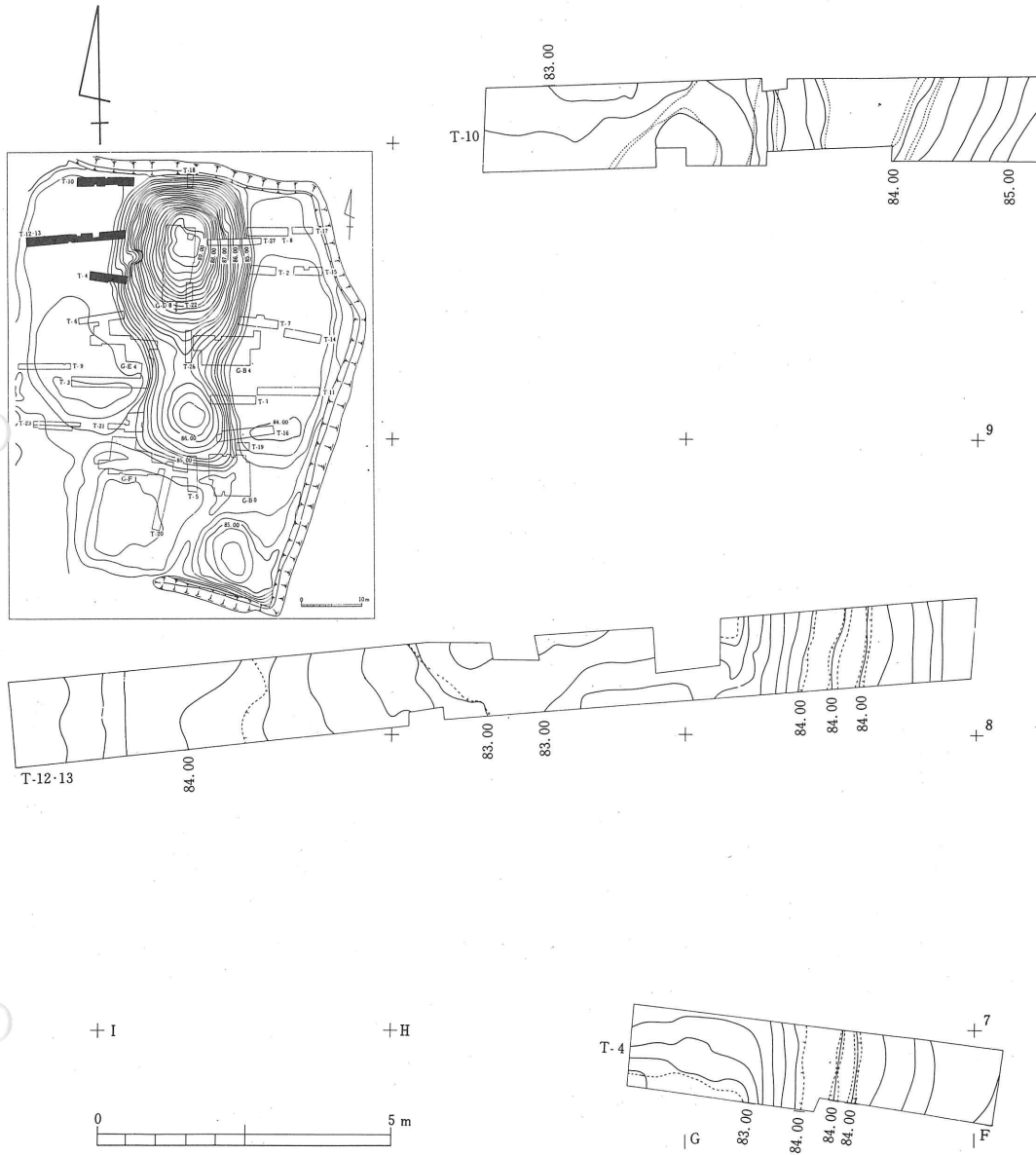
墳丘測量をした時点ではグリッドの中央部付近にくびれ部の墳裾部分が確認できると考えられたが、調査の結果、墳丘測量のくびれ部より2メートルほど内側に入り込んだ部分に築造時の墳端を確認した。また、くびれ部より後方部南西隅にかけての墳裾は、トレンチ幅が狭く、確認することが出来なかった。

くびれ部付近の墳丘は、ローム層を深く掘り込んで築造されていたので墳裾を明確にすることができた。墳裾は、ローム層を約120cm、周湊底から約70°の傾斜に掘り込み、削り出されていた。くびれ部より前方部にかけての墳裾の線は、直線的に前方部隅にむかって開くのではなく、後方部南側の墳裾の線と直角に約1.5mほど進んだあと、前方部にむけて開いていた。

くびれ部より後方南西隅にかけての墳裾は確認することが出来なかったが、くびれ部付近の墳裾線から見ると、直線的になっていると考えられる。このことは後方部南側墳丘のコンターライ



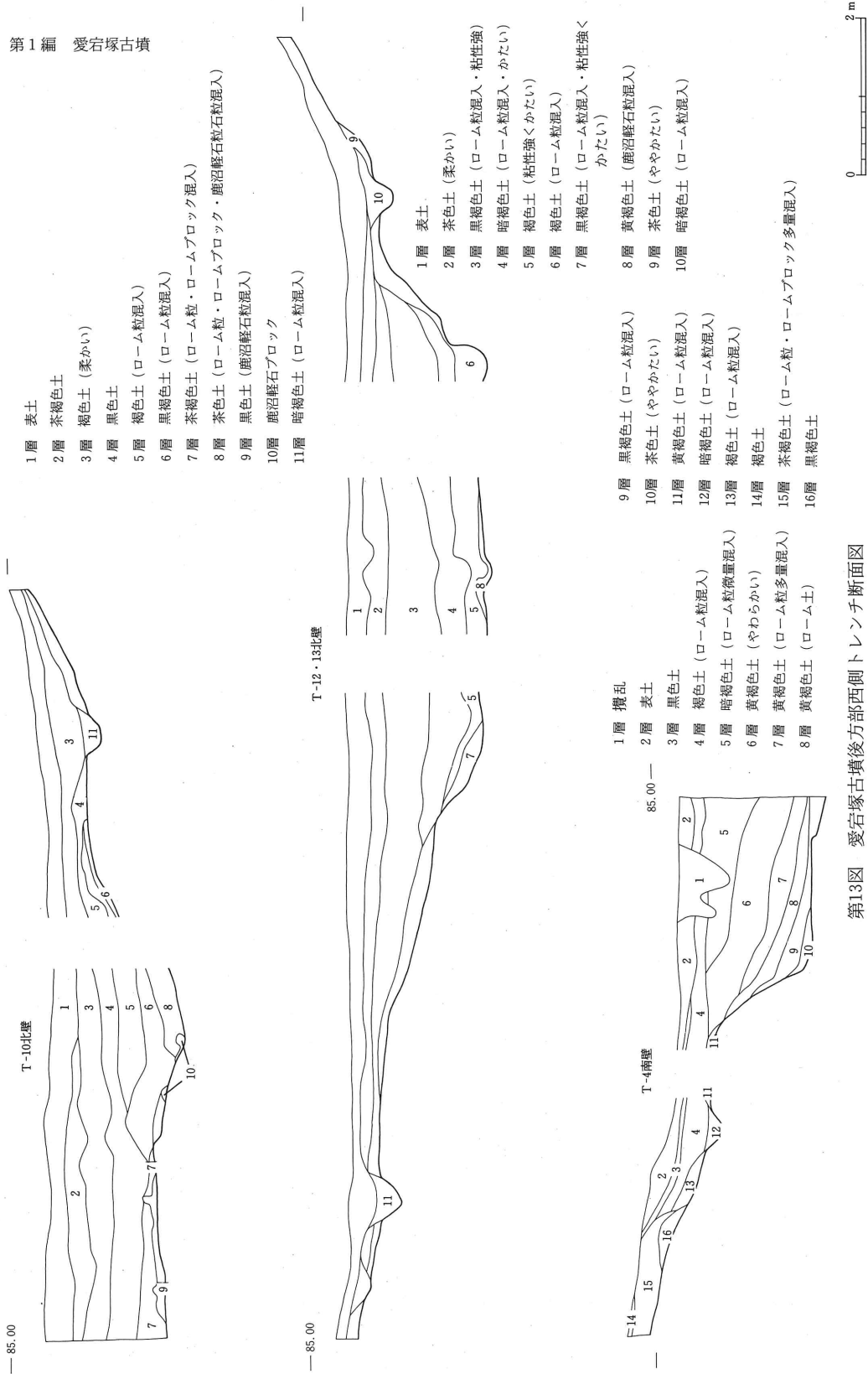
第11図 愛宕塚古墳後方部北側トレンチ平面図・断面図



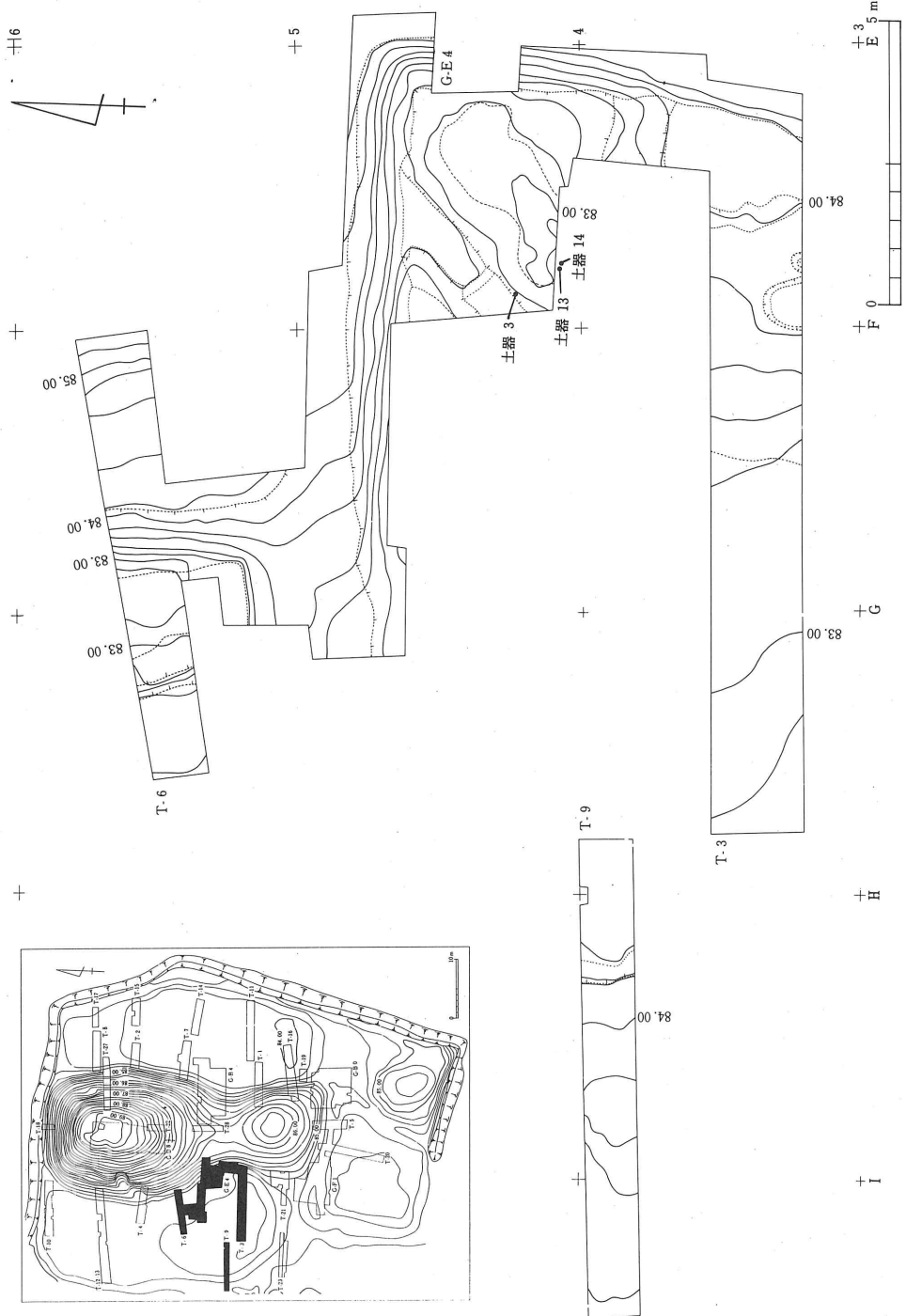
第12図 愛宕塚古墳後方部西側トレンチ平面図

ンが直線状に後方部南西隅にのびていることから考えられる。この線は、後方部西側の墳丘線とは交わらず、西側周湮方向にのびていて後方部南西隅は確認出来なかった。このためトレンチを北側のT-6方向に拡張したところ、後方部南西隅から西に向かって土橋状部分があった。土橋は、下端の幅が約2.5mで、西にいくにしたがって、高さが墳丘より低くなっていた。

周湮は、ローム層を削り出した墳丘と明確に区別される。周湮底は平坦ではなく高低の変化にとんでいる。後方部南西隅からは前述したように土橋が西にのびている。T-6では、墳丘にそっ



第13図 愛宕塚古墳後方部西側トレンチ断面図

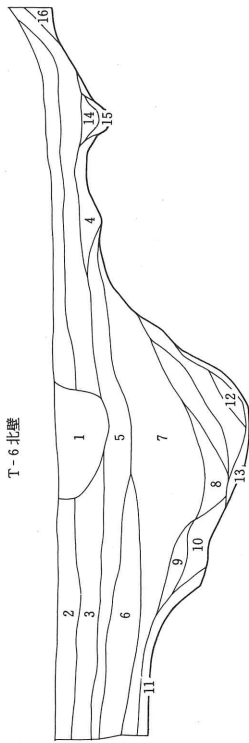


第14図 愛宕塚古墳くびれ部西側周辺トレンチ平面図

第一節 塚古墳

— 85.00

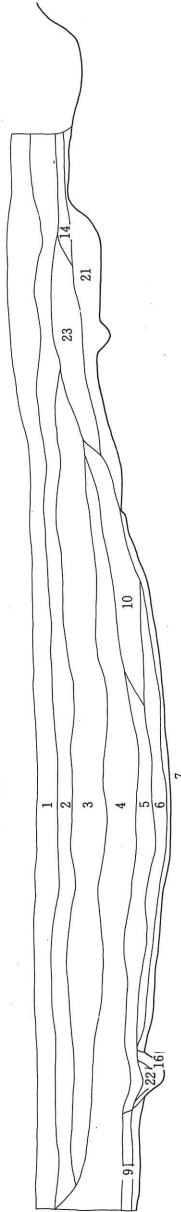
T-6 北壁



- 1層 攪乱
- 2層 表土層
- 3層 暗褐色土
- 4層 黄褐色土
- 5層 黒褐色土 (ローム粒混入)
- 6層 黒色土 (ロームブロック混入)
- 7層 暗褐色土 (ローム粒混入)
- 8層 黒色土
- 9層 黒色
- 10層 褐色土
- 11層 褐色土
- 12層 黄褐色土
- 13層 黄褐色土
- 14層 黄褐色土
- 15層 黄褐色土
- 16層 黒色土 (ロームブロック混入)

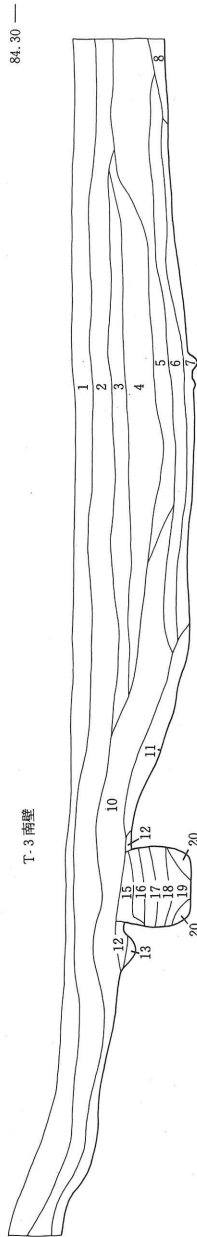
— 84.80

T-3 北壁

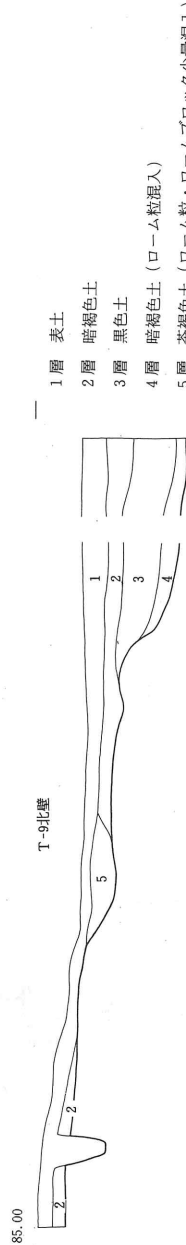


- 1層 表土
- 2層 暗褐色土
- 3層 黒褐色土
- 4層 黒色土
- 5層 淡黒色土
- 6層 暗褐色土 (鹿沼軽石粒混入)
- 7層 暗褐色土 (鹿沼軽石粒・鹿沼軽石ブロック混入)
- 8層 黄褐色土 (鹿沼軽石粒混入)
- 9層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック混入)
- 10層 黒褐色土
- 11層 暗黄褐色土 (やわらかい)
- 12層 暗黄褐色土 (かたたい)
- 13層 暗褐色土
- 14層 暗褐色土 (ロームブロック混入)
- 15層 黒褐色土 (ロームブロック混入)
- 16層 黒褐色土 (ロームブロック多量混入)
- 17層 暗褐色土 (ロームブロック混入・やわらかい)
- 18層 暗褐色土 (ロームブロック・鹿沼軽石ブロック)
- 19層 暗褐色土 (やわらかい)
- 20層 暗褐色土 (ロームブロック・鹿沼軽石ブロック混入)
- 21層 暗褐色土 (鹿沼軽石ブロック多量混入・かたたい)
- 22層 黒褐色土 鹿沼軽石粒混入
- 23層 淡黒褐色土 (やわらかい)

T-3 南壁



T-9 北壁



- 1層 表土
- 2層 暗褐色土
- 3層 黒色土
- 4層 暗褐色土 (ローム粒混入)
- 5層 茶褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量混入)

第15図 愛宕塚古墳くびれ部西側周辺トレンチ断面図



て幅約3m、深さ約1mに深く掘られている部分がある。G-E4ではくびれ部より西に80cmの後方部南側墳裾部から、上幅30cm、下幅90cm、高さ30cmの土橋がなだらかな傾斜で低くなりながら南西方面にのびている。この土橋と前方部墳丘に囲まれた部分の周湮底は鍋底状になっている。最深部は鹿沼軽石層まで掘りこんであり、ローム層上面との比高は180cmである。T-3の周湮はG-E4とくらべ前方部墳丘付近の深さが浅かったので北側に拡張したところ高さ約60cmほどの張出し部が墳丘からなだらかに低くなりながら西にのびていた。張出し部には、短径80cm、深さ80cmの長隋円状の穴があった。断面を見ると壁面がややオーバーハングしている。穴の外側には、周囲に固い暗黄褐色土があり口の部分を補強していると考えられた。穴の土層は水平位で、人為的に埋められ、位置から見て本墳築造時のものと考えられるが、トレンチ調査のため全容は不明で、遺物はなかった。周湮外側の立ち上がりはT-9に認められ、後方部墳丘と平行に延び前方部西側の張出し部にとりつくものと考えられる。トレンチ調査のため断言は出来ないが後方部の周囲には西側から南側にかけては長方形の周湮であったと推定される。

後方部西側に周湮から1.8mほど東側によった部分に幅50cmの小さな溝が確認された。この溝は墳丘を切るように南北に延びていて、堆積土から後世の溝と思われる。

周湮内の堆積土は、G-E4では、墳丘および南側の張出し部から落ちこんだローム粒を多量に含む層が認められた。他のトレンチでも墳丘および周湮外から落ちこんだ層があった。また表土層の下に暗褐色の土層があり、T-6では、この層が墳丘を削るように墳丘側にのびていることから後世の耕作土層ではないかと推察できる。

出土遺物としてはG-E4周湮最深部付近で壺1個体とその上部から埴2個体が出土した。壺はくびれ部より南東に1.5mの地点から出土した。胴部の縦半分が内面を上に向けて周湮底より15cmほど浮いた状態で出土した。その北西に近接して同じように浮いた状態で同一土器の口辺部が下向きの状態で出土した。刺突を入れた小さな粘土紐貼付文を広口口辺の帯状口縁に等間隔に施してある。外面全体及び口辺部内面が赤色になった土器であり、G-B4出土のものとはほぼ同形同大である。しかしこの土器は、G-B4の土器とちがい出土状態からG-E4南側の張出し部に置かれたものが転落したものと考えられる。このことは同一土器の破片が南側から落ちこんだ様な状態で発見されたこと、破片全部をあわせても一個体分の土器の量がなく未発掘部分に遺存していると考えられることから推察出来る。この壺の破片の出土場所の10cmほど上から同じように南側から転落した状態で埴が2個体出土した。1つは口辺がわずかに内弯するもので底部を欠いている。もう1つは口辺部がまっすぐに外傾するもので、胴部の半分を欠いている。湮底からは60cmほど浮いているが、前述したように壺の破片と同じ出土状態を示すことから、壺が落下してからある時期を経過した段階で埴が落下したと考えられ、ともに祀りにかかわりのある土器であろうか。

(4) 前方部西側 (第16～19図)

G-F1とT-5・21は、前方部南西隅付近の墳裾および周湮の状態を明らかにするために、T

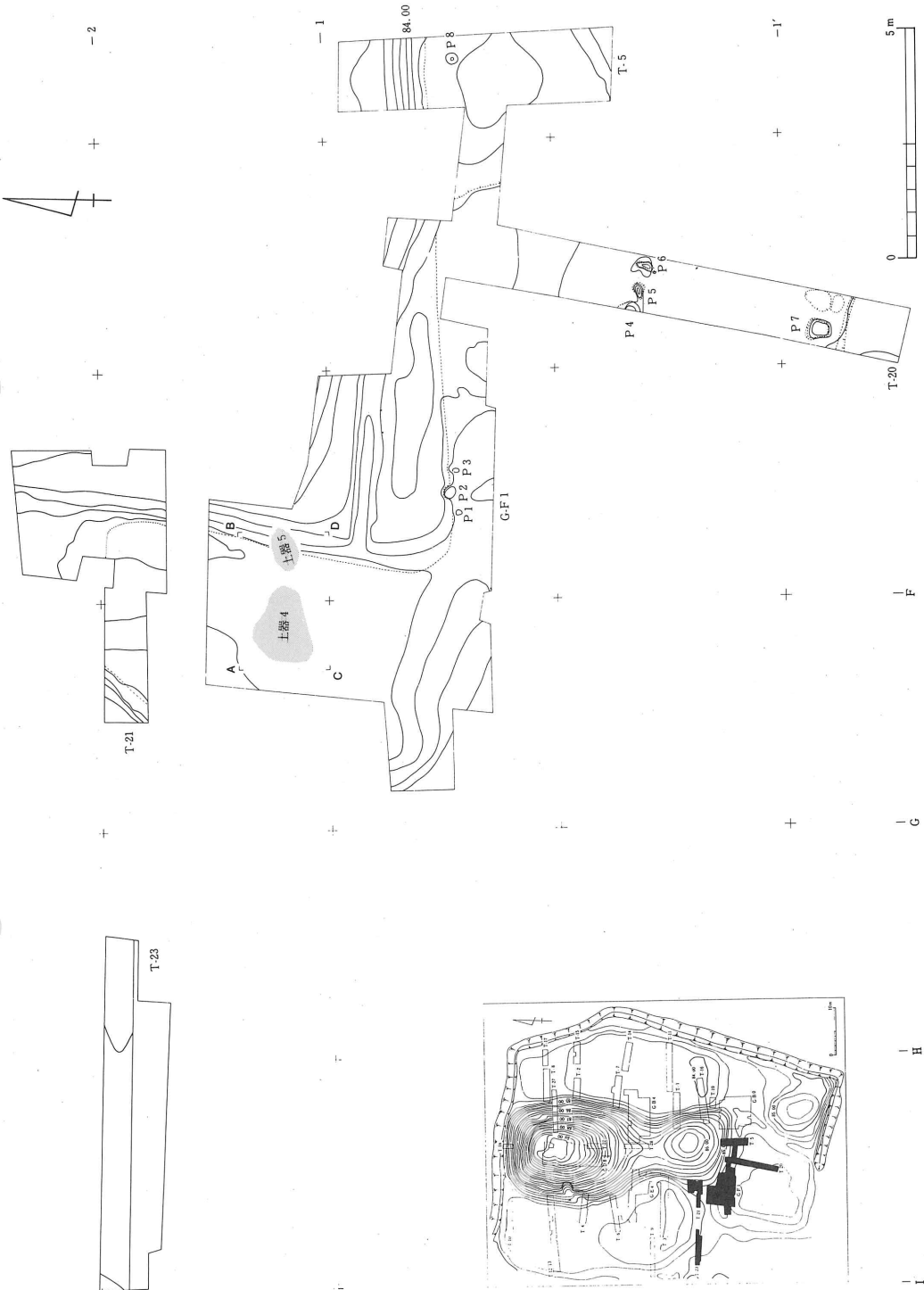
-20・23は周湟の幅を確認するために、それぞれ設定したものである。またG-F 1の設定は、発掘前の墳丘測量の結果この付近の墳裾線が他と比較して歪みの大きいことが確認されていたため、その原因を明らかにする目的も持っていた。

まず墳裾部はG-F 1およびT-5において適確に確認することができた。とくに前方部南西隅にあたるG-F 1では、約80°の角度をもって折れ曲る墳裾線(標高83.4~73.5m)を確認することができ、前方部前端的なほぼ中央にあたるT-5で確認された墳裾への直線的なつながりも明瞭にすることができた。一方、前方部西側にあたるT-21においてはやや状態が異なり、G-F 1で確認された墳裾線をそのままとると西へ突き出るような形になってしまうことが判明した。しかし、これは後述する周湟の特異な形状に起因するものであり、全体的には前方部南西隅からくびれ部に向ってほぼ直線的な墳裾をおさえることができたものと思われる。なお、T-5では墳裾から墳丘への立ち上がりが明瞭に確認されたが、第17図の断面図でもわかるとおり比較的角度が急(約65°)であり、ほとんど間を置かずに墳丘盛土へ移行するという状態であった。

ところで、G-F 1で、発掘前の疑念どおり後世における変更のあったことが確認された。変更は少なくとも2回に亘るものであった。1回目は幅2.7m、現表土上面からの深さ約50cmの溝が、明らかに墳裾部を削ってほぼ東西に掘られたものであり、2回目は1回目の溝とほぼ重なる位置に幅約1.2m、現表土上面からの深さ約90cmの溝(断面V字形)が掘られたものである。つまり、墳丘測量時にみられた墳裾線の歪みは、これら2条の溝が前方部前端を斜めに切るように掘られたために現われたものであったことが確認された。

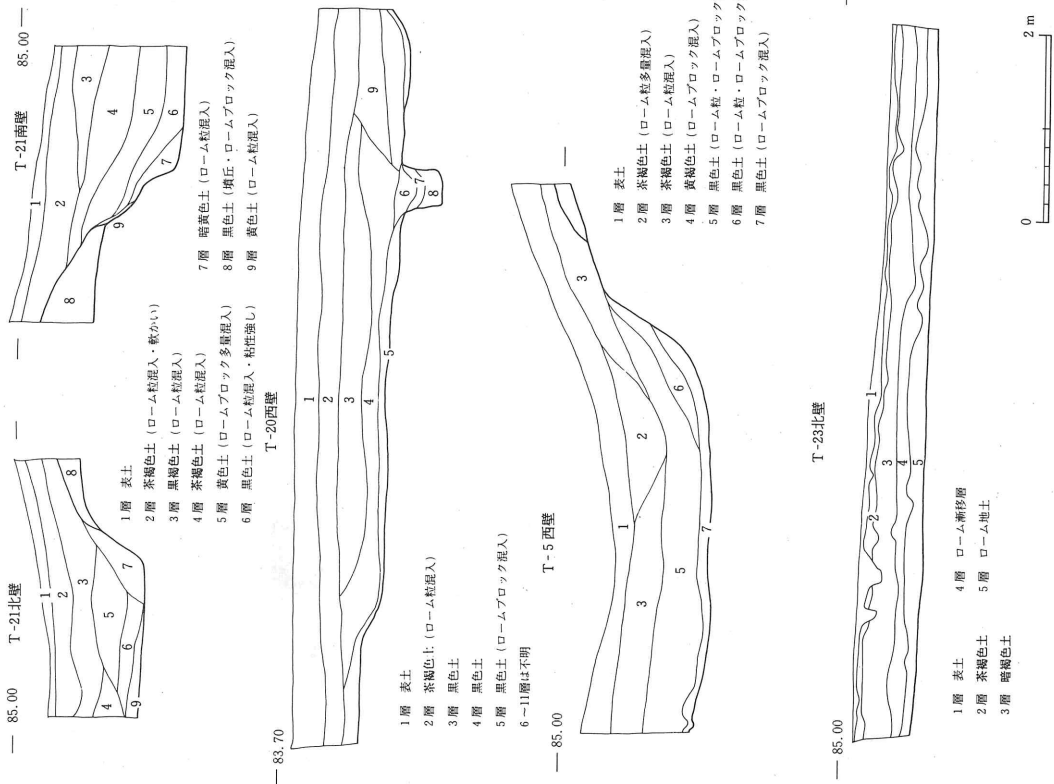
以上のように墳裾部が比較的明確であったのに対し、周湟の状態は複雑であった。全体的にはローム層を切り込んで形成されているわけであるが、その深さは一様でなく、50~60cmと深い部分(G-F 1の西および南側やT-5内)、逆に20~30cmと浅い部分(T-21の北側やT-20内)と様々である。また、底面も変化に富み、T-21内では北および西側に向って高まり、G-F 1では南東へ向って高まる、T-20では東西両側へ下がる、さらにT-5では南東に向って高まる状態が、それぞれ認められた。つまり、この前方部南西隅付近の周湟内においては、隅の部分を含んだ西側と南側および前方部前面中央付近の3か所が大きな掘り込み状になっている状態を推定することができた。なお、周湟の幅については、T-20の南端で外側の立ち上がり(墳端部から約9m)が確認され、前方部前面の幅をほぼ把握することができた。しかし、西側に設定したT-23においては周湟を確認することができず、この部分での幅はかなり狭くなることが判明した。

前方部前面の周湟内からは、いくつかの小穴が確認された。まず、G-F 1内では、南西隅寄りの墳端部付近に3口の(P₁~P₃)小穴がほぼ東西に並んで確認された。また、T-20内では、墳端部から約4m南の位置に3口(P₄~P₆)、同じく約8m南の位置から1口(P₇)が確認された。そしてT-5内では、前方部前面のほぼ中央で墳端部から約50cm南の位置より1口(P₈)確認された。これらの穴は、埋積土層の状態からいずれも後世のものとはみられず、築造時に近い時期のものと思われる。なお、G-F 1内、P₁~P₃の南約1m付近の周湟底面には、半径約50cmの範囲



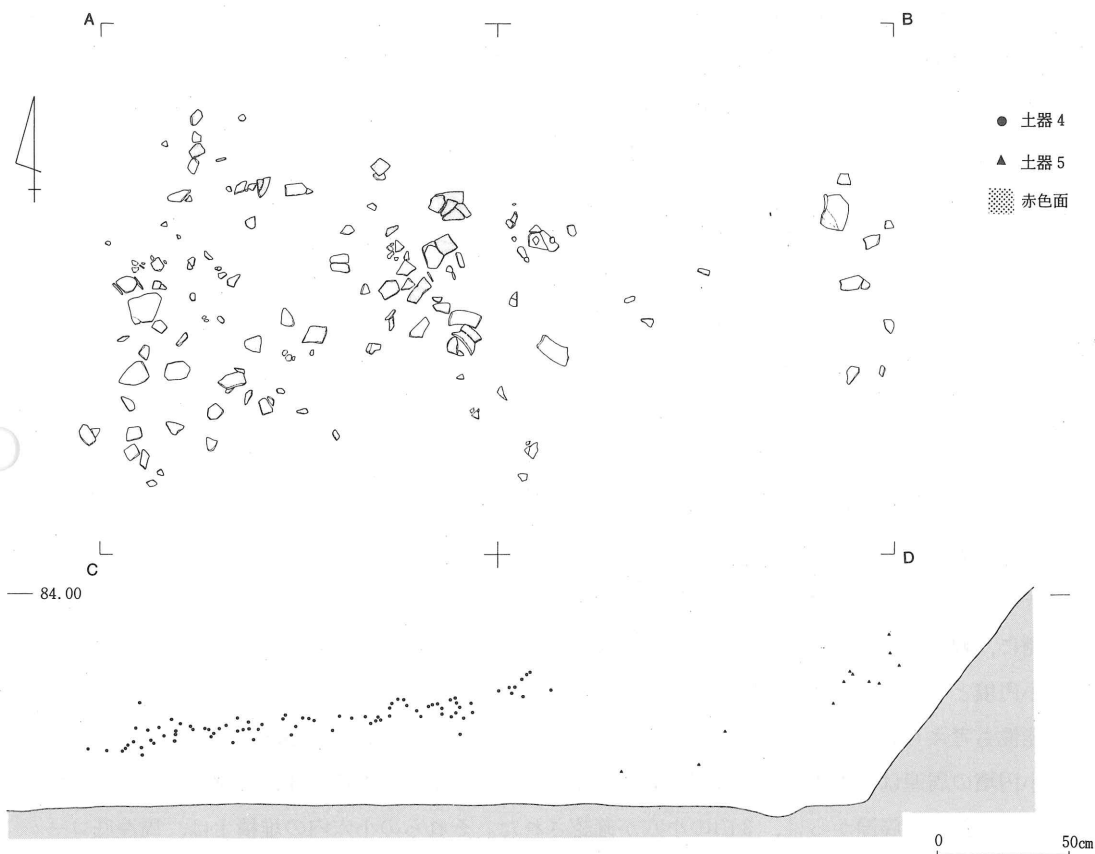
第16図 愛宕塚古墳前方部西側トレンチ平面図

第1編 愛宕塚古墳



第17図 愛宕塚古墳前方部西側トレンチ断面図

第18図 愛宕塚古墳前方部西側グリット断面図



第19図 愛宕塚古墳G-F 1 土器4・5出土状況図

に焼土と炭化物が集中して確認された。

G-F 1 付近の周湮内からは、比較的多くの弥生・土師器片が出土した。そのうち図化できたものはT-21内出土の台付甕の台部1点、G-F 1内出土の壺2点と台付甕の台部破片およびG-F 1内とT-20内で接合した壺1点の計5点である。このうちG-F 1内の2点の壺の出土状態(南西隅より北へ約3m付近)については後述するが、層位的にも極めて興味深いものであった。

(5) 前方部東側 (第20図)

G-BO は前方部南東隅確認のために設定し。当初は5m×5mのグリッドで掘り進めていったが、隅をはっきり確認できる見込みがないので、途中から7m×7mに拡張したものである。またこのグリッドは本古墳南東部に在る小円墳との関係を明らかにするためにも重要である。

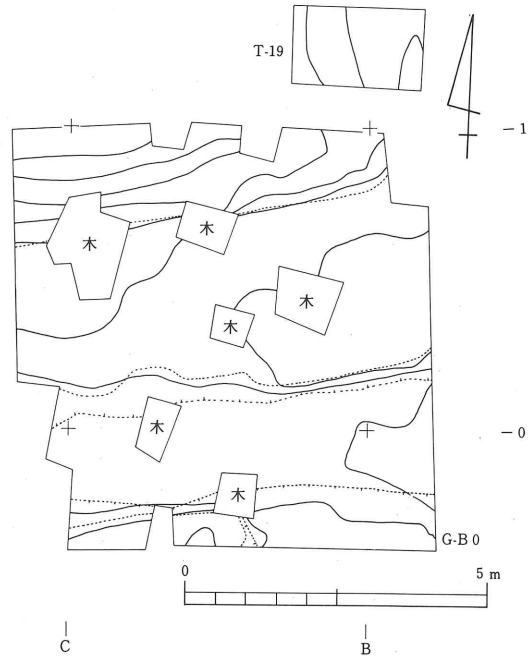
グリッド内には雑木が多数繁茂しているので、本来ならそれらを伐採するところであるが、地主の意向もあり、それらをすべて残して発掘作業が進められた。そのため作業は、なかなか困難なものとなり、結局は隅の確認が不成功に終わった。

まず、周湮底を確認することから始め、そこから墳丘の立ち上がりを追っていった。周湮はローム層を切り込んでいて、比較的緩やかに、平坦面をもつように立ち上がっている。墳丘面は、ロー

ムの上が黒色土で覆われている。前方部側面（T-5，第17図）では，墳丘の立ち上がり
が急であるのに対し，東側にいくほど緩やか
になっている。これは，T-16にでている平坦
面に続くものと考えられる。しかし，立木
がじゃまになって連続的に墳裾部を認められ
ないのが残念であった。

周湟底はローム面にあるが，グリッド内
での高さは一様ではない。西側は，G-F 1
で確認された周湟底よりも高く，東側にいく
ほど低くなり，G-F 1のそれとほぼ同一の
高さになっている。

周湟の幅は，3.5～4 mで他の所に比
べるときわめて狭い。これは，本古墳の周
湟の反対側に，幅2 m程のテラスをはさん
で存在する小円墳との関係から幅が制限さ
れたという可能性も考えられる。



第20図 愛宕塚古墳前方部東側グリッド平面図

小円墳の周湟は，本古墳とほぼ同じ高さに
作られているが，本古墳同様，東側ほど高
く，西側は50cm程低い。周湟からは，3
口の小穴が確認された。それらの小穴内の
堆積土は，周湟底ローム面のすぐ上に堆積
していたものと同様のローム粒混入黒褐色
土であった。このことから，これらの小穴は
，周湟と同時に作られたものと言える。そ
れは，小円墳から，両古墳間にあるテラス
へ土橋をかけたことを示唆するかもしれない。

本古墳の周湟堆積土は，ローム粒混入の
黒色土層であり，小円墳のものと類似す
る。また，テラスより上は双方とも，茶
褐色土層で覆われている。

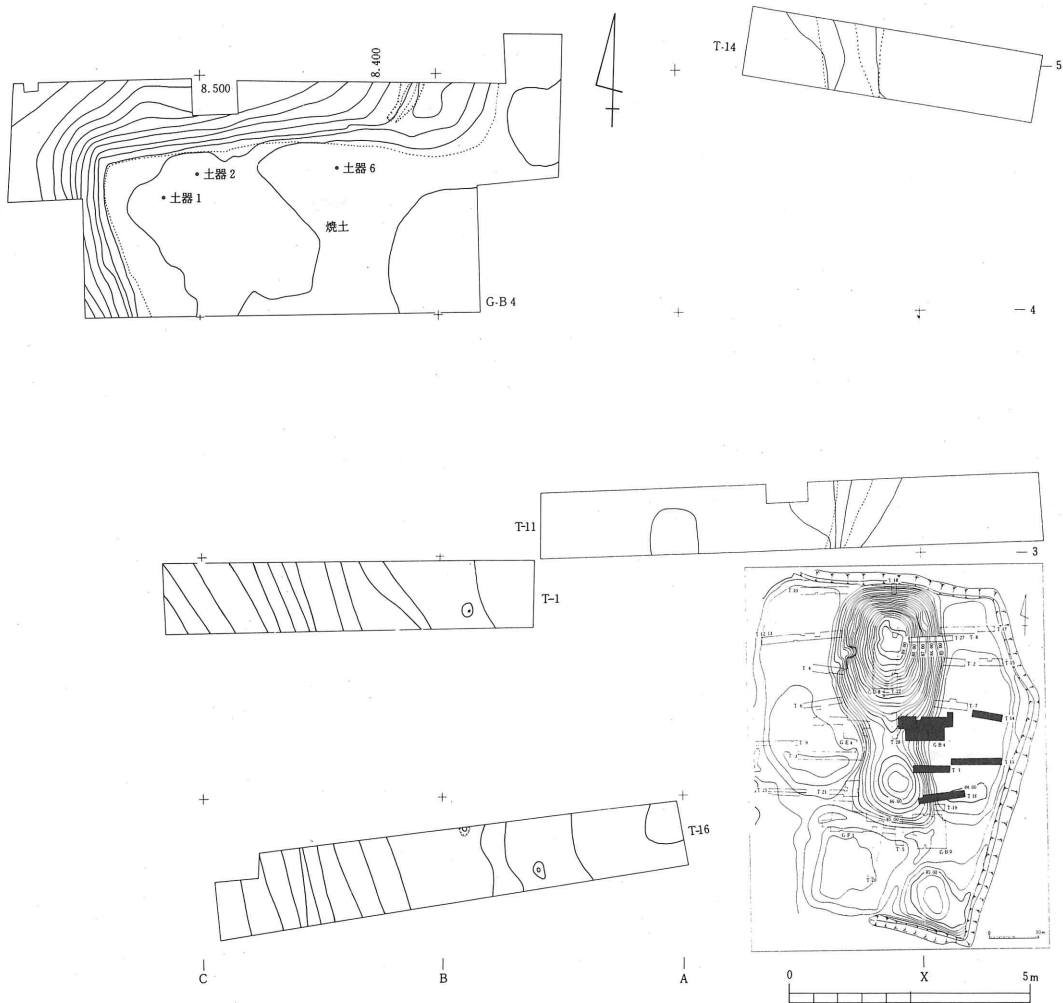
出土遺物は，少量の土師器片だけである。

以上のように，小円墳との関係は明らか
になったが，肝心の前方部南東隅は確認
できなかった。これは，墳丘実測図をもと
に隅がかかるとしてグリッドを設定した
ので，見かけの墳丘にだまされてしまっ
たためである。土の流出が南東方向に激
しかったためである。そのためすぐ北側
にT-19を設定し，そこで確認された墳
裾と本グリッドで確認された墳裾とを延
長し隅を推察するに至った。

(6) くびれ部東側（第21～24図）

G-B 4は，前方部と後方部の接点，い
わゆるくびれ部の東側部分に設定したも
のであり主としてくびれ部および後方
部南東隅の確認，周湟の形態把握を目的
とした。

当初，周湟測量が終了した時点で，墳
丘の形状から見て，確実にくびれ部が
つかめると思われ

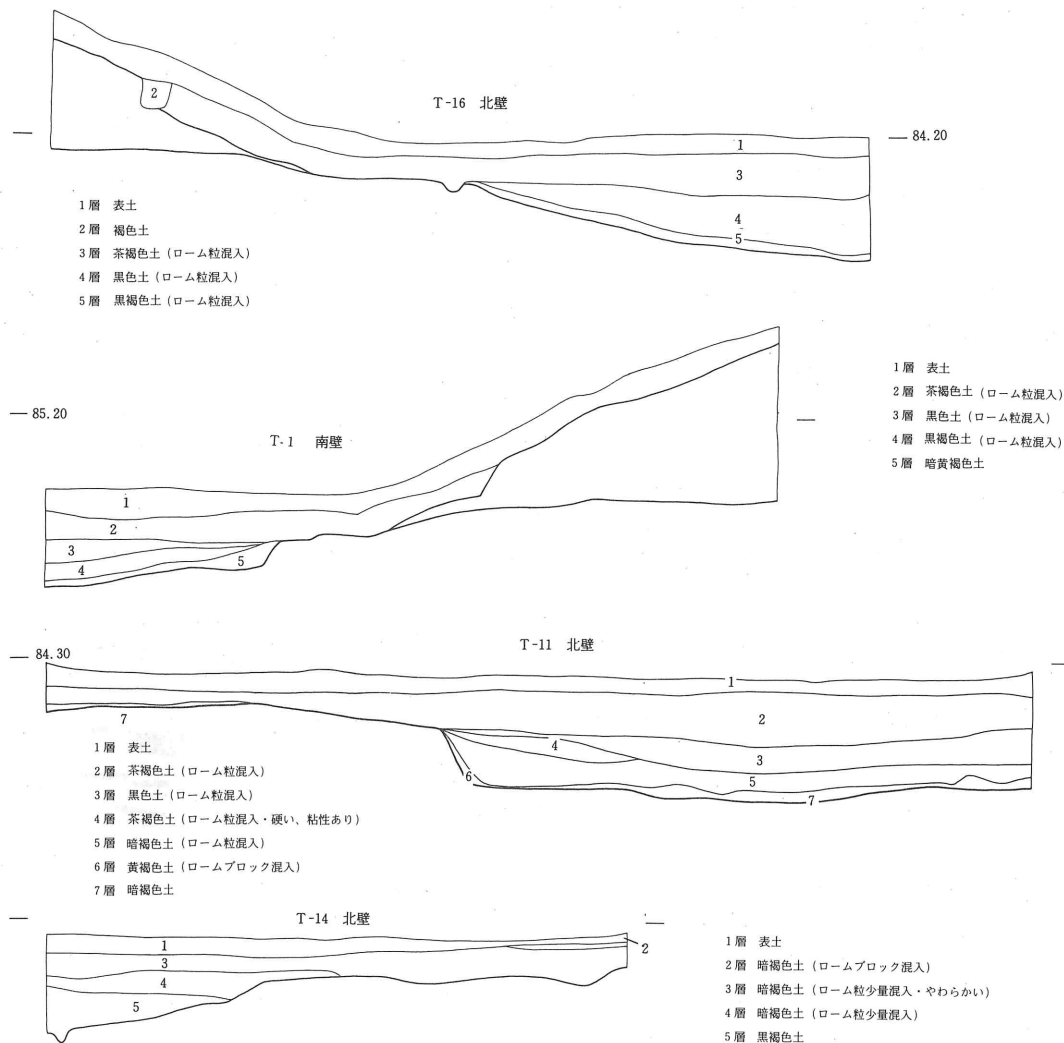


第21図 愛宕塚古墳前方部東側トレンチ平面図

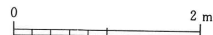
る部分にグリッドを設定して調査を始めた。しかし、調査の結果は予想をはるかに越えて、現況のくびれ部の約4 mほど内側に入り込んだ部分で築造時の墳裾部が確認された。墳丘測量図をもとにして墳丘形態・築造計画について論じられる場合があるが、千数百年の年月を経た現在の古墳の形状は、かなり変形していることが確かめられ、十分注意を払う必要があることを調査者一同改めて痛感させられた。

墳裾部は、ローム層を約50cmほど掘り込み、周湟底からは50～60°の角度であった。つまりロームを削り出す形である。したがって堆積土量が多いことを除けば比較的容易に確認することが出来た。くびれ部より前方部にかけての墳裾線は、そのまま前方部隅に向かって直線に開かず、約1 mほど後方部南側の墳裾線と直角に進んだあと前方部にむけて開いて行くような形状が認められた。これは本グリッドとすぐ南側に設定したT-1の断面にあらわれた墳裾部との関係からも

第1編 愛宕塚古墳



第22図 愛宕塚古墳前方部東側トレンチ断面図



明瞭である。

くびれ部より後方部南東隅にかけての墳裾線はほとんど直線的で、長さ約8.1mである。この線と後方部東側線とは、ほぼ直角に交わるが、その接点は、きちんと角を持つものでなくやや丸みを帯びたものとなっている。

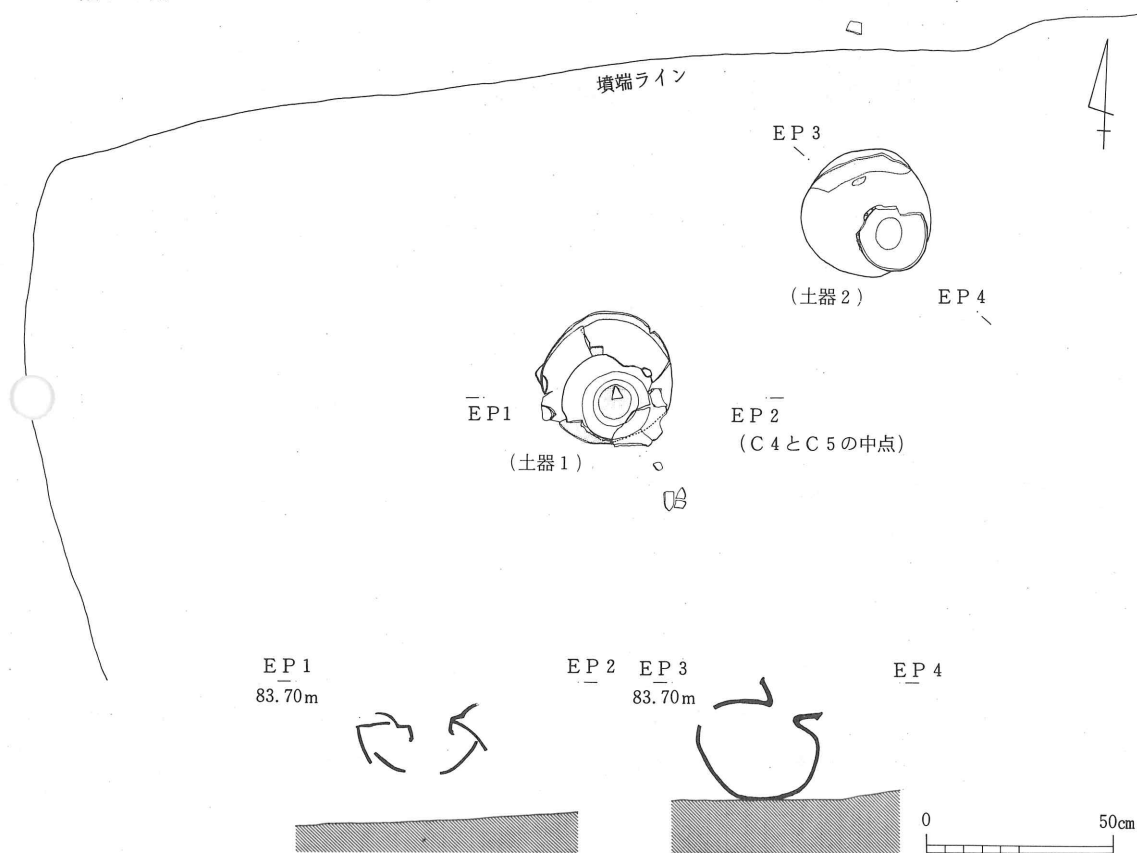
周湊は、前述したようにローム層を削りだした墳裾部と明確な角度をもって東側に落ち込む。とくにくびれ部付近では、ほとんど平坦と言ってよい部分が認められた。周湊外側の立ち上がりは本グリッド南東のT-11と後方部の東側のT-14の所見から、後方部墳裾線と平行に延びた後、くびれ部付近で墳丘に沿って形を変えるものではない。そのまま前方部に向かってまっすぐ進み、

かつ、本グリッドで認められたようになだらかな傾斜の底部をもつ周湟と判断される。トレンチ調査のため断言できないが、墳丘東側については、外縁が長方形の周湟であったと推定できた。

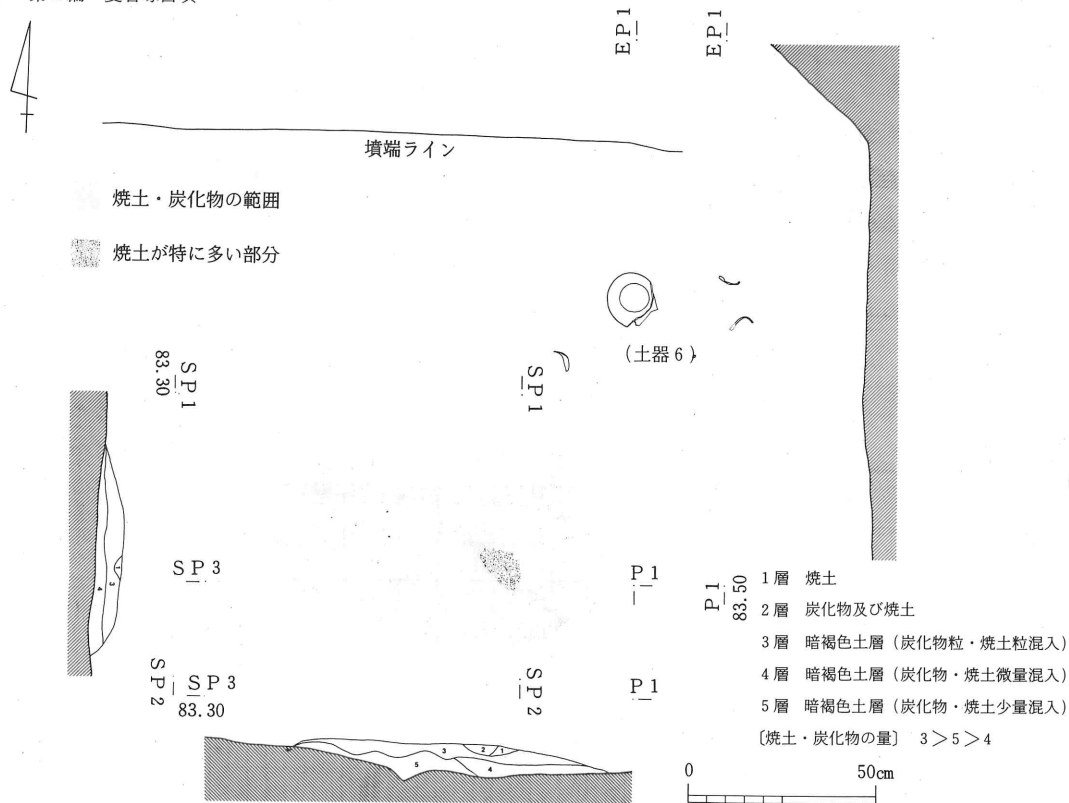
なお、後方部南東隅から1.5mほど西側によった部分に幅50cmほどの小さな溝を確認した。この溝は、墳丘築造のために削りだしたロームを切るように北へ延びる。堆積土の断面観察により後世の小溝と思われるが性格は不明である

周湟内の埋積土は、墳丘側より落ち込んだとみられるローム塊及びローム粒を多量に含む層が認められ、その上にローム粒をわずかに含む黒褐色土層が認められた。

出土遺物は、完形の壺2個体がくびれ部付近で46cmの間隔をおいて並んでいた。西側の有段口辺をもち口辺内部に綾杉文を配する壺は、墳裾より南へ95cm、周湟底より12cmのところ为上からの土圧で押しつぶされたように割れた状態で出土した。底部の破片は見あたらず焼成後に内側から穿孔されたと思われる。東側の広口口辺の帯状口縁外側に粘土紐貼付文を等間隔にはり付けた壺は、やや傾いているもののほとんど直立していた。墳裾より15cm南で周湟底のほぼ直上から出土した。この壺には、胴部に焼成後の穿孔が認められた。2個体とも外面が赤色である。両者が同時期の祀に伴う仮器であったかどうかは、疑問である。また、後方部南東隅より西へ2.5m、墳裾より南へ0.35mほどの地点で折り返し口辺壺の口辺部が周湟底上30cmほどのところより出土し



第23図 愛宕塚古墳G-B4 土器出土状況図



第24図 愛宕塚古墳G-B 4 土器・焼土確認状況図

た。この壺は周湟の埋積が進んだ段階、換言すれば、古墳築造時より一定の時間後の祀に伴う土器と考えられる。

なお、後方部南東隅の南西方向約3m、墳裾より南へ1.1mの地点を中心にして、焼土・木炭が厚さ3～4cm、南北0.5m、東西0.9mほどの不整楕円形の範囲に分布し、周湟の最初の埋積土(厚さ3～5cm)の土層上に確認された。これは本墳築造とさほど時間の隔たない時期の焼き火、あるいは祀にともなう焼き火の痕跡と推定した。

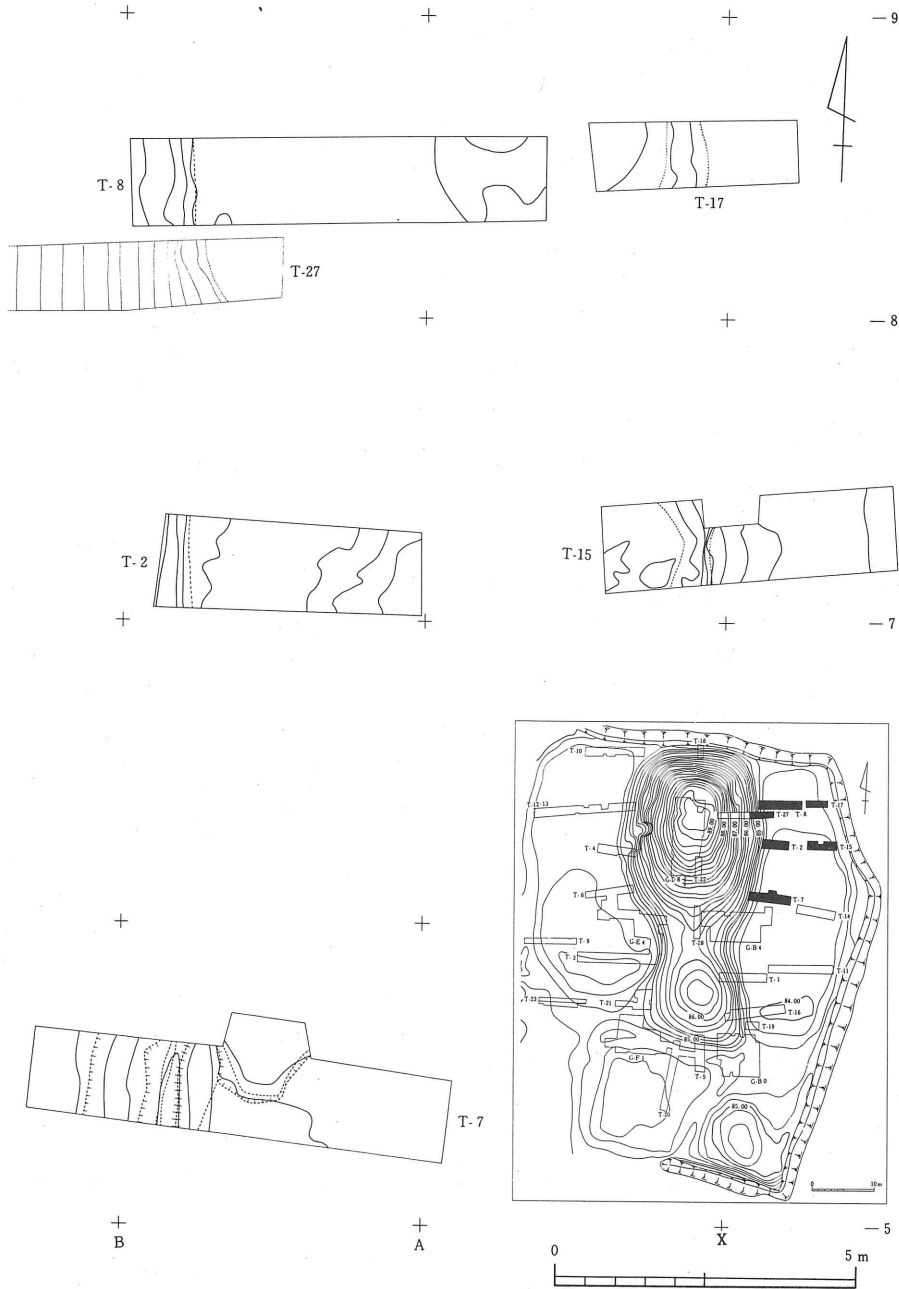
(7) 後方部東側 (第25～26図)

後方部墳裾部の確認を目的としてT-8・2・7を、後方部周湟外縁立ち上がりの確認を目的としてT-17・15を設定した。また、墳丘の断面観察の目的で設定したT-27を延長し、結果として、墳裾部確認の目的をもった。

いずれのトレンチでも墳裾部・周湟外縁はローム層を掘り込んでいて、容易に確認できた。墳丘は45～50°で立ち上がる。削り出された墳丘面はこまかい掘削工具痕の凹凸が認められた。各トレンチで確認された墳裾線は、ほぼ一直線上に並び、G-B 4で確認された後方部南東隅に接続する。

周湟外縁部は、墳裾から8mの距離で明瞭な立ち上がりを確認した。後方部東側で確認した周

湟外縁部を前方部方向に延長すると T-11・14 で確認された周湟外縁部に合致する。墳丘東側では後方部から前方部中ほどまでは、周湟外縁は直線に走ると考えられくびれ部後方部外縁外側では旧表土を確認できなかったが、これは後世の耕作土層と考えられる第2層の掘削がローム層まで及んだためと考えられる。周湟底面は西側に比べ、若干の凹凸はあるものの平坦である。各ト



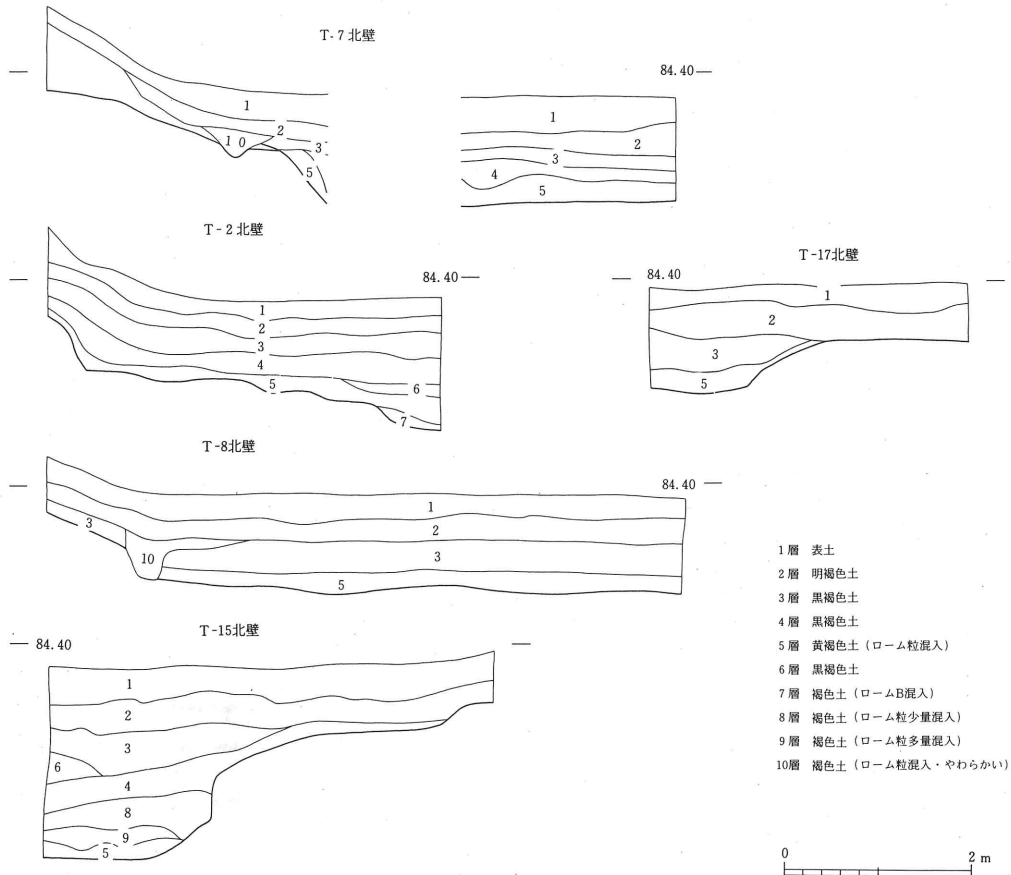
第25図 愛宕塚古墳後方部東側トレンチ平面図

第1編 愛宕塚古墳

レンチの周湟底面の標高は、T-8・17では約83.2m、T-2では約83.4~82.8m、T-15では約81.7m、T-7では約83.0mであった。

各トレンチ内の埋積土は単純で、最下層がローム土を多く含む黄褐色土、他はローム粒を少量含む褐色土であった。前述した第2層明褐色土は後世の耕作土で、墳丘の一部及び周湟外旧表土を削除している。

出土遺物で図示できるものは、17の器台で、周湟底直上から出土した。



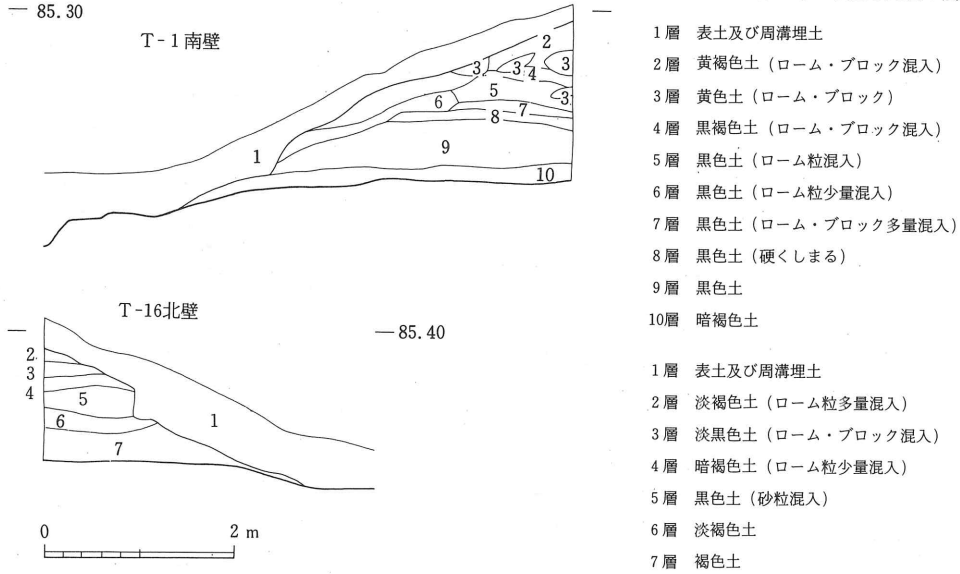
第26図 愛宕塚古墳後方部東側トレンチ断面図

3 墳丘の調査

墳丘の築造法を調査するため、後方部にT-27、T-22の2本のトレンチを、また、くびれ部にT-28を設定した。その他、T-1、T-16において、周湟調査中に墳丘の築造法が明らかになっている。

(1) T-1 (第27図)

第9層以下は地山であり、第2層から第8層が墳丘である。第8層は黒色土で固く、墳丘下に



第27図 愛宕塚古墳前方部東側墳丘断面図

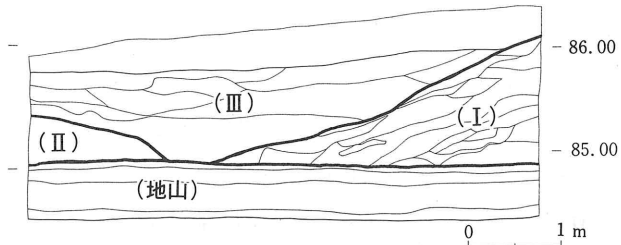
しきつめられている。その上にローム塊を多量に含む黒色土で墳丘が築造されている。周湟埋没土の様子から見ると墳丘が耕作により削られたことがわかり、原墳丘はさらに東に広がると思われる。

(2) T-16 (第27図)

第6層以下は地山であり、第2, 3, 4層が墳丘である。第5層はT-1の第8層と同じ固い黒色土である。T-1の墳丘同様に、耕作によって削られていた。

(3) T-28 (第28図)

後方部と前方部の築造関係を明らかにするために設定した。底面はローム層上面で、その上の三つの層は地山である。地山の上に固い黒色土層がある。後方部(I)と前方部(II)を別々につくり、その後、間(III)をつな



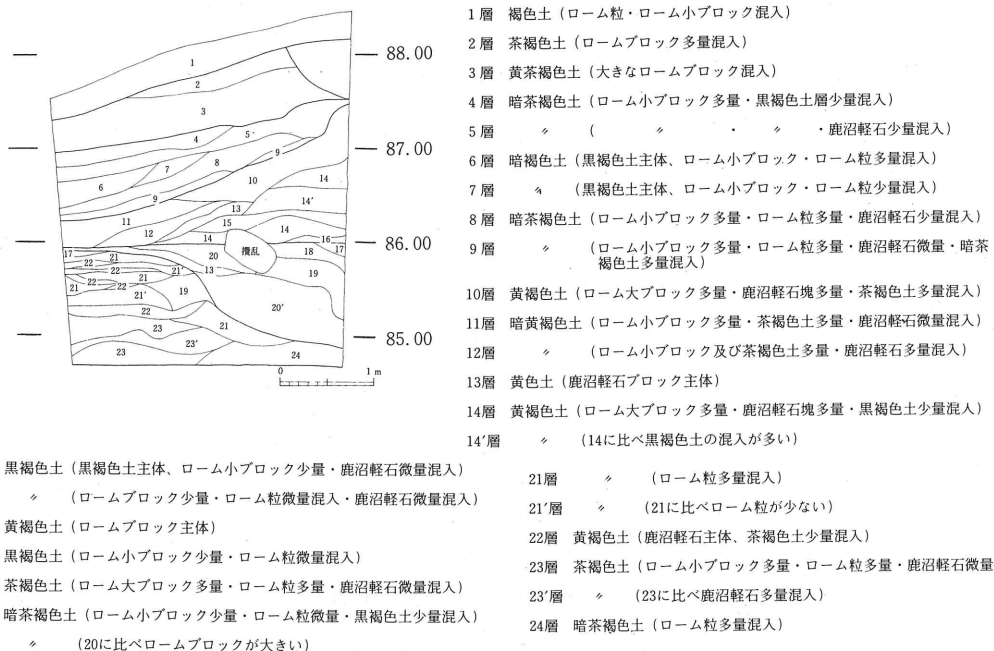
第28図 愛宕塚古墳T-28断面図

げているのがわかる。後方部墳丘は、ローム、鹿沼軽石層塊を多量に含み、後方部中央より盛土されている。前方部墳丘は黒色土を主体とした土で盛土されていた。

(4) T-22 (第29図)

後方部南側に墳丘主軸平行に設定した。本トレンチは、擴穴の東壁にかかっている擴穴の一部をこわしてしまった。底面は砂粒、炭化物が混入した固い黒色土で、上面の高さは84.7mである。その上部に後方部外側に盛土し、その後中心部に盛土している。この盛土は、86mの高さで平坦にしつき固めてある。次に墳丘中心部より盛土している。本トレンチは前述したように擴穴の南

第1編 愛宕塚古墳



第29図 愛宕塚古墳T-22断面図

東にかかっており、第3層と第4・5層の境が墳穴に木棺をすえた後平担にした面である。第2・3層は墳穴を埋めた層である。第5・8・9層と第10・11層の境が墳穴の東壁につながる層である。

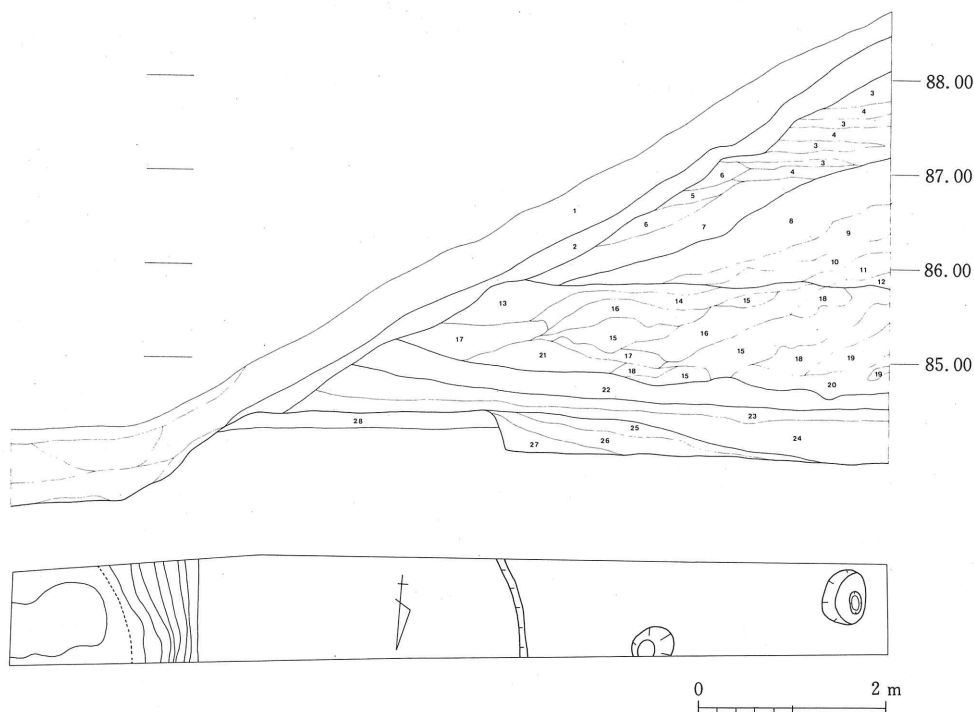
出土遺物は、S字状口辺甕の口辺部片(第43図-9)がある。出土位置は、トレンチ東壁地表下2mである。

(5) T-27 (第30図)

後方部東側に墳丘主軸と直交するように設定した。墳丘下に地山より掘りこまれた深さ40cmの竪穴がある。トレンチ調査のため規模は明確でないが、一辺が4m以上ある。底面に2個の小穴があり東側のもは深さ50cmである。

墳丘の築造をみると、竪穴が完全に埋まらないうちに、そのくぼみを埋め盛土が行われている。最初に、砂粒が混入する黒色土(第23層)を墳丘外側がやや高くなるように、上面が84.5mの高さにしき固めている。その上に第22層を同様に盛土し、次に墳丘外側に少し盛土してから、中心部より盛土していき高さ85.8mで平担にし、その後、後方部中心が高くなるように第8層から第12層を盛土する。次に第5・6・7層を盛土し、その上部に第3・4層を交互にほぼ平らに盛土している。この平担な面の上部第3層から第12層までは墳穴の築造を意識している。最後に墳丘の形を整えるため第2層を墳丘の斜面に盛土している。

出土遺物は、トレンチ北西隅より東へ180cm、南へ60cmの位置で竪穴底面より130cm上の墳丘封土内からの口辺部片(第44図-18)がある。



- | | |
|--|-------------------------------------|
| 1層 暗茶褐色土 (ローム小ブロック微量・ローム粒混入) | 15層 黄褐色土 (ロームブロック) |
| 2層 暗茶褐色土 (ローム粒少量・鹿沼軽石微量混入) | 16層 茶褐色土 (ロームブロック多量・ローム粒多量混入) |
| 3層 暗茶褐色土 (ローム小ブロック微量・ローム粒微量混入) | 17層 茶褐色土 (ロームブロック多量・ローム粒多量混入) |
| 4層 茶褐色土 (ローム小ブロック多量・ローム粒多量・暗茶褐色土少量混入) | 18層 茶褐色土 (ロームブロック多量混入) |
| 5層 茶褐色土 (ロームブロック多量・ローム粒多量混入) | 19層 黄茶褐色土 (ローム小ブロック多量・鹿沼軽石ブロック多量混入) |
| 6層 茶褐色土 (ローム小ブロック多量・ローム粒多量・鹿沼軽石混入) | 20層 茶褐色土 (ロームブロック多量・鹿沼軽石ブロック多量混入) |
| 7層 暗茶褐色土 (ローム小ブロック微量・ローム粒少量混入) | 21層 茶褐色土 (ローム小ブロック多量・ローム粒多量混入) |
| 8層 茶褐色土 (ロームブロック多量・ローム粒多量混入) | 22層 茶褐色土 (ローム粒少量) |
| 9層 暗茶褐色土 (ローム小ブロック少量・ローム粒多量混入) | 23層 黒色土層 (砂粒混入) |
| 10層 黄褐色土 (ロームブロック) | 24層 黒褐色土 (ローム粒少量混入) |
| 11層 暗茶褐色土 (ローム小ブロック少量・ローム粒少量・鹿沼軽石微量混入) | 25層 黒褐色土 (ローム粒少量・黒色土微量混入) |
| 12層 茶褐色土 (ローム小ブロック多量・ローム粒多量・鹿沼軽石微量混入) | 26層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム微小ブロック少量混入) |
| 13層 茶褐色土 (ローム小ブロック多量・ローム粒少量混入) | 27層 黒褐色土 (ローム粒少量混入) |
| 14層 暗茶褐色土 (ローム小ブロック少量・ローム粒微量混入) | 28層 暗黄褐色土 (ローム漸移層) |

第30図 愛宕塚古墳T-27平面図・断面図

4 遺物出土状況

本古墳の調査で出土した土器の地点別の点数は第4表の通りである。

トレンチごとの土器数に差があるが、トレンチ、グリッドの大きさとも関係がある。G-F 1の点数が多いのは出土状態(第19図)のためである。これらの土器のうち図示出来たものは19点であり第31図にその出土位置を示した。以下その出土状況について述べる。

(1) G-B 4

壺 3 は湊底上15cmほどで、口辺部が下向きの状態で、近接して胴部半分が内側を上に向けて出土した。その他の胴部片が南側にいくほど高い地点から出土した。埴13, 14と壺片19も壺 3 の胴部片と同じ位置で同様の出土状態の破片で出土した。埴13は胴部の半分を、埴14は底部の一部を欠いている。

(2) T-21

台付甕10は墳丘斜面の部分で5cmほど浮いて脚部のみが出土した。高坏15は周湊埋没土内の出土土であるが位置は明確でない。脚部の1/4の破片である。

(3) G-F 1

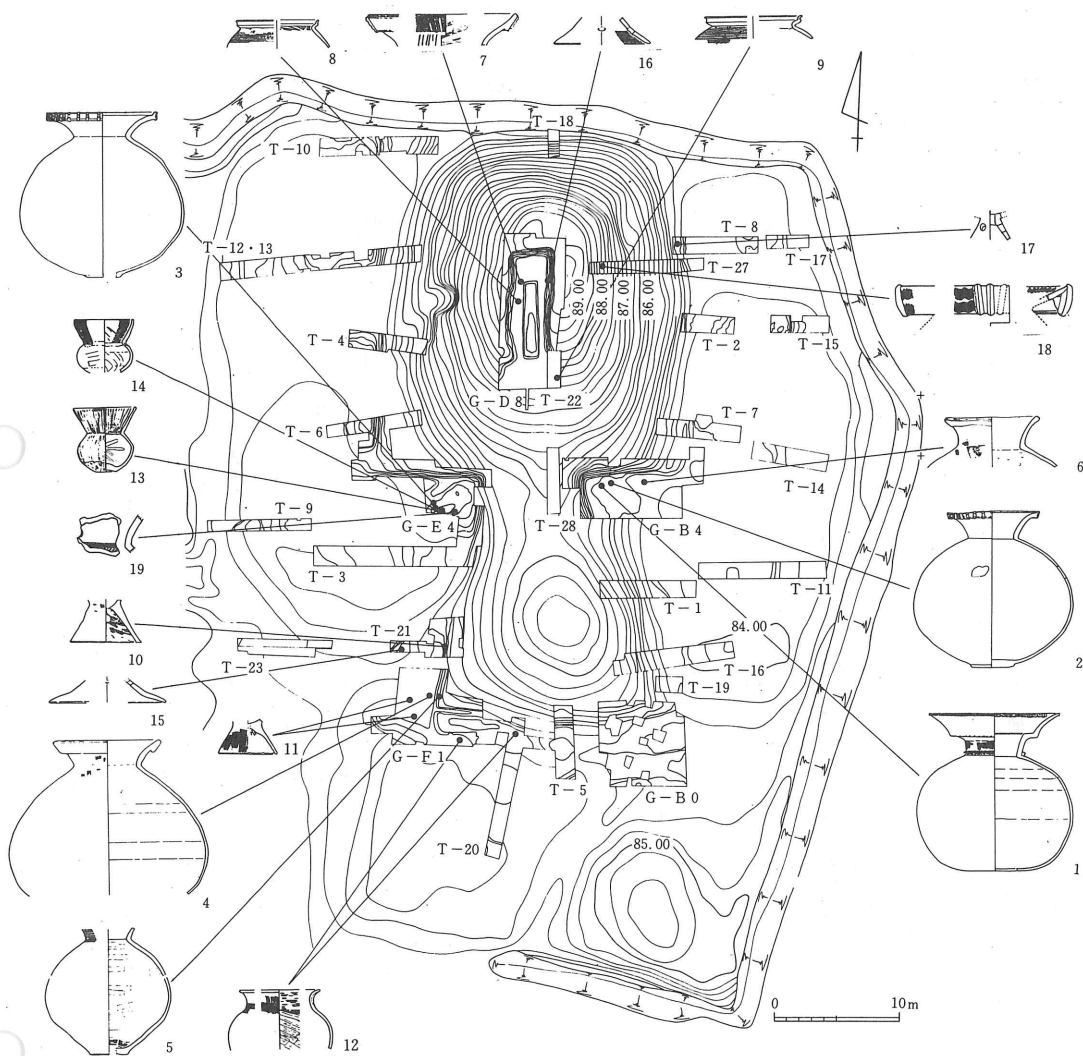
壺 4, 5 は墳丘上から投げ棄てられたように破片がちらばった状態で出土した(第19図)。壺 4 は底部の破片が全くない。壺 5 は13個の破片からの復元である。壺12は2片が接合できた口縁部から胴部にかけての全体の1/8の破片である。周湊底上20cmほどのところから出土した。台付甕11は脚部のみが周湊底より4cm上で出土した。

(4) G-B 4

壺 1 は周湊底より12cmほど浮いた状態で上からの土圧に押しつぶされたような状態で出土した。焼成後に底部に穿孔をほどこした完形の土器である。壺 2 は周湊にほぼ直立した状態で出土した完形の土器である。焼成後、胴部に穿孔をほどこしてある。壺 6 は周湊底より30cmほど浮いた状態で出土した。胴部、底部の一部の破片も出土した。

地 点	土器点数	地 点	土器点数	地 点	土器点数
後方部北側 T-18	0	前方部西側 T-23	0	後方部東側 T-7	4
後方部西側 T-10	20	T-21	8	T-2	5
T-12	12	G-F 1	334	T-15	101
T-13	11	T-20	34	T-8	9
T-4	5	T-5	4	T-17	19
くびれ部西側 T-6	17	前方部東側 G-B 0	92	墳丘内 T-28	0
G-E 4	34	T-19	0	T-22	3
T-3	32	くびれ部東側 T-16	42	T-27	6
T-9	1	T-1	1	墳 穴	39
G-B 4, G-E 4 のまとまって出土した土器(第15, 24, 25図)は一点として数えている。		T-11	34	T-1, T-16は墳丘にかかっているが、出土土器の周湊と墳丘内の区別は明確でない。同様にT-22は墓壇にかかっているが、出土土器の墳丘との区別は明確でない。	
		G-B 4	71		
		T-14	3		

第4表 愛宕塚古墳地点別土器出土状況



第31図 愛宕塚古墳土器出土位置図

(5) T-8

器台17が墳丘斜面に密着して出土した。受皿部から脚部にかけての破片である。

(6) T-22

台付甕9がトレンチ東壁の地表下2mより出土した。出土層位からみて墓壙を埋めた土層からの出土と考えられる。口辺部の1/4の破片である。

(7) T-27

壺18が竪穴底部より130cm上で出土した。帯状口辺部の1/8の破片である。出土層位から墳丘盛土内の出土と考えられる。

(8) G-D 8

壺7は口辺部の1/7の破片である。二片出土したが接合は出来ない。一片は墓壇底面より、もう一片の図示したものは、墳丘より1mほど下から出土した。台付甕8は口辺部の1/4の破片で、墓壇確認面より30cm下から出土した。高坏16は、墓壇確認面より16cm下から出土した脚部の1/5の破片である。

第3章 埋葬主体部の調査

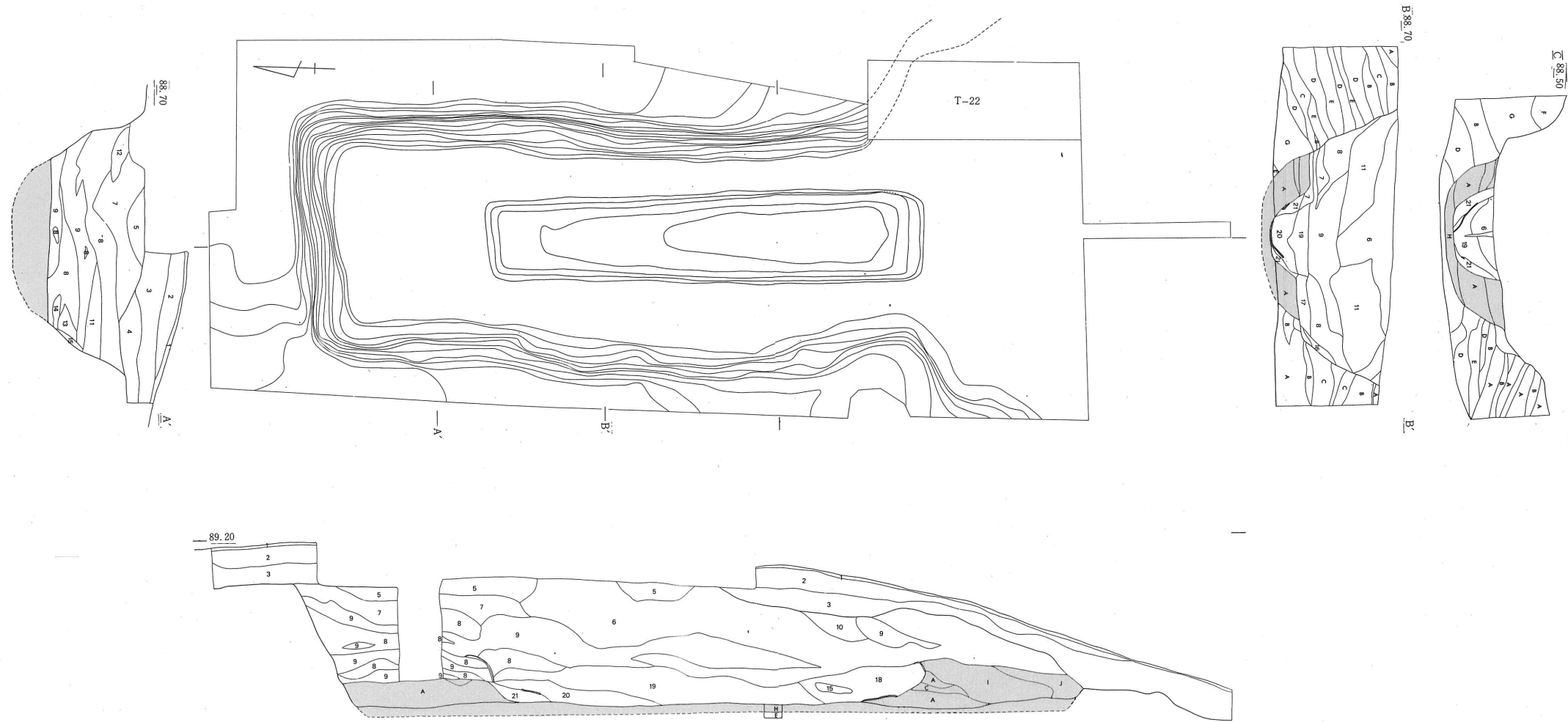
埋葬主体部の調査は後方墳頂部についてのみしか実施できず、前方墳頂部における埋葬に関するものの存在は不明である。したがって、ここでは後方部埋葬主体部について述べる。

調査は埋葬主体部の確認に時間を費やした。当初は（結果として）壙穴の北東隅部分を埋葬主体部の全容と見誤り、やみくもに掘り下げていったが、棺の痕跡らしきものは確認できなかった。そこで、埋葬主体部は墳丘の主軸線上に存置するものであろうとの前提から、後方部主軸を割り出して、これを中心に調査区を拡張した結果壙穴を確認することができた。

1 埋葬主体部の構造

埋葬主体部は後方部のほぼ中央に位置し、現状の墳頂部より約60cm下に第3層暗褐色土を除去して確認することができた。黄色の鹿沼軽石土中にローム混じりの暗褐色土の落ち込みがあった。

壙穴の平面形は東辺8.6m・西辺8.2m・南辺3.1m・北辺3.8mの南北に長い隅丸長方形を基本とするが、東西両壁は南壁として収束せず、それぞれくびれ部に向ってハの字に開く形態であった。南壁は存在せず、横穴式石室の前庭部のような空間が形成されている。この南壁相当部分は壙穴外から棺を移送するために開かれた部分であった。西壁は中央から南にかけて外に張りだしており、この部分は崩壊したとも考えられるが、断面の観察では埋葬後に崩壊したものでないことがわかる。壙穴は、鹿沼軽石を主体とする黄色土と暗褐色土の互層で形成された墳頂部盛り土を掘り込んでつくられている。断面は逆台形で、壁は約60°で立ち上がる。深さは最大で約0.9mである。壙穴が掘り上がると、暗褐色土を壙底に埋め戻し約80cmの厚さまで固くつき固め、木棺を置く棺床部を断面U字形に掘り込む。木棺の痕跡は、全長7.4m・幅1.1~1.3mの断面U字形であった。小口幅は、北が狭い。棺床底面は北から南へ傾斜して低くなる。主軸はN-2°-Wで、後方部墳丘主軸に平行していた。棺床部分の土はローム塊と暗褐色土で、木棺の腐朽によって壙穴内覆土が陥没したものであろう。この層に混じって厚さ2~4mほどの白色粘土が所々に散見され、また棺床面にも薄く認められた。つまり、木棺の合せ口部分は白色粘土で目詰めたものと推定される。南北の小口では比較的広く認められ、さらに北小口では壙穴内覆土第8・9層を覆っていた。



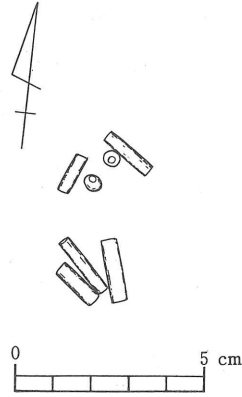
- | | | |
|---|--|--|
| <p>1 表土</p> <p>2 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック混入)</p> <p>3 暗褐色土 (ロームブロック多量・ローム粒少量混入)</p> <p>4 黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多量混入)</p> <p>5 茶褐色土 (ロームブロックを主体とする)</p> <p>6 茶褐色土 (径の大きなロームブロックを主体とする)</p> <p>7 褐色土 (ローム (小) ブロック多量・鹿沼軽石ブロックが混入)</p> <p>8 褐色土 (ローム (小) ブロック多量・鹿沼軽石粒が混入)</p> <p>9 黒褐色土 (ローム (小) ブロック・鹿沼軽石粒を含む)</p> <p>11 黒褐色土 (ローム (小) ブロック多量・鹿沼軽石粒を含む)</p> | <p>12 暗茶褐色土 (ローム (小) ブロックを多量に含む)</p> <p>13 黄褐色土 (ロームブロック多量混入)</p> <p>14 黒褐色土 (鹿沼軽石粒多量・ローム (小) ブロック少量を含む)</p> <p>15 黒褐色土 (ローム (小) ブロックを含む)</p> <p>16 茶褐色土 (ロームブロックを主体として、鹿沼軽石粒を含む)</p> <p>17 黄褐色土 (ローム土・鹿沼軽石粒を微量含む)</p> <p>18 茶褐色土 (ローム (小) ブロックを含む)</p> <p>19 黒色土 (鹿沼軽石のブロック・粒子とローム (小) ブロックを含む)</p> <p>20 黒褐色土 (築き固められている。かたい)</p> <p>21 褐色土 (鹿沼軽石・ローム (小) ブロックを含む)</p> | <p>A 暗黄褐色土 (ローム土をかたく築き固めた層)</p> <p>B (黄色土 (鹿沼軽石・ロームブロックの混合土))</p> <p>C 黒色土 (ロームブロックを含む)</p> <p>C' 黒色土 (ロームブロック・鹿沼軽石を含む)</p> <p>D 黒色土 (ロームブロック・鹿沼軽石を含む)</p> <p>E 黒色土 (ロームブロックを含む)</p> <p>F 黒褐色土 (鹿沼軽石粒・ロームブロックを含む)</p> <p>G 黄色土 (鹿沼軽石を主体とし、ロームブロックを含む)</p> <p>H 黒色土 (ロームブロック・鹿沼軽石少量を含む)</p> <p>I 黒褐色土 (かたく築き固めた層)</p> <p>J 茶褐色土 (ロームブロック混入)</p> |
|---|--|--|

第32図 愛宕塚古墳埋葬主体部平面図・断面図

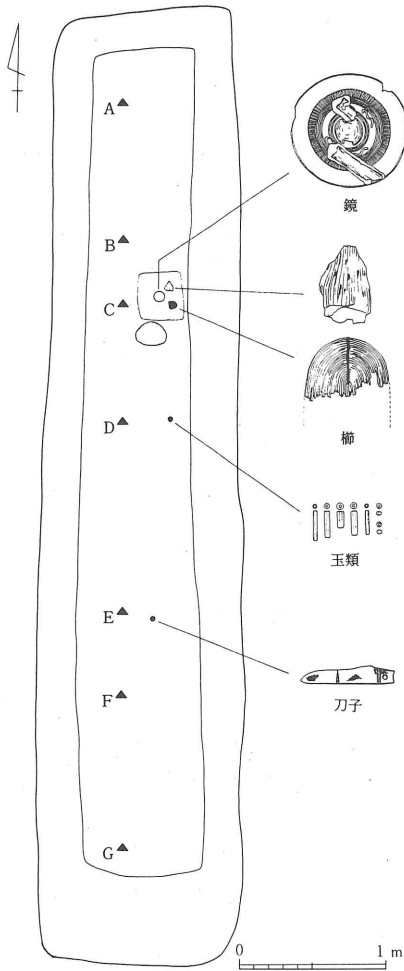
2 副葬品の出土状況

埋葬主体部から出土した副葬品は、鏡1面・櫛1枚・緑色岩製管玉5管・ガラス製小玉2顆であり、すべて棺床面にあったものである。

鏡と櫛は、北壁より約1.5mの位置に近接してあった。鏡は鏡面を上になされていた。鏡面には、麻布であろうか平織りの織物が銹化・付着していた。櫛は、歯を西に向けてあった。鏡・櫛は32cm×29cmの方形の範囲の炭化木質に覆われていた。この炭化物を除去すると、棺床面には黒く染みが残っていた。鏡を



第33図 愛宕塚古墳玉類出土状況図



第34図 愛宕塚古墳副葬品出土状況図
(▲は土壌サンプル地点)



第35図 愛宕塚古墳鏡・櫛出土状況図

取り上げると植物であろうか繊維質がのこっていた。また、鏡背には錆化した竹様のものの痕跡があった。鏡・櫛は何らかの容器に入れて副葬されたのであろう。

北小口から275cm、東壁から45cmの位置には玉類が集中してあった。出土した状況からは一連にはなっていなかったようである。なおこれら玉類の周囲には少量のガラス粉が確認された。

第4章 出土遺物

1 副葬品

(1) 鏡

径7.2cm、厚さ2mm弱(縁部では2.5mm)、鏡面はわずかに凸面でやや緑色がかった青銅色であった。出土時は、全面が鮮やかな緑青に被われていた。

鏡背の中心には、径1.6cm高さ8mmの半球形状の鈕があり、2条の圏線による鈕座が、これを取り巻いている。内区には、細い突線による文様が、四方に配置されている。内区文様帯のすぐ外には、三条の圏線がめぐり、さらに副圏として櫛歯文帯が配されている。外区は、平縁で一段高くなっている。

なお、鏡面には鏡を包んでいたと思われる平織の布が、また鏡背には細竹の残欠が、付着している。

(2) 櫛

櫛は、少なくとも2枚の出土が確認されており、複数で副葬されたものである。遺存状態の比較的良好であった1について説明する。

結歯式の竖櫛で、頭部のみを残している。径1mm前後の竹ひごを中央部で束ね、そこを中心にU字状に曲げたものである。幅5.1cm、頭部は半球状となる。全面黒漆塗り仕上げであるが、竹質はほとんど朽ちており外面の漆質だけが遺存していた。

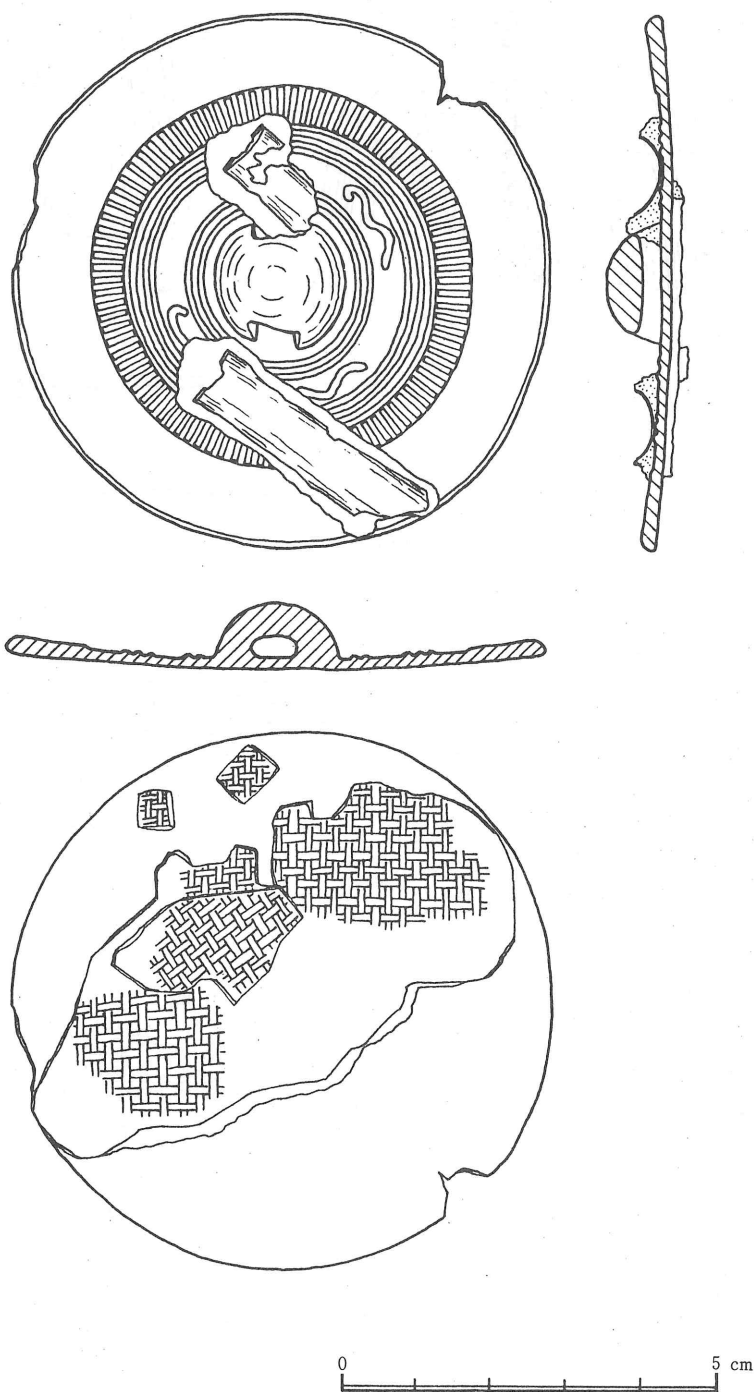
(3) 玉類

管玉5個のうち3個はグリーントフ、2個は蛇紋岩系の石材を使用し、両面から穿孔する。おそらくは秩父山系産の石材を採集したものと思われる。福井・岩内山遺跡出土の管玉の穿孔技法の検討のために初めてX線撮影を行ったが、この時は1面からの撮影にとどまった。穿孔の扁行を明確にするためには、1面とそれに直交する面の少なくとも2面からの撮影が必要であるので、今回は一応これを試みた。

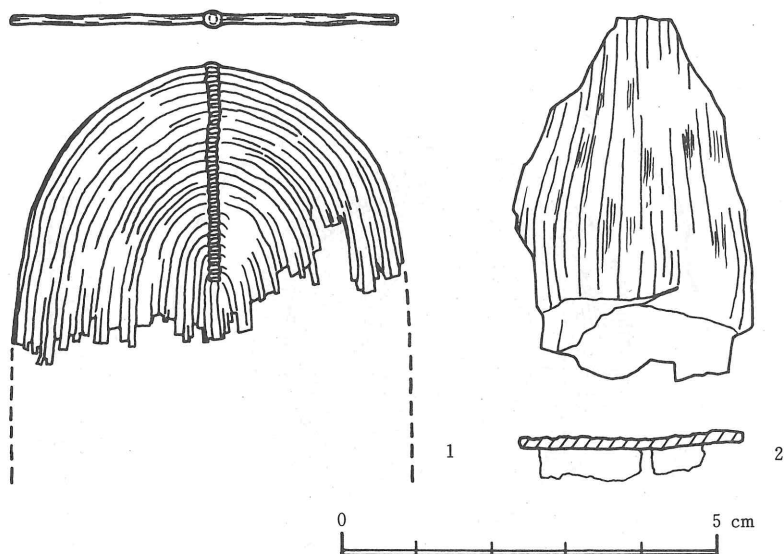
小玉はともに捲き技法による単品生産によるものである。その使用材質に関する検討は、今回は果し得なかった。

(4) 刀子

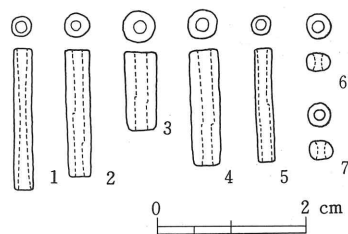
なかごの頭部を欠失した刀子であり、現存長5.8cm。身部長4.3cm、刃幅は関部において1.2cm



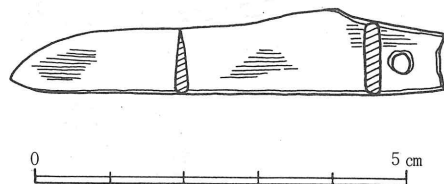
第36図 愛宕塚古墳出土鏡実測図



第37図 愛宕塚古墳出土櫛および木質実測図



第38図 愛宕塚古墳出土玉類実測図



第39図 愛宕塚古墳出土刀子実測図

	全長	径 (A)	孔 径	径 (B)	孔 径	重量	備 考
1	18.05	3.14×3.16	1.20×0.85	3.41×3.14	1.69×0.901	0.24	淡緑色，グリーン・タフ (A面)斜行する白色の縞あり。 (B面)穿孔，やや扁円形
2	14.68	4.15×4.0	1.26×1.10	4.0×3.7	1.34×1.05	0.56	暗緑褐色，蛇紋岩系。 (A面)穿孔，やや扁円形。 (B面)穿孔，やや扁円形。上縁部に研磨時の剥離傷あり。
3	8.95	4.53×4.71	1.81×1.18	4.65×4.70	1.54×1.48	0.32	暗緑色，蛇紋岩。 (A面)穿孔，やや片寄る。
4	11.50	4.40×4.30	1.45×1.59	4.46×4.41	1.39×1.50	0.41	暗緑色，やや硬質のグリーン・タフ(?)
5	14.04	3.1×2.78	0.55×1.14			0.168	淡緑色，グリーン・タフ
6	2.59	3.65	0.76			0.05	コバルトブルー，捲き作り
7	2.65	3.79	1.3			0.055	コバルトブルー， 捲き作り時のみ出しあり

第5表 愛宕塚古墳出土玉類一覧

単位 (長 mm 重 g)

である。厚さは棟の部分が2.0mmあり、刃の断面は三角形をなしている。なかご部は幅の広いところで1.1cm、頭部に近づくにつれて狭まっている。厚さは、ほぼ一定で2.2mmである。把部のほぼ中央には、径2.5mmの目釘穴がある。

身およびなかご部の表面には、一部に木質の付着がみられるが、木目はすべて刀身の方向に一致している。また刃は内方に彎曲しており、使用による磨滅と研磨のくり返しがあったことを窺わせる。

2 盛土内出土の土器

本古墳墳丘盛土内からは、盛土築造状況を知るための2本のトレンチ内より9、内部主体の擴穴埋土より39、計48の土器片が出土した。いずれも小片で図示できたのは次の5点である。

台付甕9(第43図)T-22出土。口辺部の1/4、復元口径15.2cm、S字状口辺で、口辺部下段はいくぶん厚く外反し上段は内傾ぎみに立ち上がりすどく外反する。口縁部は角ばっている。胴部は頸部より大きく外側に開き肩がはる。胴部外面は右ななめのハケ目仕上の後、全面に横方向のハケ目仕上。ハケ目は全体的に深く粗い。口辺部は内外面ともに横ナデ。胎土には微砂粒が混入、焼成はきわめて良好。色調は須恵質の灰白色である。

壺18(第44図)T-27出土。口辺部の1/8が、復元口径18.8cm、口辺部は広くつくり出され楯状工具による鋭角的な波状文を外面に二段、内面に一段施す。外面に縦に断面三角形の粘土紐貼付文が現存部に2本ある。この貼付文は本来3本一組であったと考えられる。胎土には白色の小礫が混入し、焼成は普通。色調は赤褐色である。全体として丁寧に作られた土器である。

壺7(第43図)G-D 8出土。口辺部の1/7、復元口径22.7cm。折り返し口辺で、頸部から内彎ぎみに外傾する。折り返し部の下にはヘラ状工具による刻み目が施されている。また折り返し部に断面三角形の粘土紐貼付文がある。粘土紐の上には三か所に横方向の刻みをつける。貼付文は現状では2本であるが、破片であるため何本単位であるかは不明。口辺外部は横方向のナデ。頸部は縦方向のヘラ磨き。内面は、左下ななめのヘラ磨き。胎土には微砂粒が混入し、焼成は普通、色調は内外面とも折り返し部を除いて赤色、全体として赤褐色。

高坏16(第43図)G-D 8出土。脚部の1/5、現存高4.2cm、復元径14.6cm、直線的に二段に開く脚部である。端部は面取りされている。透し孔が現存部分で2口認められ、その位置関係からすると本来は4口の透し孔があったと考えられる。外面はヘラ磨き、内面は下半に横ナデ。胎土には白色微砂粒が含まれ、焼成は良好、色調は暗褐色。

台付甕8(第43図)G-D 8出土。口辺部の1/4、復元口径12.7cm、S字状口辺、口辺部下段は外傾し、上段はいくぶん内傾ぎみに立ち上がり上半でわずかに外反する。口辺部内外面に横ナデ。胴部外面には上部に左ななめ、下部に右ななめのハケ目、そしてその間に横方向のハケ目を施す。頸部内面にもハケ目が残る。器厚は肩部にかけて薄くなり2~3mm。胎土には微砂粒が混入し、焼成は普通。色調は黄褐色で口辺部は黒褐色、口辺部外面にはすすが付着している。

3 周湟出土の土器

本古墳の周湟からは、完形の土器及び土器片が多数出土した。全体的にみると上層部分のものを除き大部分が弥生土器と五領期の土師器である。そのうち図示できたものについて出土地点別に述べる。

(1) G-E 4

壺3(第41図下) 口径22.1cm。頸径11.7cm。胴部最大径33.4cm。底径7.1cm。器高34.5cm。口辺部はほぼ完存しているが、胴部は半分だけが接合できた。広口口辺の壺形土器である。G-B 4出土の壺2と同様の作法の土器で、本土器のほうがやや大きく細部のつくりもしっかりしている。

口辺部は大きく外反し、口縁部は上下に広く造り出された帯状口縁で内面には稜をもつ。口縁部外面はナデによってややくぼみ、粘土紐貼付文がほぼ等間隔に施されている。貼付文の上には、櫛状工具による横方向の刺突が二段につけられている。

胴部は中央やや下に最大径をもち下膨みの器形である。底部を欠失しているので明確ではない。器厚は胴部に比べて口辺部が厚い。

口辺部内外面と胴部外面全体にヘラ磨き。胴部内面には、外面を仕上げする際におさえた痕と思われる凹凸が全面に残る。

胎土には微砂粒が混入し焼成は良、口辺部内外面及び胴部外面は赤色である。

壺片19(第44図) 小破片であり、全体の形状を明確に復元することは出来ないが、壺の頸部片であると考えられる。頸部には櫛描平行線文があり、胴部に撚糸縄文が施されている。胎土には微砂粒が混入し焼成良好、口辺部内外面は赤色。壺2、3と同じ胎土、焼成である。

小型丸底埴片13(第43図) 口径9.9cm。胴部最大径8.8cm。底径3.1cm。器高10.1cm。胴部上半の大部分が欠失。

口辺部は直線的に外傾する。胴部は平形球形。底部にくぼみをもつ。口辺部内外面に縦にヘラ磨き、胴部外面は同じく縦のヘラ磨きで底部近くはヘラ削り。胴部内面は粗くヘラ仕上げ。

胎土は堅緻で焼成良好。色調は赤褐色。

小型丸底埴片14(第43図) 口径9.0cm。胴部最大径8.8cm。現存高8.4cm。底部を欠失。

口辺部は内湾気味に立ち上がる。胴部は肩がはる偏円形、口辺部は別作りで接合している。口辺部は内外面とも横ナデ、内面は横ナデ前に鋭利な道具による沈線が施されている。胴部内外面はヘラで仕上げた痕がわずかに残る。

胎土には、白色微砂粒が混入、焼成は普通、色調は胴内部黒色、他は赤褐色である。全体的につくりが粗雑である。

(2) T-21

台付甕の台部10(第43図) 底径11.0cm。現存高6.8cm。台付甕形土器の台部。直線的に開く台で端部は外側に面取り、内側に折り返しがある。

外面は一部にハケ目が残るが全体的にナデ仕上げされ凹凸がある。内面は全面にハケ目。胎土は白色微砂粒を含み堅緻で焼成良好、色調は茶褐色である。

高坏15(第43図) 底径17.7cm。脚部の $\frac{1}{4}$ 破片。大きく2段に外反する脚部に四口の透し孔を持つ。端部は面取りがあり内側に稜をもつ。

外面は全面に丁寧なヘラ磨き、内面は器面があらえていて観察出来ない。外面は赤色である。胎土には微砂粒が混入し焼成は良。

(3) G-F 1

壺4(第42図) 口径20.4cm。頸径14.0cm。胴部最大径40.0cm。現存高32.5cm。底部を欠失した折り返し口辺壺形土器である。

口辺部はわずかに外反して開き、幅3cmの折り返し部をつける。口縁部は折り返し部を接合した痕がわずかにくぼむ。胴部は頸部から大きく開き胴部下半に最大径を持つ下膨みの器形である。

口辺部外面は縦のハケ目の後、横方面に粗いヘラ磨き。内面は横方向の丁寧なヘラ磨き。胴部外面は縦のハケ目の後、ヘラ磨き。内面はヘラナデである。

器厚は口辺部は1.0cmと厚く胴部は頸部から徐々に薄くなる。折り返し部を除く口辺部内外面及び胴部外面に赤色。胴下半部に炭化物付着。全体として作りは粗雑である。焼成が十分でないため胴下半はうすくはがれている。

壺片5(第42図) 頸部径7.6cm。胴部最大径20.8cm。底径6.5cm。現存高21.5cm。全体の $\frac{1}{10}$ ほどの破片であり、胴部上半と下半は接合出来ず、図上で復元した。

口辺部は頸部よりくの字状に外傾。胴部は中央やや下部に最大径をもつ。

口辺部外面は横ナデ。胴部外面はヘラ磨き。内面はヘラ磨き、底部付近はハケ目。

色調は赤褐色、焼成はあまり良くない。内面底部付近に炭化物が付着している。色調は赤褐色。

壺片12(第43図) 復元口径12.4cm。現存高9.6cm。口辺部より胴部にかけての $\frac{1}{8}$ 破片の小型壺である。

口辺部は大きく外反し、口縁がわずかに厚い。胴部は肩がわずかに張っている。頸部に櫛描による平行線文が相接して二段施され、一部は簾状文様になっている。

口辺部外面は縦方向のヘラ磨き、内面は粗い横ナデ。胴部外面は丁寧なヘラ磨き、内面はヘラによって整形されている。外面及び口辺部内面は赤色塗彩されている。胎土は白色微砂粒を含み堅緻で焼成は極めて良好。全体として丁寧な作りの土器である。

台付甕の台部11(第43図) 底径8.9cm。現存高5.5cm。台部のみ完存。やや内彎して開く台部で端部に折り返しがある。

外面は縦方向のハケ目を施し端部は横ナデ。内面は一部にハケ目が残る。胎土には雲母を少量含み、焼成は良、全体的に淡黄褐色。

(4) G-B4

壺1 (第40図) 口径27.3cm。頸径11.3cm。胴部最大径32.6cm。器高32.8cm。口辺部の一部が欠失しているが、ほぼ完形の有段口辺壺形土器である。筒状の頸部は直立ぎみに立ち上がり内面に稜をもって大きく横に開き平坦面をつくり出す。口辺部上半も大きく外反して開く。この土器は鉄泥漿仕上げによる土器で口縁部は、ハケ仕上げした後、櫛状工具による左下がりの刻み目をほぼ等間隔に全面に施す。口辺部内面には櫛状工具による綾杉文をつける。段部下縁にも同様の工具による刻み目がある。頸部には断面方形の突帯をつけ、ナデ仕上げし、その突出した部分に同じような櫛状工具による左下がりの刻み目を施す。

胴部は中央に最大径を持つ、偏平円形。底部は平底ぎみの丸底で、中央に長径12cm、短径10cmの不整形な孔が、焼成後内側から開けられている。器厚は頸部が1cm、口縁は0.5cm。胴部は0.5cm。胴部に比べて口辺部が極端に部厚い。

口辺部内外面は横方向の丁寧なヘラ磨き。頸部はハケ目の後、ナデを施す。頸部をハケ目仕上げた後に水平にはり出す段部と突帯をつくりつけナデを施したものである。胴部外面は上半は右下がり、下半は横方向のヘラ磨き。内面は右下がりのヘラ仕上げで、紐つくり痕がのこる。胴部最下段の接合部は3mmほどに薄くつくり、ハケ目の後、粘土をはりつけて接合している。

胎土には微砂粒が混入し焼成は普通、胴部内面を除いて全体に赤色である。

胴部に比べて口辺部が大きく、櫛状工具による装飾がありヘラミガキも丁寧である。

壺2 (第41図) 口径18.9cm。頸径10.1cm。胴部最大32.8cm。底径8.6cm。器高32.7cm。口辺部の $\frac{1}{6}$ が欠失しているが、ほぼ完形の広口口辺壺で鉄化粧土器である。

口辺部は大きく外反し口縁部は上下に広くつくり出された帯状口縁で内面に稜をもつ。口縁部外面はナデによってくぼんでいる。その面の下から上に、内面にはみ出してくりつけられるように形が不ぞろいの粘土紐貼付文が、1.2cmほどの間隔で全面に施されている。貼付文の上部には、横方向の櫛状工具による刺突が二段にある。しかし、手を抜いたかのように不規則に6本の貼付文には何もつけられていない。

胴部は球形に近いが中央やや下に最大径を持ち下膨みの形態をとる。上半に外側より2回にわたって開けられた縦2cm、横3cmの不整形の焼成後の穿孔がある。底部外面の中央がややへこみ、周辺部はつぶれたようにまろくなり稜が明確でない。内面は中央がややもり上がっている。

器厚は口辺部が1.0cm、胴部は0.5~0.6cmで底部近くが薄くなっている。底部は中央部で1.6cm。口辺部に比べて胴部は極端に薄く、口辺部を強く意識して作られている。

口辺部は内外面、胴部外面とも全面にわたってヘラ磨き。口辺部外面は縦方向、内面は横方向。胴部外面は上半はやや右下がり、下半は縦方向である。胴部内面は上半は縦方向に下半は横方向にヘラによって整形されており外面を仕上げする際におさえた痕と思われる凹凸がほぼ全面にわたって残る。

胎土には微砂粒が混入されているが堅緻で精選された感じを与える。焼成は良好で、底部をの

ぞく外面全体及び口辺部内面は赤色である。胴下半の半面にすすが付着している。内面は褐色である。

赤色であることから丁寧な作法の土器であるが、口辺部が波うっている点、帯状口縁上の貼付文の形が一定でなく、つけ方にも乱れがあり施文が抜けている所がある点に粗雑さが感じられる。

壺6(第43図) 口径13.9cm。現存高8.1cm。口辺部がほぼ完存している折り返し口辺壺形土器である。口辺部はゆるやかに外反して開き外側に折り返してある。折り返しの段部は明僚でなくその幅も一定でない。

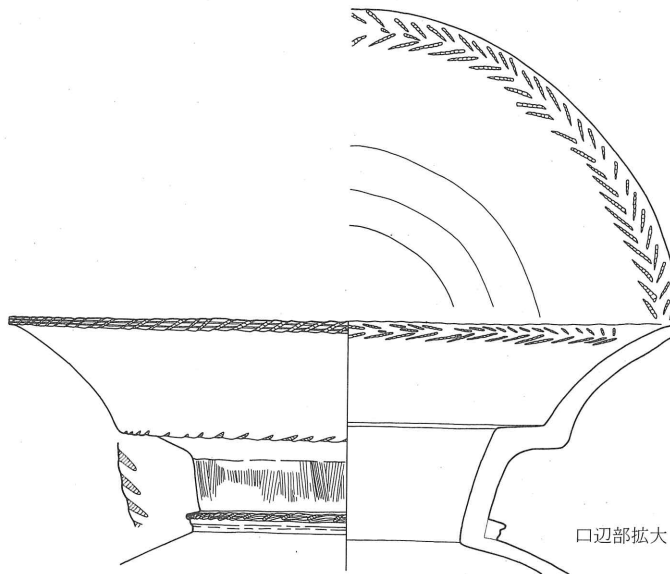
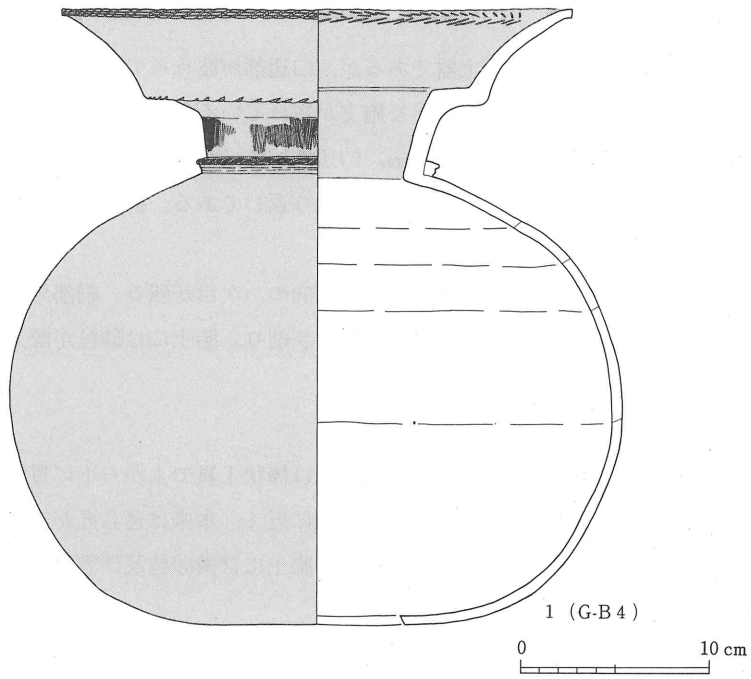
口辺部内外面は横ナデ。外面には横ナデ前の縦方向のハケ目が残る。胴部外面は縦方向の粗いハケ目を施した後にナデ仕上げ。内面は横方向のヘラ削り。胎土には砂粒が混入し焼成は良く、色調は淡褐色。

(5) T-8

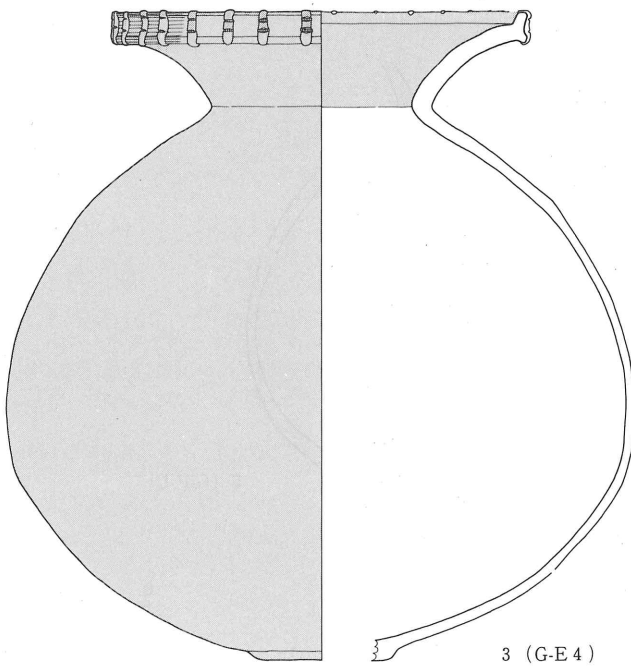
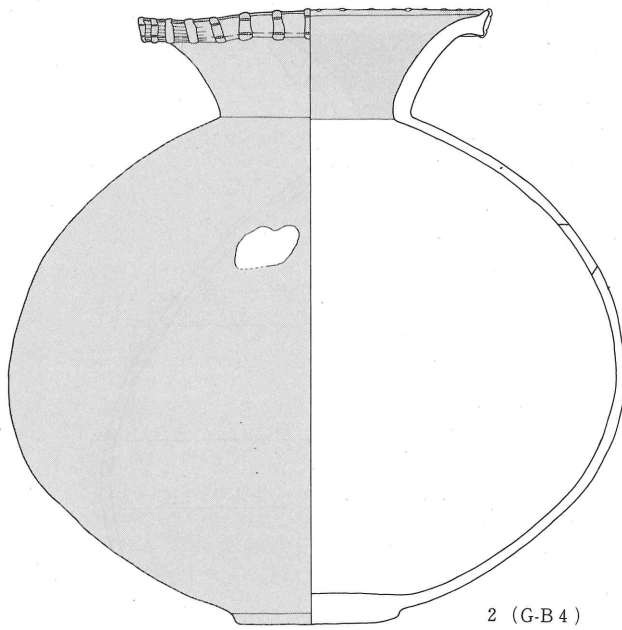
器台片17(第43図) 脚部上半が完存。受皿部底孔は棒状工具で上から下に貫通。脚部に丸い透し孔は3口。現存する脚部透し孔の位置は受皿辺部に近く、本来は透し孔が二段に施されていた可能性がある。仕上げ法は内外面とも明僚でない。胎土には微砂粒及び雲母が少量混入。焼成は良好で色調は赤褐色。

(6) その他

前述した土器の他に多数の弥生土器片が出土した。各土器片について第6表にまとめ、第45図にその拓影を示した。なお、表と図の土器番号は、一致する。



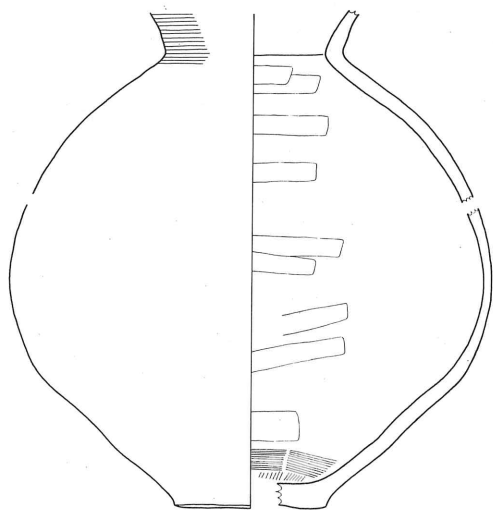
第40図 愛宕塚古墳出土土器実測図(1)



第41図 愛宕塚古墳出土土器実測図(2)



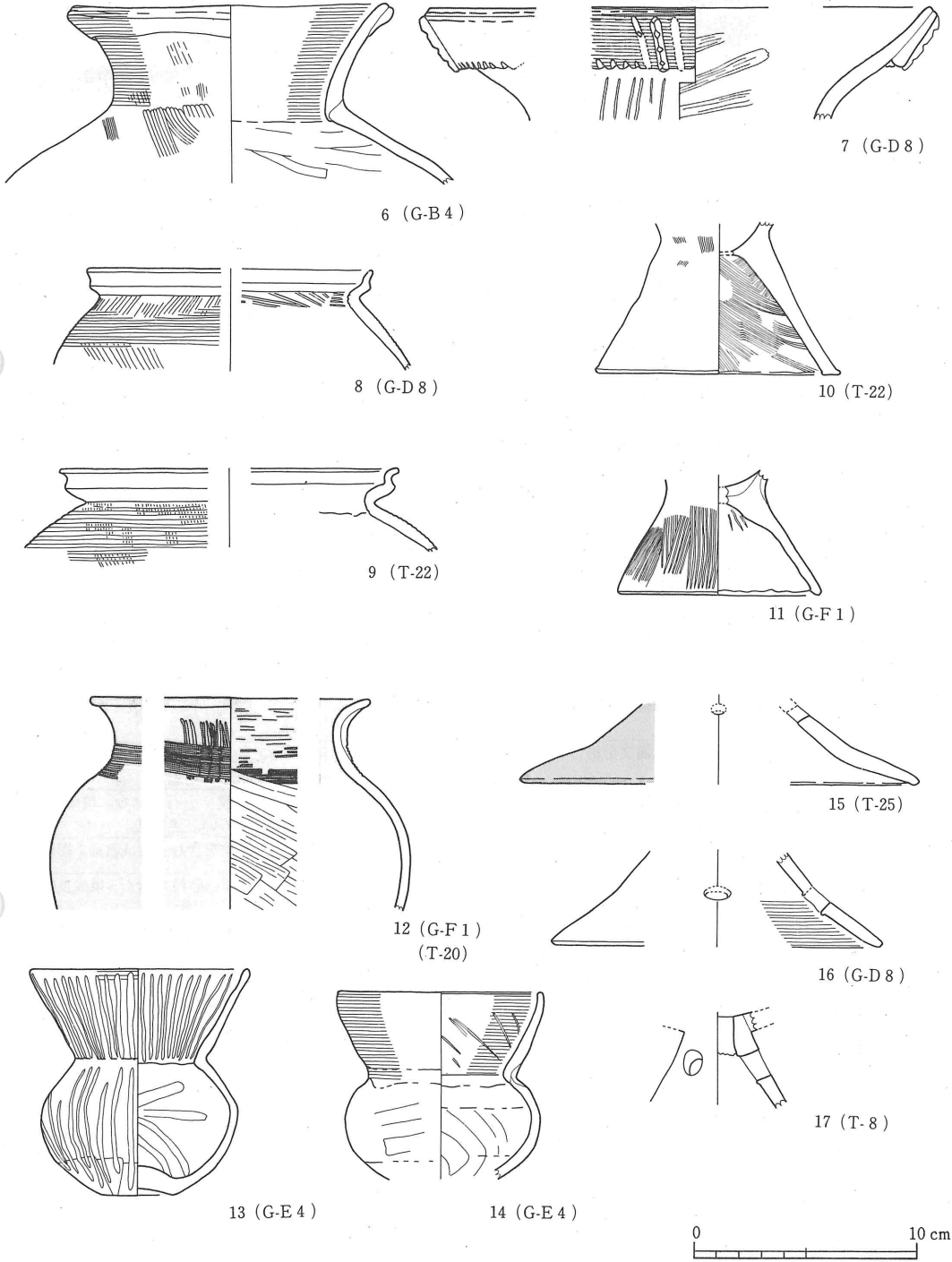
4 (G-F1)



5 (G-F1)

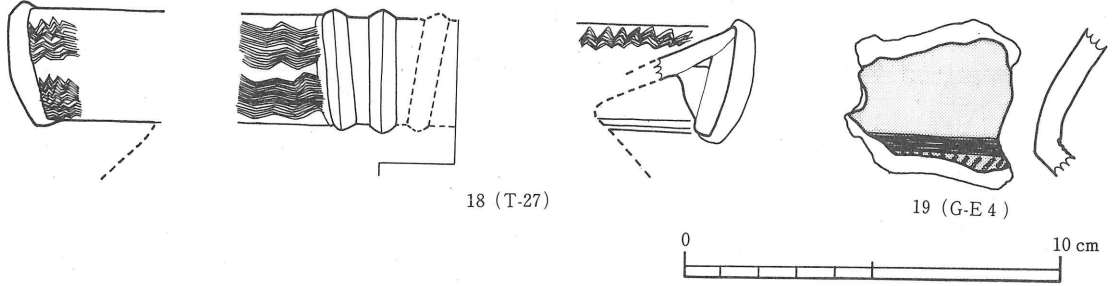


第42図 愛宕塚古墳出土土器実測図(3)



第43図 愛宕塚古墳出土土器実測図(4)

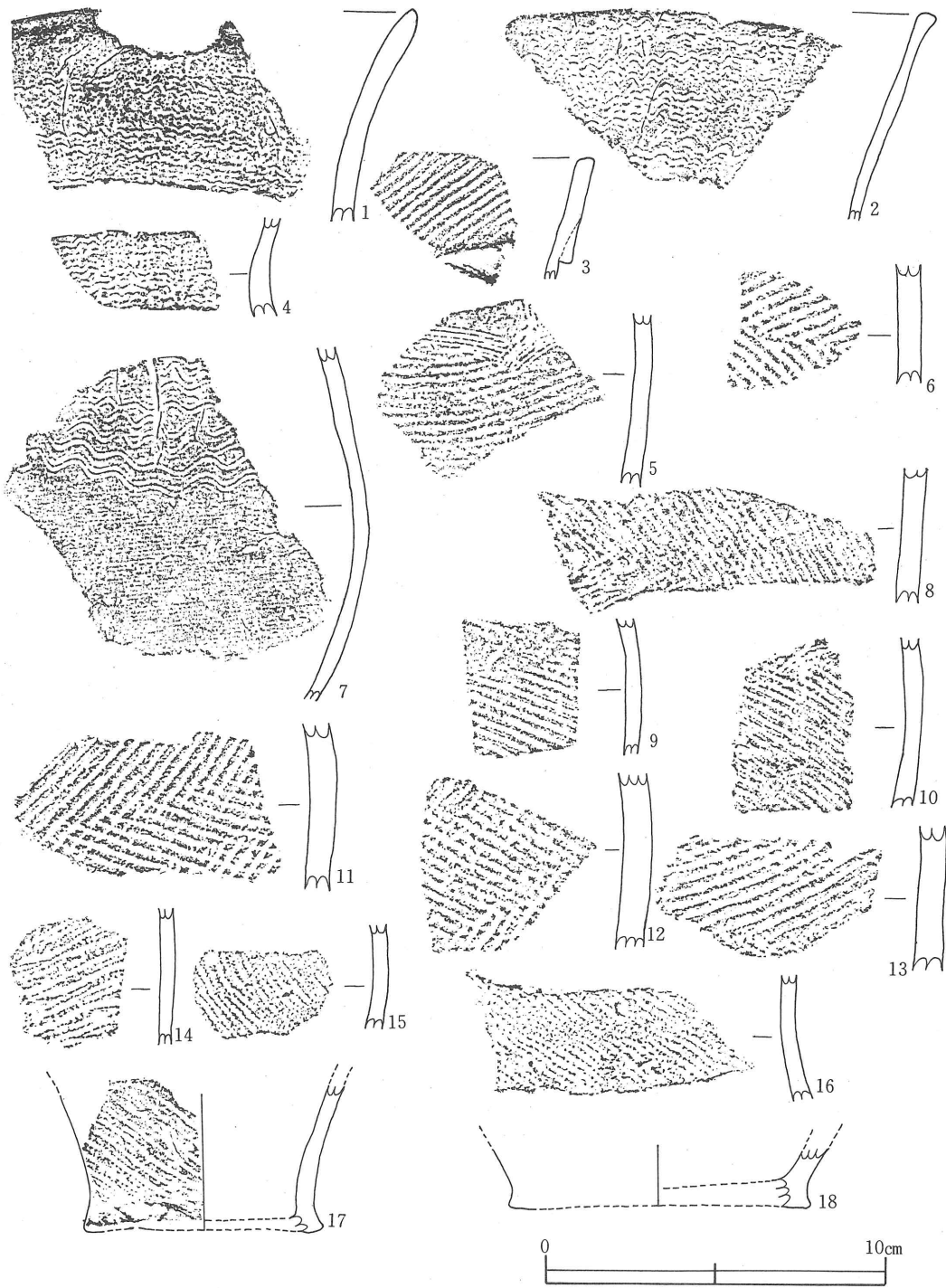
第1編 愛宕塚古墳



第44図 愛宕塚古墳出土土器実測図(5)

番号	出土 トレンチ グリッド	文様および特徴	胎土・焼成・色調
1	G-D8	口辺部片で、三本単位の櫛描き波状文を施している。内面は、剥落しているがなでている。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成良好。赤褐色。
2	G-F1	口辺部片で、五本単位の櫛描き波状文を施している。内面に、若干の輪積痕を残す。また、内面は、よく磨かれている。	胎土は、雲母末を含む。焼成は良好で緻密、堅固。黒褐色。
3	T-15	口辺部片で、縄文を施し、折り返している。	胎土は、細かい砂粒を含む。焼成普通。黄褐色。
4	G-E4	頸部片で、櫛描き波状文を施している。1の土器片と同系である。	胎土は、砂粒・雲母末を含む。焼成良好。赤褐色。
5	T-12	胴部上半の破片で、五本単位の櫛描き文と縄文を施している。	胎土は、細かい砂粒を含む。焼成良好。黄褐色。
6	T-8	胴部片で、羽状縄文を施している。	胎土は、砂粒を多く含む。焼成は、よくなくもろい。褐色。
7	G-F1	胴部片で、2と同一個体のものである。	
8	G-B4	胴部片で、羽状縄文を施している。	胎土は、砂粒・小石を含む。焼成普通。褐色。
9	G-F1	胴部片で、羽状縄文を施している。	胎土は、砂粒を多く含む。焼成は、よくなくもろい。褐色。
10	〃	胴部片で、羽状縄文を施している。	胎土は、砂粒・小石を含む。焼成は、よくなくもろい。黒褐色。
11	T-27	胴部片で、羽状縄文を施している。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。褐色。
12	T-22	胴部片で、羽状縄文を施している。	胎土は、細かい砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。
13	T-27	胴部片で、羽状縄文を施している。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。黒褐色。
14	T-15	胴部片で、斜縄文を施している。	胎土は、細かい砂粒・雲母末を含む。焼成普通。赤褐色。
15	T-10	胴部片で、縄文を施している。	胎土良好。焼成良好。黒褐色～赤褐色。
16	G-F1	頸部下半片で、縄文を施している。	胎土良好。焼成良好。淡黄褐色。
17	G-F1	底部片で、縄文を施している。	胎土は、細い砂粒を含む。焼成良好。褐色。
18	T-27	底部片	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。褐色。

第6表 愛宕塚古墳出土弥生式土器片



第45図 愛宕塚古墳出土弥生式土器拓影図

第2編 大日塚古墳

第1章 調査の経過

1 調査に至るまでの経過

昭和52年に実施した愛宕塚古墳の発掘調査は、墳形が前方後方墳であること、周湊内の出土遺物から前期古墳としての位置づけが可能であることなど、良好な調査結果を得ることができた。それは同時に、宇都宮市茂原町を中心とした県央部における古墳の出現と展開に多くの問題を提起することにもなった。

この愛宕塚古墳に隣接して築造されている大日塚古墳は、こうした問題を解明するための一つの鍵となることが予測され、調査するに至った次第である。

昭和55年、大日塚古墳の墳丘測量調査を実施。全長38.5mの小型の古墳ながら愛宕塚古墳同様の前方後方墳としての可能性を見だし、本古墳に対する期待感はますます高まりをみせるに至った。

昭和58年、墳形、規模、構造、築造時期など本古墳の実像を究明する発掘調査を開始。これ以降昭和60年までの3か年のうち、それぞれの年の夏期約1か月ずつを費やして発掘調査を継続していった。便宜的に、昭和58年の調査を第1次、昭和59年を第2次、昭和60年を第3次とした。各次の主な調査内容は次のとおりである。

第1次 墳形、規模を確認する調査

第2次 古墳の前方部、くびれ部、埋葬主体部の調査

第3次 古墳の埋葬主体部の調査、墳丘下及び隣接地に確認された住居跡の調査

2 調査の経過

ここでは都合3次にわたった調査の経過を逐次記す。

第1次調査 昭和58年7月28日～9月3日

測量の基本杭となる杭打ちは、7月28日から7月31日までの4日間を費やして行った。まず、後方部墳頂の中央に基点となる杭を設定し、そこから西面する古墳の見かけの主軸線を基準線としながら、5m方眼で墳丘及びその周辺部を覆うように杭打ちを行った。結果として、主軸線に対し平行となる方向には西から東に向かって1～13までの13本の杭、直交する方向には北から南に向かってA～Kまでの11本の杭が基本杭となって、60m×50mの範囲で調査する形となった。

8月1日宿舎入り。同日御祓いを済ませた後、調査開始となった。調査方法は、トレンチによる調査を採用し、基準線である見かけの主軸線に直交または平行するように、墳裾部からその周辺部にかけてトレンチを設定することとした。まず、前方部及び後方部の各隅の位置を推定できるようにするため、それぞれの辺の中程の位置にトレンチを設定（T-1, T-3, T-7, T-9）して、掘り下げを開始した。その後トレンチを増設（T-4, T-5, T-6, T-10, T-11, T-12）していったが、墳丘北側における墳裾部の確認は予想以上に苦慮し、調査の進行を鈍らせた。

8月13日から15日にかけてはお盆のために調査を一時中断、調査員の多くはそれぞれの郷里へと戻った。調査を再開して間もなく、各トレンチ内より古墳時代前期の土師器が次々に出土して前期古墳の可能性が濃厚となり、期待感はますます強まってきた。さらに、くびれ部確認のためのトレンチを設定（T-2, T-8）。8月下旬に至り、くびれ部北側で後方部北西隅の直角に曲がる角を確認。前方後方墳であることの確証を得るや、いままでの疲れもいっぺんに癒される思いであった。その後、後方部各隅確認のためにトレンチを拡張。8月末までには後方部のすべての隅が確認されて、所期の目的はほぼ達成されるに至った。

しかし、9月上旬に古墳西隣の給水塔立入検査が予定されているため、それまでに原状復帰させるという期限付きの調査であったので、くびれ部の確認が不十分な上、前方部の各隅も未確認のまま調査を終了せざるを得ない状況となった。その後宇都宮市水道局から若干の期間延長の承諾を得て、測量などの残務処理が急ピッチで進められ、9月3日には埋め戻しも完了し、無事調査を終了させることができた。9月4日に宿舎を引き払い、帰途に就いた。

第2次調査 昭和59年7月16日～8月31日

7月16日宿舎入り。同日御祓いを済ませ、午後から調査開始。調査は、第1次調査の成果及び未確認部分をより面的に確認するために、グリッドによる調査を採用した。後方部及び前方部の墳頂部における埋葬主体部を確認するため、後方部墳頂には第1次調査で得られた真の主軸を基準線として5m×4mのグリッド（G-1）を、前方部墳頂には見かけの主軸線を基準線とした5m×5mのグリッド（G-4）をそれぞれ設定した。また、第1次調査で確認が不十分であったくびれ部をより明らかにするため、くびれ部南側には第1次調査で設定したT-2とその拡張トレンチ及びT-11を繋げた形のグリッド（G-2）を、くびれ部北側にはT-8を拡張した形のグリッド（G-3）をそれぞれ設定した。さらに、未確認の前方部隅を確認するため、第1次調査の結果推定される南隅、北隅の位置にグリッド（前者はG-5、後者はG-6）をそれぞれ設定した。

墳頂部を除くグリッドの調査については、第1次調査で概ねの状況を把握しているので、墳裾部の確認は比較的スムーズにいくものと楽観していた。しかし、いざ蓋を開けてみればくびれ部南側は複数の穴が墳丘に掘り込まれていたり、前方部北隅で竪穴式住居跡とみられる遺跡が墳丘の下から確認されたりするなど、次々にあらわにされてくる新しい実態は、作業の進行を阻むも

のにもなった。予定通り調査が進行したのはくびれ部南側及び前方部南隅だけであった。お盆までの1か月を目安としていた調査であったが、調査期間の延長を余儀なくされてしまった。

一方、埋葬主体部確認にあたった後方部、前方部の各墳頂部における調査については、前方部側には埋葬主体部のなかったことが早い時期に確認され、その調査を終了させることができたものの、後方部側では小祠に関わるものとみられる複数の攪乱があって、慎重に調査を進めたが予想される壙穴の平面形は容易には確認できない状態であった。

8月13日から15日まではお盆のため調査を一時中断。再開後間もなくくびれ部北側、前方部北隅の調査が若干の問題を残しながらも一応終了し、墳形の概要を把握するまでに至った。残る後方部埋葬主体部の確認調査については、遅々として調査が進展しない状態であったが、主軸に直行するサブトレンチによる断ち割り調査によって、断面としての壙穴の平面形を確認することができた。しかし、この時点で残された調査期間は僅かに3日となり、第3次調査に残りの解明を託し、埋め戻しを開始、8月31日に第2次調査を終了した。

第3次調査 昭和60年7月16日～8月31日

7月16日に宿舎入り。第2次調査で断面という形でしか確認できなかった後方部埋葬施設(G-1)と穴が多数掘り込まれていくびれ部南側(G-2)の再調査、さらに前方部北隅で確認された竪穴式住居跡(G-6)と第1次調査で古墳に隣接して確認された竪穴式住居跡(G-7)の調査を目的として着手した。

古墳に隣接した住居跡を調査するグリッド以外はすべて既設のグリッドであったので、2日間にわたる掘り返しの後はグリッド拡張という形で調査を進めていった。

調査箇所を絞ったこともあって、進行状況は比較的スムーズであった。G-7の調査は、住居跡の平面形確認面までの深さが浅く、3日後には平面を確認、5日後には床面までの掘り下げまでが完了した。一方、G-2及びG-6の調査は、拡張部分の墳丘面を確認するまでに至った。

後方部埋葬主体部を調査するG-1では、断面を頼りとして平面形を捉えようと精査に努めた。土師器破片に混じって寛永通宝などの古銭やキセルなどが深い位置から出土するという予想以上の攪乱の状況に期待感は徐々に薄らいでいった。そのような状況で掘り下げを進めていったところ、7月28日、いつもの古銭の出土かという感じで掘り出した1つの円形の銅製品があった。しかし、方形の穴が見あたらない。おそるおそる観察すると穴の代わりに小さな突起があるではないか。もしかしたら、…というのが径2.6cmの超小型銅鏡の発見であった。周辺を精査すると、鏡に近接して赤色顔料の残留する範囲も確認されたことから、埋葬部の一部に到達するに至ったと結論を下した。しかし、依然として壙穴の掘形の確認が不十分な上、出土品の貧弱なことから他の埋葬の存在をも予想して、さらにサブトレンチによる断ち割り調査を進めた。

8月に入って、G-6で墳丘下から住居跡の平面形を確認。12日から15日まではお盆のため、調査を一時中断。8月下旬に至って後方部埋葬主体を除く調査がほぼ完了した。

8月24日から後方部の構築方法を解明するために、主軸に対しほぼ直交し、G-1とT-3を

接続させる形の断ち割りトレンチを設定。残すところ4日にして、土盛りを開始した整地面に達し、さらにここでも多量の焼土を出土する竪穴式住居跡の一部を確認した。

8月31日までに埋め戻しも完了して宿舎を引き払い、3次延べ4か月にわたった本古墳の発掘調査を終了した。

第2章 墳丘と周湟の調査

1 発掘調査前の状況

大日塚古墳は、栃木県宇都宮市茂原町御馬前に所在する。本古墳及びその周辺は現在国有地となっており、境界にはフェンスが張りめぐらされている。その敷地内には本古墳の前方部側に隣接して宇都宮市のコンクリート製給水塔が構築されていることから、本古墳を含めた敷地内の管理については宇都宮市水道局が行っている。

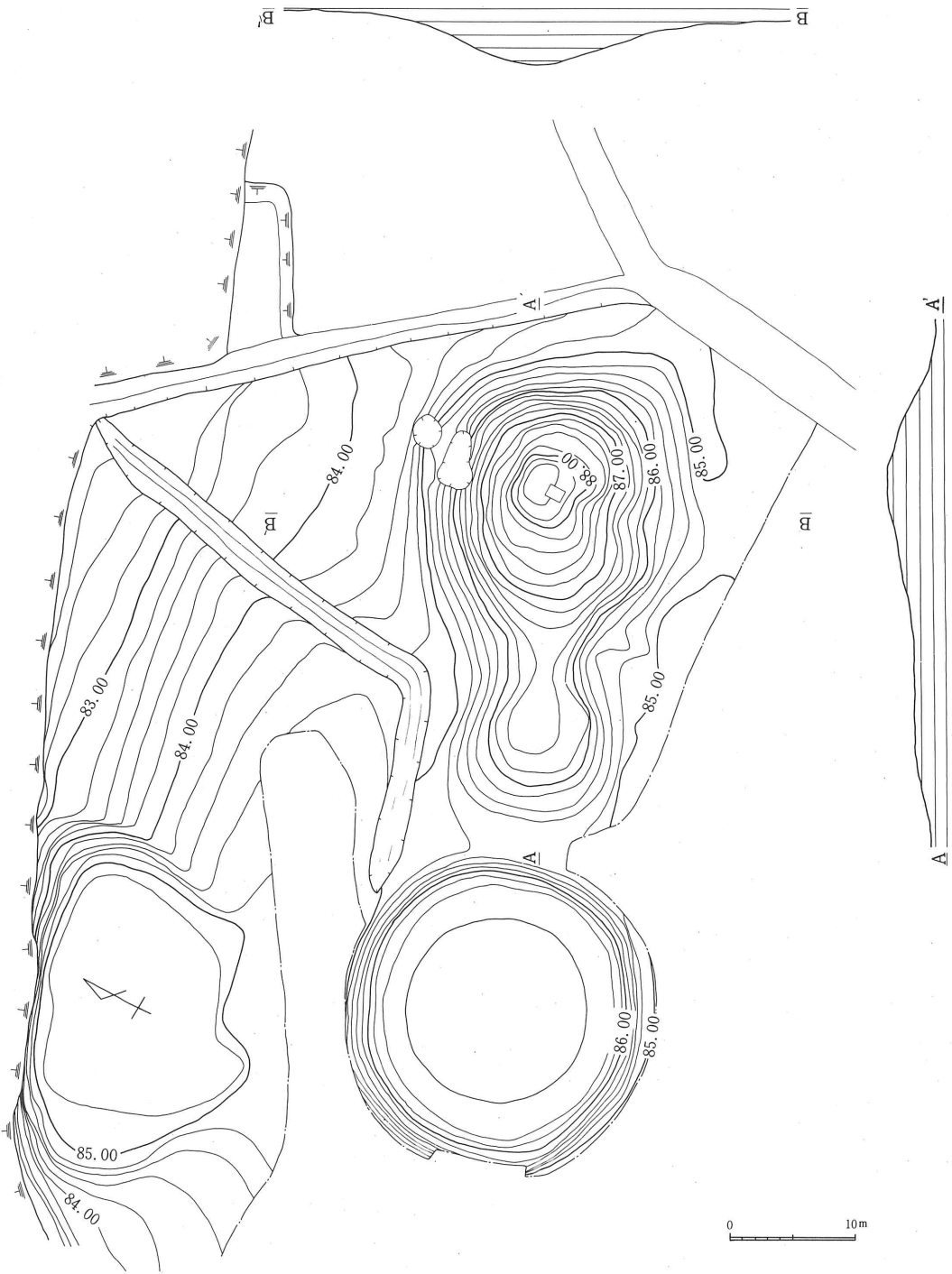
本古墳の周辺はかつて畑地として利用されていたという地元住民の話もあるが、現在は雑草の生える荒地となっている。また、墳丘上には落葉広葉樹を主とした雑木が一面に生えているほか、後方部墳頂には御神木のスギの大木1本と小祠が祀られている。かつては小祠に通じる参道口に木製の鳥居もあったが、現在はなくなっている。

大日塚古墳の墳形については、昭和51年に発行された『栃木県史』資料編・考古一―の古墳時代の概説にも記されているように、当時の見解としては牛塚型帆立貝式古墳とされていた。掘削による大きな損壊はないものの、全長約30mの小さな古墳であったが故、長年の風雨は後方部の稜や裾部の境を明瞭に残すに至らなかったであろう。

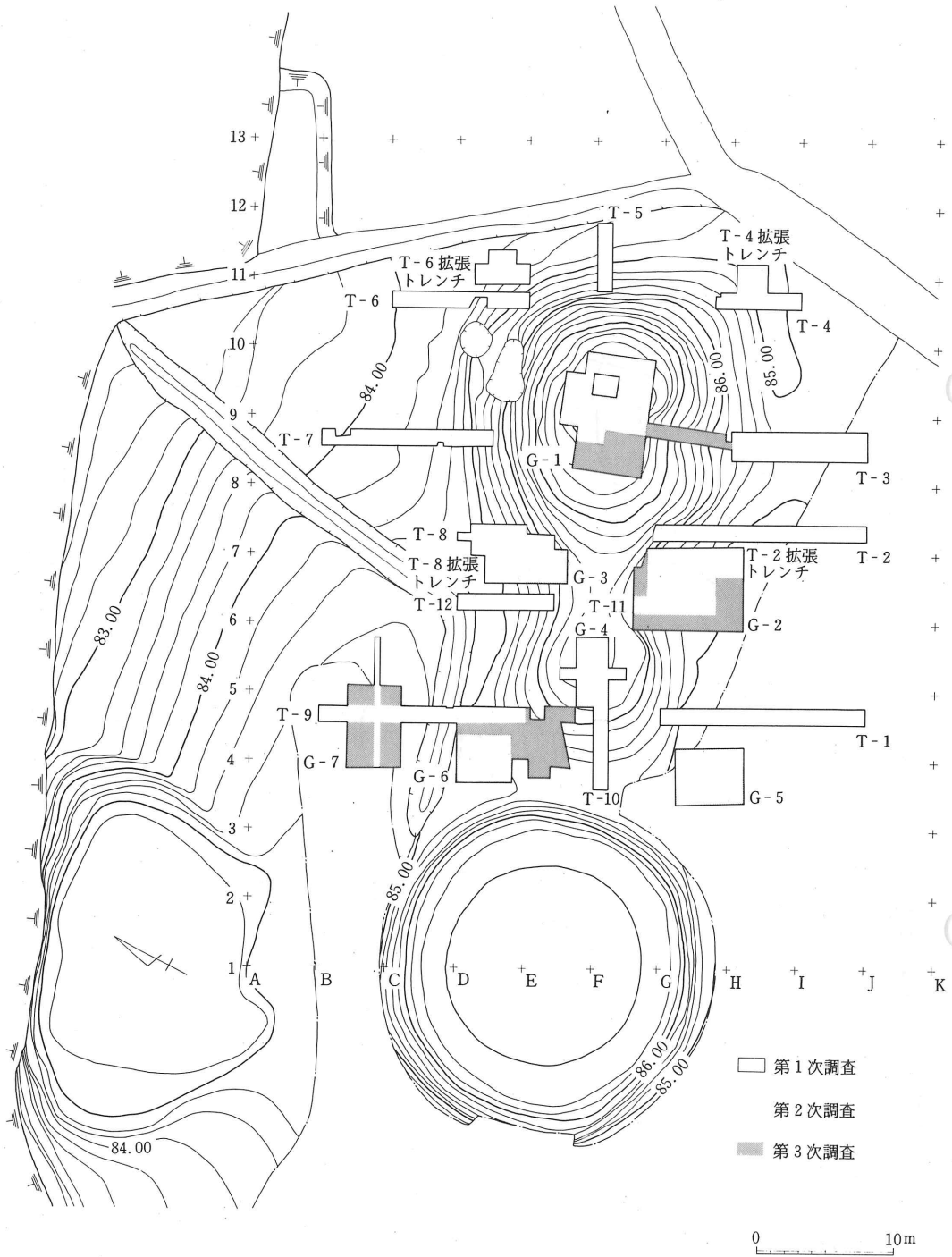
翌昭和52年、近接して築造されている愛宕塚古墳を発掘調査して、前期古墳に位置づけられる前方後方墳であることが判明するやいなや、大日塚古墳への関心もにわかに高まり、昭和55年には墳形を再確認しようと墳丘測量調査を実施するに至った。その結果、従来後円部とみられていた部分の北、東、南側のコンターが比較的直線になったことから、前方後方墳であることの見解を強め、また、南側くびれ部ではコンターが若干外側に流れていることから、突出部の存在も想定された。墳丘の状態は、後方部墳頂の小祠へ通じる参道による若干の変形とその北側にある土取りによって生じた小穴があるものの、外見上からは比較的良好な保存状態にあるものと考えられた。周湟については、発掘調査以前に墳丘の南側でブルドーザーによる整地作業が行われていたことがあり、その時点で観察した限りでは周湟らしい痕跡は確認されなかった。そのため、周湟を伴わず、伴っていたとしても極小規模なものであらうと考えられた。

2 墳丘と周湟の調査

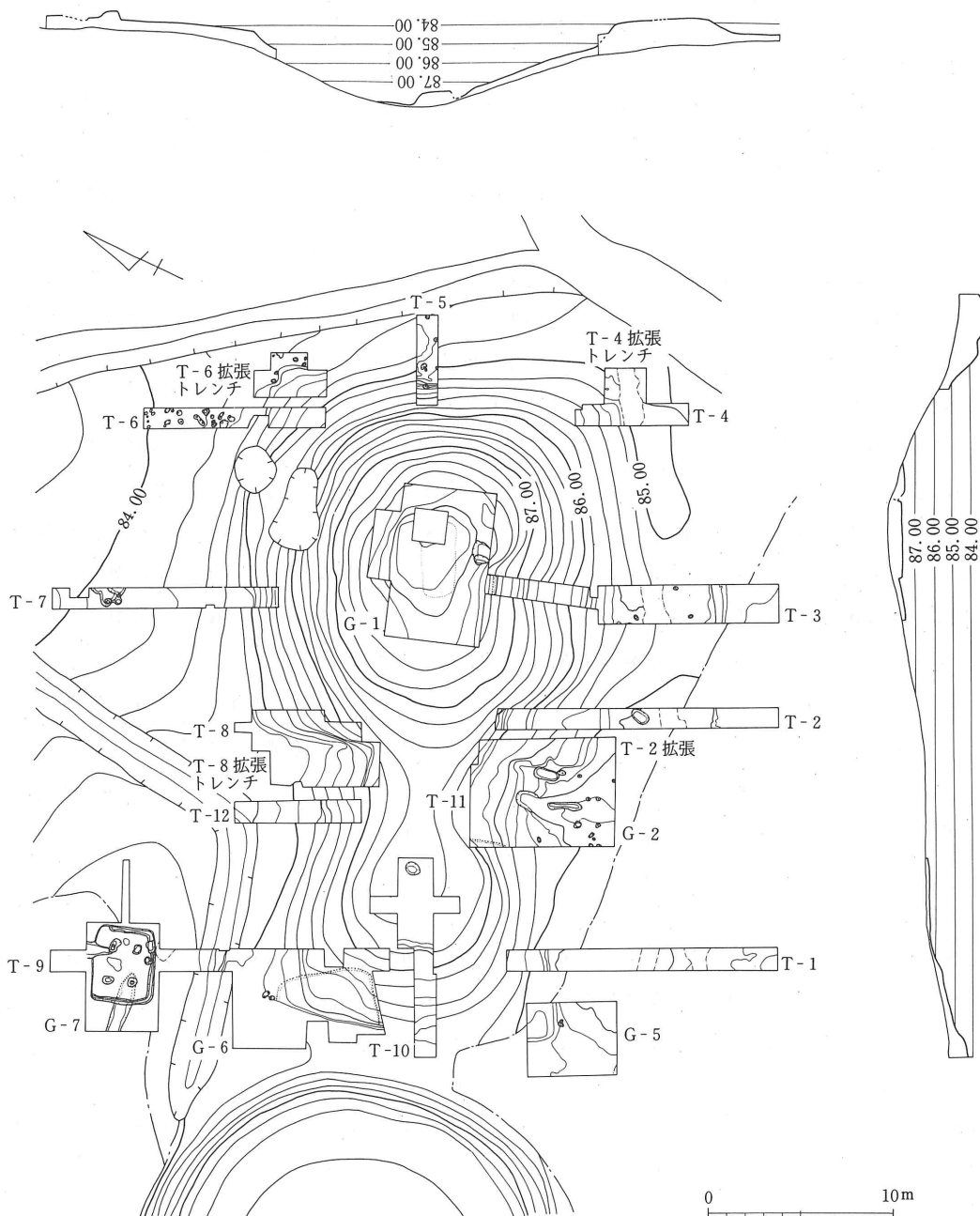
3次にわたる調査の結果、大日塚古墳は、愛宕塚古墳と同じく前方後方墳であることが判明し



第46図 大日塚古墳全測図



第47図 大日塚古墳トレンチ配置図



第48図 大日塚古墳実測図

た。全掘調査のようにすべてをあらわにしての結果ではなく、トレンチ及びグリッドによる部分的な発掘調査という制約つきではあるが、墳丘及び周濠に関して判明した所見を以下に記す。

(1) 後方部 (第48～51図)

後方部の状況は、第1次調査で設定したT-2, T-3, T-4, T-5, T-6, T-7, T-8とその拡張トレンチ, さらに第2次調査で設定したG-2 (T-2及び拡張トレンチを拡張したグリッド), G-3 (T-8及び拡張トレンチを拡張したグリッド)によって概ね知ることができた。

後方部の隅は、T-2拡張トレンチで南西隅, T-4拡張トレンチで南東隅, T-6拡張トレンチで北東隅, T-8では北西隅をそれぞれ確認した。そのうち、南東隅は、本古墳西隣に構築されている給水塔に接続されたコンクリート管の埋設溝によって削り取られてしまっていることが確認された。また、北東隅も、攪乱により若干の凹みを生じていた。

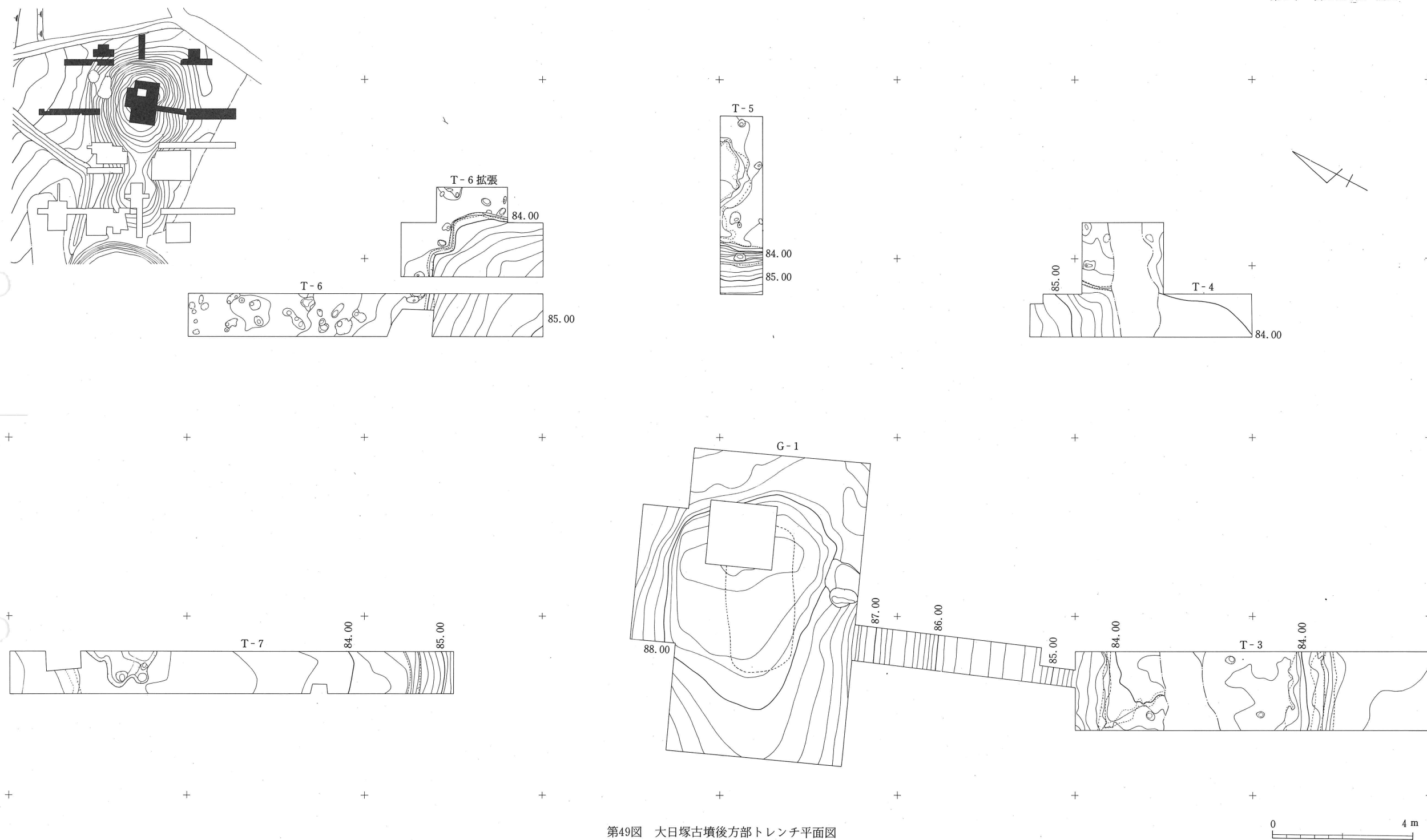
後方部各辺の計測値は、東辺19.8, 西辺19.1, 北辺20.3, 南辺20.3m, また、四隅の内角(各隅は必ずしも角度をしっかりと計り出せるほどの角を形成していないので、隣合う2辺の延長線が交わってできた内角を隅の内角とした)は、北東隅で85°, 北西隅で95°, 南東隅で92°, 南西隅で88°という結果が出た。後方部の平面形は、南北の長さに対して東西の長さが1m内外長く、北東隅が他の隅よりも若干突出しているようになっているものの、概ね正方形に近い形状であることが判明した。なお、後方部の主軸は、N-65°-Eであった。

後方部の立ち上がりは、いずれのトレンチにおいてもロームの削り出しによって形成されているのが確認された。特に後方部南半においてはロームの削り出しが顕著で、墳裾部から30～80cmの高さまでがロームであったためその確認も容易であった。その中でもとりわけ南東隅及び東辺中央においては墳裾部から約80cmの高さまでがロームの削り出しによるもので注目された。一方、北半ではロームの立ち上がりが墳裾部から10cm内外の高さまでと非常に少ないもので、墳裾部の確認には手間取った。

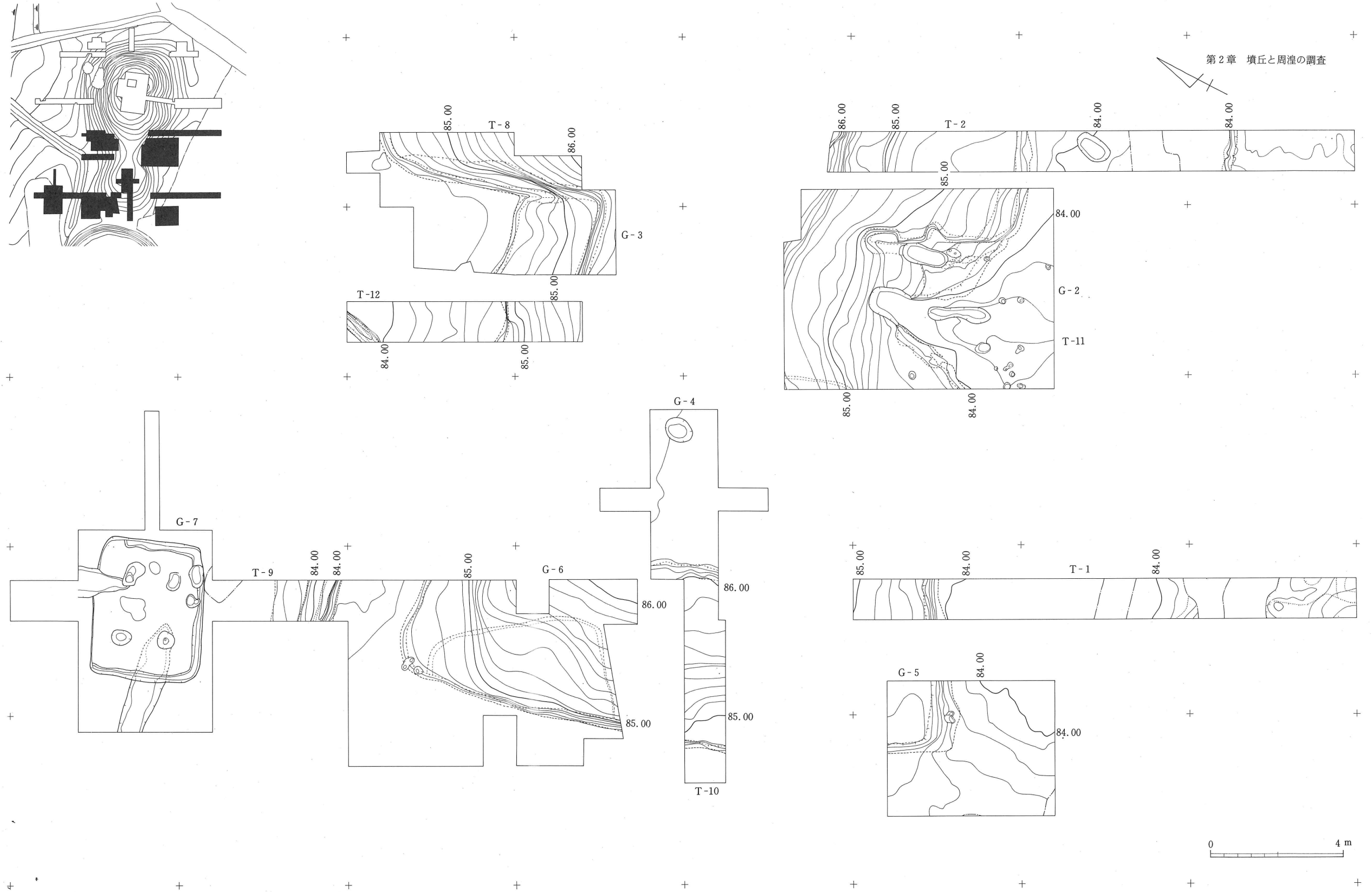
その立ち上がり方は、北辺及び南辺においては、墳裾部から20～40cm程度の高さまでの範囲については32～56°の急な角度で立ち上がるものの、それより上部にあっては10～33°と多少ばらつきはあるが、大半が10～20°の範囲に収まる勾配をもって墳頂部へと続いている。一方、東辺及び西辺においては、墳裾部からの立ち上がりの角度が49～61°と北辺及び南辺に比べやや急な角度であり、またその範囲も100～140cmの高さまでと非常に高いことから、一層勾配の急な様相を増大させている。それより上部についても20～25°の勾配をもち、北辺及び南辺に比べればやや急な角度で墳頂部へと続いている。

後方部墳裾部の標高は、東辺側で83.7～84.0m, 中ほどで84.1～84.3m, 西辺側で84.4～84.5mとなっていて、東辺側が一番低く、西辺側にいくほど徐々に高くなっていることが判明した。

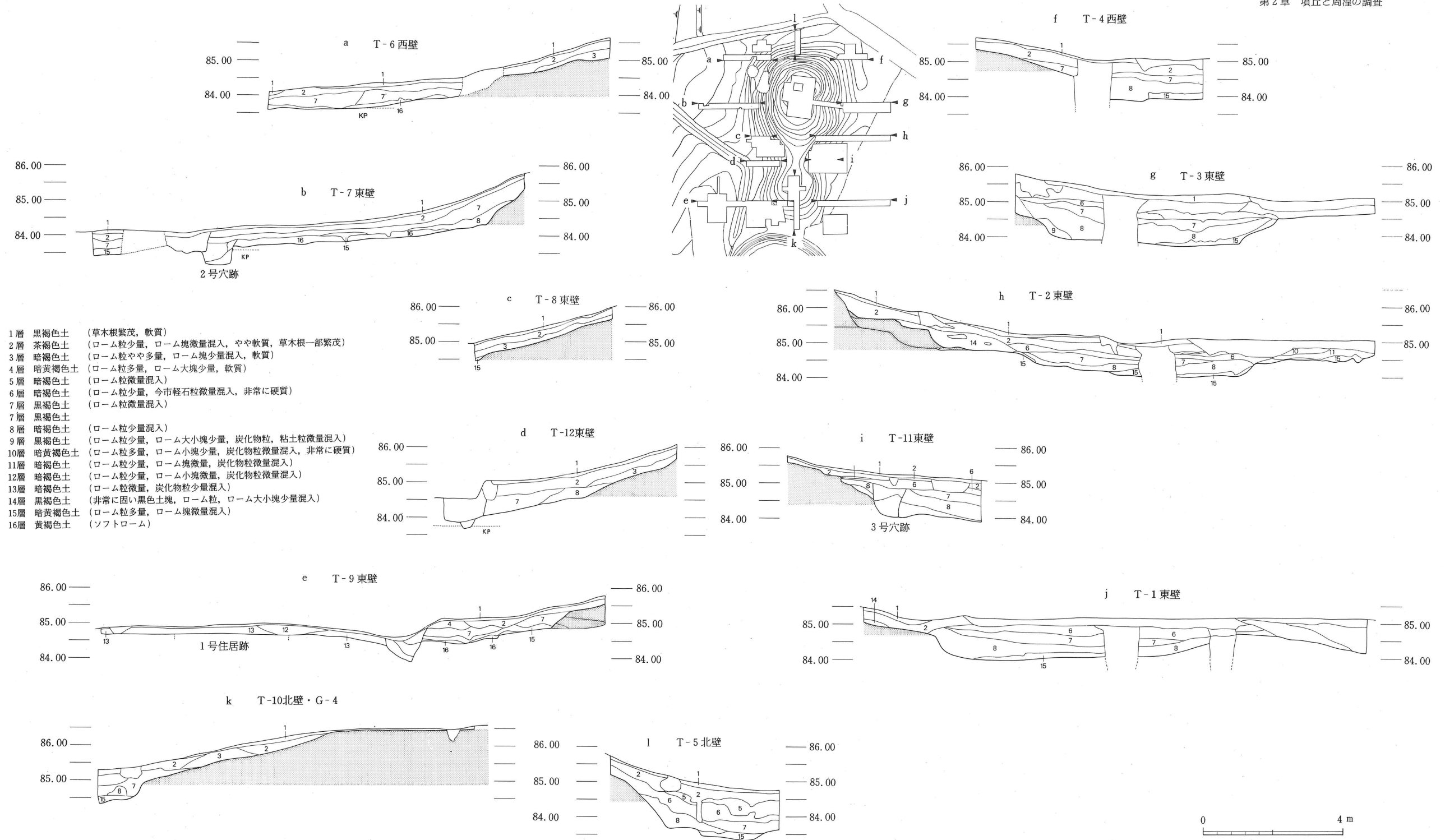
なお、ローム層上面の標高は後方部北東隅で84.0, 北西隅で84.5, 南東隅で84.7mとなってお



第49図 大日塚古墳後方部トレンチ平面図



第50図 大日塚古墳前方部トレンチ平面図



第51図 大日塚古墳トレンチ断面図

り、南から北に下がる現況地形の勾配(約10/100)に準じて、約3.2/100の勾配で下がっていることが確認できた。また、下位の鹿沼軽石層については、古墳北側の平坦地でその上面が確認され、その標高が概ね83.6m内外であることも確認できたが、勾配の状況については不明である。

(2) 前方部 (第48, 50～51図)

前方部の状況は、第1次調査で設定したT-1, T-2, T-8とその拡張トレンチ, T-9, T-10, T-11, T-12, さらに第2次調査で設定したG-2 (T-2及び拡張トレンチを拡張したグリッド), G-3 (T-8及び拡張トレンチを拡張したグリッド), G-5, G-6によって概ね知ることができた。

前方部前端の両隅については、G-5で南隅, G-6で北隅を確認した。南隅は良好な遺存状態であったため容易に確認することができたが、北隅については墳丘築造以前に存在した竪穴式住居跡が絡み合っていたことから確認作業に手間取ったが、最終的には比較的明瞭な隅を確認することができた。確認された南・北隅の内角は、南隅で87°, 北隅で83°であり、南隅の方が若干開き具合が大であった。

前方部の南辺及び北辺の状況は、各辺の中央部が未調査であるうえ、くびれ部南側付近に激しい攪乱があったことから、整然とした墳裾部の線を確認するまでに至らなかった。また、前方部の南辺及び北辺にテラスが存在することが判明している(くびれ部の項で詳述)が、そのテラスがくびれ部から前方部前端に至るまでどのような形状で付設されていたのかも問題である。くびれ部南北両側では一部攪乱を受けてはいるものの、その状況を比較的明確に捉えることができたが、前方部南及び北隅付近ではその存在は確認できなかった。このことから、くびれ部では幅広であったテラスは、前方部前端に至るまでにその幅を狭めていくものとみられるが、今回の調査では明瞭な形で捉えることはできなかった。

前方部と後方部との接続の仕方については、テラス部分に視点を置いた状況はくびれ部の項で記述するとして、ここではテラス部分を除いたいわば前方部本体ともいうべき部分の接続状況について記述する。前方部本体は緩斜面であるテラス部分から急勾配で立ち上がる状況から明確に区分されるが、特にくびれ部北側で顕著に観察することができた。その本体裾部は後方部西辺に北西隅から約6.4m, テラス端部からは約2.4mの位置に約78°の外角をもって接続していた。一方、くびれ部南側は、攪乱のために判然としない状況であったが、確認状況からの推定で南西隅から4.2m辺りの位置に約75°の外角をもって接続していたものとみられる。なお、テラス部分を除いた前方部幅は約8.5mとなる。

一方、前方部前端については、南隅と北隅とを結んだ直線よりも前端の辺の中央部分が若干西側に突出し、全体として緩やかな弧線を描くという特異な形態をしていることが判明した。最も突出した位置は、南北両隅を結んだ線の中点から若干南隅に寄ったところにあった。なお、前方部前端幅は約16.6, 前方部長は約15.5mという規模であった。

前方部の立ち上がりは、大半が後方部同様ロームの削り出しによって形成されているのが確認

されたが、くびれ部付近においてはロームを周湟底とほぼ同じレベルまで掘削した後、盛土を施すことによって立ち上がりを形成していることが判明した。この状況については、断ち割り調査によって明瞭に確認されているので、そこで詳述する。ロームの削り出しが顕著なのは、前方部においても後方部同様南半であり、特に南隅寄りの南辺においては墳裾部から約70cmの高さまでがロームの削り出しによるものであった。前方部北半におけるロームの削り出しは墳裾部から10cm内外であり、南半に比べ著しく少ないものであった。

その立ち上がり方は、くびれ部寄りの南辺及び北辺では21~23°の勾配で墳端部から墳頂部へほぼ直線的に立ち上がっているのに対し、南隅寄りの南辺及び西辺では墳裾部から50~70cmの高さまでの範囲は51~54°の急な角度で立ち上がり、それより上部には10~15°の緩斜面で墳頂部へ続く。また、北隅寄りの北辺においては墳裾部から約10cmの高さまで急な角度で立ち上がった後、幅約160cmにわたり約8°の緩やかな勾配となり、その上へ再び急勾配で墳頂部へと続くものであった。

前方部墳裾部(テラスがある場合にはテラス裾部)の標高は、南辺側で84.0内外、東辺側で84.4内外、北辺側で84.5~84.6m、南辺側が一番低く、北辺側にいくほど徐々に高くなっていった。なお、南辺側と北辺側での比高は最大で約60cmであった。

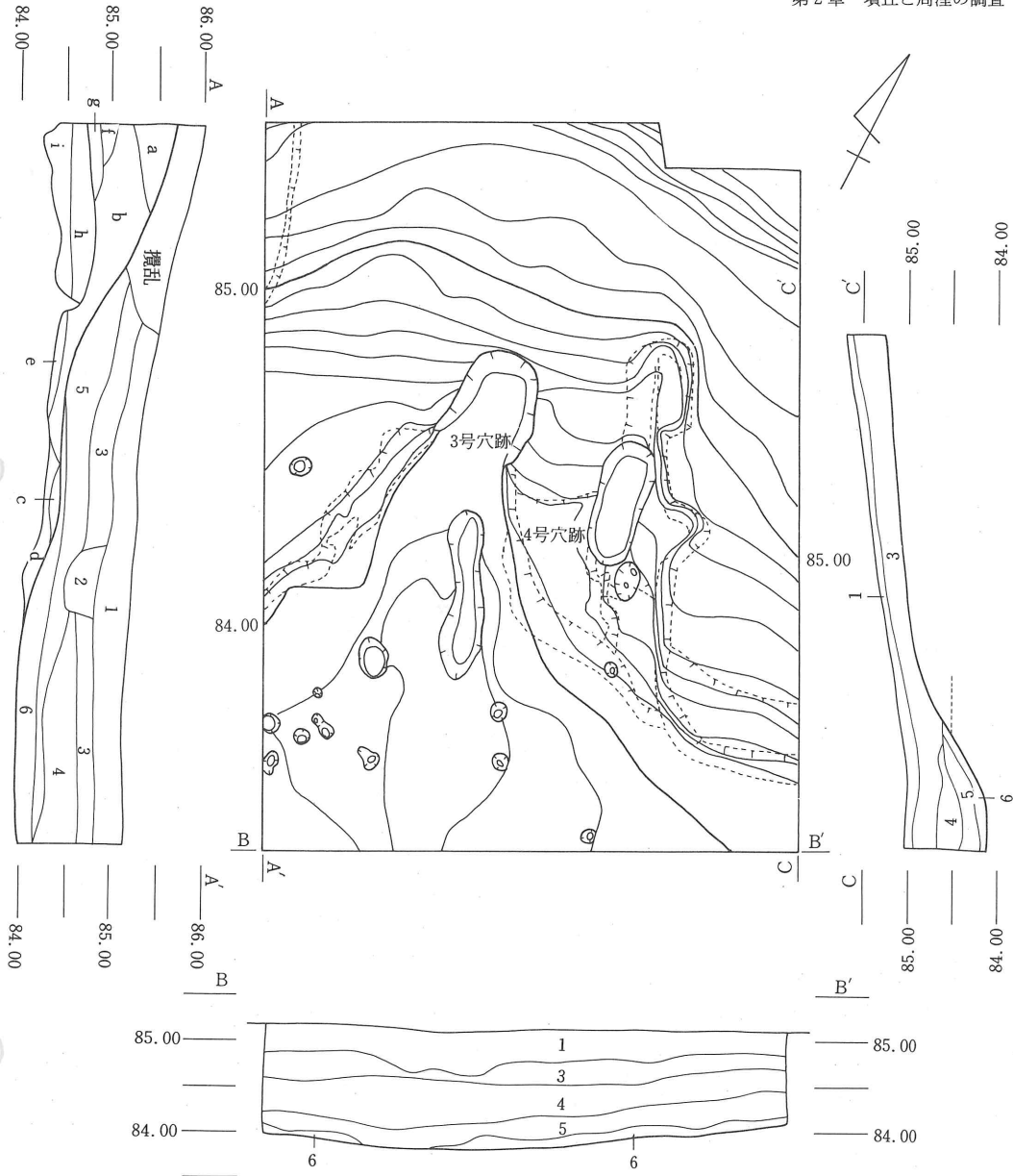
(3) くびれ部 (第52・53図)

くびれ部の状況は、後方部及び前方部と一部重複するが、第1次調査で設定したT-2及び拡張トレンチ、T-8及び拡張トレンチ、さらに第2次調査で設定したG-2(T-2及び拡張トレンチを拡張したグリッド)、G-3(T-8及び拡張トレンチを拡張したグリッド)によって概ね知ることができた。

くびれ部南側は、調査前に攪乱を受けたとは予測できなかったが、掘り下げを開始すると近現代の陶磁器や電柱に取り付けられていた碍子等がおびただしく出土し、攪乱の激しさがあらわにされた。また攪乱のみならず、時期不明の楕円形の穴が少なくとも2口墳丘を破壊していることも判明した。このような状況から、くびれ部南側の形状を的確に把握することは非常に困難であった。一方、くびれ部北側は、攪乱はほとんどみられず、良好な遺存状態であることが確認された。

調査の結果、両くびれ部の前方部側縁にはテラスが取り付けられていることが判明した。とくにくびれ部北側において良好な状態で確認され、幅220内外、高さ約20cm、墳丘側が若干高くなるよう勾配がついている。後に詳述するが、このテラスはわずかなロームの削り出しも認められるが、そこに盛土が加えられることにより付設されていることが判明した。くびれ部南側についてもテラスの存在は確認されている。その規模については攪乱が激しいため判然としない部分が多いが、一部で幅約270、高さ約20cmのテラスが遺存している。築造状況は、くびれ部北側同様若干削り出されたローム上に盛土されたものである。

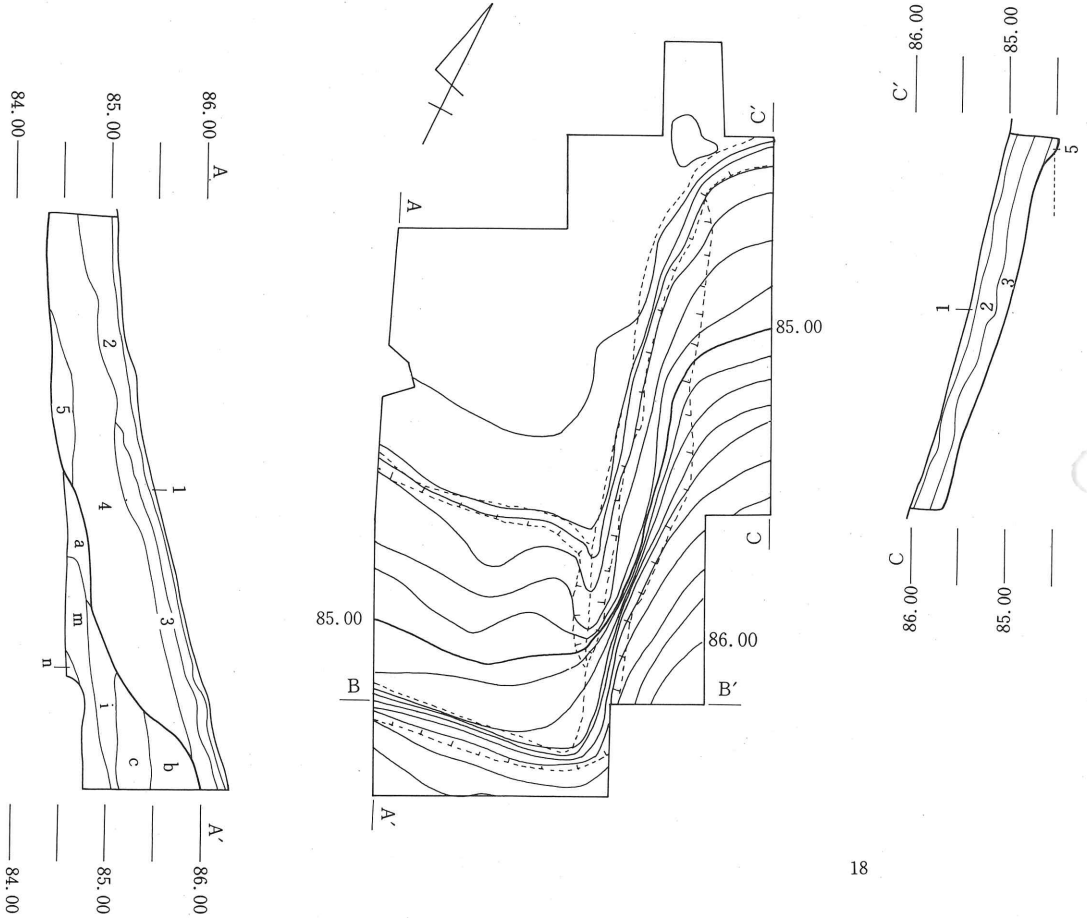
このテラスの後方部との接続状況については、くびれ部北側では後方部西辺に北西隅から約430cmの位置に約80°の外角を形成していることが確認できた。一方のくびれ部南側では攪乱が激



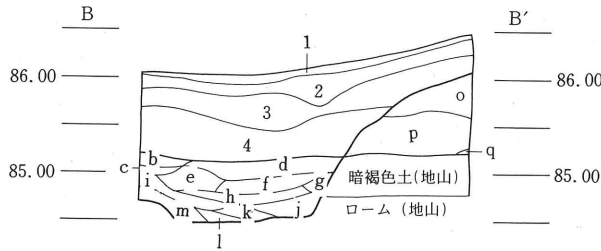
- 1層 黒褐色土 (草木根繁茂, 軟質)
- 2層 褐色土 (ローム粒・鹿沼軽石粒少量混入)
- 3層 茶褐色土 (ローム粒少量, ローム小塊微量混入, やや軟質, 草木根一部繁茂)
- 4層 黒褐色土 (ローム粒微量混入)
- 5層 暗褐色土 (ローム粒少量混入)
- 6層 暗黄褐色土 (ローム粒多量, ローム塊微量混入)

- a層 黒褐色土 (ローム粒・ローム塊多量混入, 硬質)
- b層 褐色土 (ローム粒やや多量, ハードローム塊・炭化物粒少量, 鹿沼軽石粒微量混入)
- c層 明褐色土 (ローム粒やや多量, ローム塊・炭化物粒少量混入)
- d層 黄褐色土 (ローム主体)
- e層 黄褐色土 (ローム粒・ローム塊多量混入)
- f層 黒褐色土 (ローム粒やや多量, ハードローム塊少量混入)
- g層 明褐色土 (ローム粒多量, ローム塊微量混入)
- h層 黒褐色土 (ローム粒少量, ローム塊微量混入)
- i層 黄褐色土 (ローム粒・ローム小塊多量混入)

第52図 大日塚古墳くびれ部南側トレンチ平面図・断面図



18



- 1層 黒褐色土 (草木根繁茂, 軟質)
- 2層 褐色土 (ローム粒・鹿沼軽石粒少量混入)
- 3層 茶褐色土 (ローム粒少量, ローム小塊微量混入, やや軟質, 草木根一部繁茂)
- 4層 暗黄褐色土 (ローム粒多量, ローム塊微量混入)
- a層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小塊少量混入)
- b層 黄褐色土 (ローム粒・ローム塊主体, ややしみに欠ける)
- c層 黄褐色土 (ローム粒・ローム塊主体でb層よりローム塊の割合大, ややしみに欠ける)
- d層 黄褐色土 (ローム粒多量・ローム塊少量混入)
- e層 暗褐色土 (ローム粒, ローム塊少量混入)
- f層 暗褐色土 (ローム粒やや多量, ローム塊微量混入)
- g層 黒褐色土 (ローム粒少量混入)
- h層 暗黄褐色土 (黒色土を含んだローム粒・ローム塊主体)
- i層 暗褐色土 (ローム粒, ローム大塊多量混入)
- j層 暗黄褐色土 (ローム小塊多量混入)
- k層 暗黄褐色土 (ローム小塊少量混入)

- l層 暗黄褐色土 (ローム塊主体)
- m層 黒褐色土 (ローム粒・ローム塊やや多量混入)
- n層 暗黄褐色土 (ローム粒・ローム塊多量混入)
- o層 黒褐色土 (ローム粒やや多量, ローム小塊少量混入)
- p層 黒褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量, 白色砂粒微量混入)
- q層 黄褐色土 (ローム塊)

第53図 大日塚古墳くびれ部北側トレンチ平面図・断面図

しいため正確な位置は特定できないが、前方部南辺の状況より後方部南西隅から約180cm辺りの位置に約85°程度の外角を形成して接続していたものとみられる。すなわち、前述した前方部接続の方法と同様に、後方部の主軸線よりもかなり南側に片寄って接続していることが判明した。なお、テラスを含めたくびれ部幅は約13mであった。

(4) 盛土 (第52～54図)

墳丘の断ち割り調査により判明した盛土の状態は、後方部では第1次調査で設定したT-3と第2、3次調査のG-1とを接続させる形に設定したトレンチ、くびれ部及び前方部ではG-2及びG-3内の一部である。

まず、後方部南半を中央部で東西にほぼ二分する形に設定された後方部側のトレンチでは、墳丘下まで断ち割り調査を実施した結果、次のことが判明した。

- ① 標高85.1m内外でほぼ水平の整地面を形成していた。整地面となった土層は、ローム層の上位に位置する暗褐色の地山、いわゆる黒色土層で、ローム層上面の標高が84.7mであることから、暗褐色の地山の厚さは概ね0.6mとなる。
- ② 整地面下に竪穴式住居跡が確認され、古墳築造前は居住地であった。住居跡内の埋土はローム粒、炭化物粒をやや多量に含む暗褐色土で、人為的に埋め戻された様相を確認し、古墳時代前期の土師器が出土している。
- ③ 整地面上では、墳裾部側にはローム粒、ローム塊などを比較的多量に含んだ土によって幅5m以上、高さ約0.5mの低平な盛土、墳丘中央部にはローム粒、ローム塊を多量に含んだ明褐色土とそれらを少量含んだ暗褐色土とを交互に薄く積み重ね、版築状にした高さ1.5m以上の盛土がそれぞれ施されていた。なお、双方の先後関係については断ち割った位置では接点を確認できなかったため不明である。また、双方とも整地面に近い位置の土層には炭化物粒が若干含まれているのが観察された。
- ④ ③の盛土後、双方の間に形成された谷部を埋めるようにローム粒、ローム塊などを比較的多量に含んだ土を0.4～0.5mの厚さで4～5回に分けて積み重ねていた。墳丘中央部においては部分的に版築状に積み重ねられたところもみられた。
- ⑤ 盛土によって形成された墳丘面の勾配は、トレンチ南端から墳頂部側に向かって約3.3mまでは約12°の角度で徐々に立ち上がり、それより上は約28°と若干勾配が急になって墳頂部に至る。しかし、断ち割りトレンチが小祠への参道と一部重複していることから、墳丘面が攪乱なく旧状を維持しているとは言い難い。
- ⑥ 埋葬主体のある墓壙は、盛土が完了した後に、盛土を掘り下げることによって形成されていた。墓壙内に棺が収められ、埋め戻された後、その上にさらに盛土が加えられたか否かについては墓壙上の攪乱が著しく確認できなかった。

次に、G-2及びG-3の断ち割り調査で判明したくびれ部及び前方部の状況について述べる。G-2では、西壁に沿ったサブトレンチ、すなわち古墳の主軸にほぼ直交する形に設定された

トレンチによって、テラスを含めた前方部の築造状況を観察することができた。その結果、次のことが判明した。

① 前方部側では盛土前の掘削整地がローム層まで達していた。つまり、後方部側で確認されたようなローム層上の黒色土地山は存在せず、整地されたローム層上に直接盛土が施されているものであった。また、ローム層の整地面も周湟底と同一レベルというものでなく、あたかも墳裾部を意識したかのようなロームの削り残しという形で存在した。しかし、それは後述するようにその後の盛土の過程ではほとんど意識されなくなってしまったかのように、盛土によって被覆されてしまっていた。なお、削り残された整地面の標高は、84.7～84.8mであった。

② 後方部同様、整地面下に竪穴式住居跡と思われる掘込みが確認された。それは明らかに古墳築造に先行するものであった。

③ 盛土は最初削り残された整地面上に薄くほぼ水平に施されたが、後に整地面は厚い盛土に完全に被覆されて、墳丘内部に入り込んでいた。削り残された整地面端部から周湟側にかけて施された盛土は低平なもので、概ねテラス形成のために施されたものとみられる。

一方のG-3では、西壁と南壁における断ち割り、すなわち古墳の主軸にほぼ直交する形と平行する形に実施した断ち割りによって、テラスを含めたくびれ部の築造状況を観察することができた。その結果、次のことが判明した。

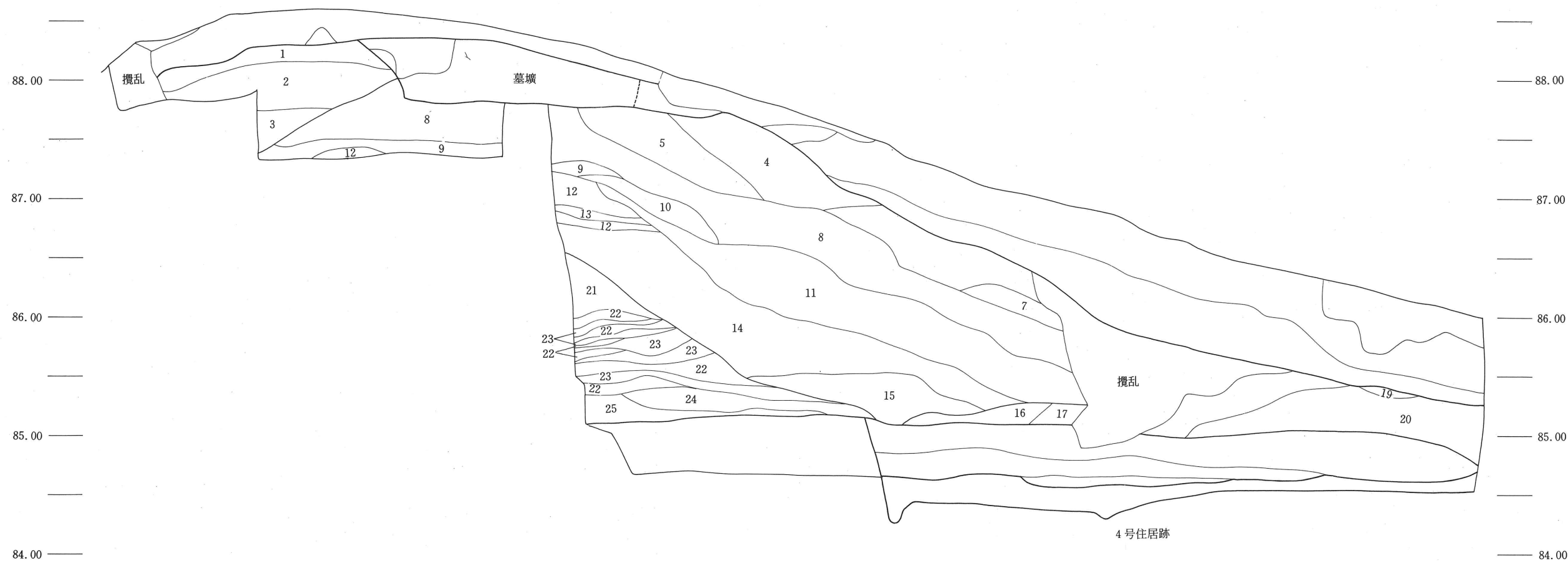
① 西壁において観察されたテラスを含めた前方部の築造状況は、G-2で得た結果とほぼ同様の結果であった。とくにロームの削り残しによって形成された整地面はG-2よりも明瞭に確認することができた。なお、削り残された整地面の標高は84.7mで、G-2とほぼ同一レベルであった。

② 南壁において観察された後方部の築造状況は、後方部中央で設定した断ち割りトレンチでの状況とほぼ同様であった。整地面の標高は約84.2m。とりわけ墳丘面の遺存状況が非常に良好で、墳裾部から約1mの高さまでは約61°の急角度をもって立ち上がり、その上は約20°の角度をもって墳頂部に至っているのが明瞭に観察された。

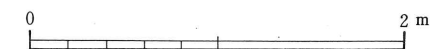
③ 南壁ではさらに前方部が後方部築造後に付設されたことが明らかとなった。付設された前方部の盛土は、ローム粒、ローム塊などを多量に含んだ暗黄褐色土とそれらを少量含んだ暗褐色土とを交互に薄く積み重ねて版築状としたものであった。それらの盛土は明らかに後方部を被覆していることから、築造順位が後方部→前方部の順であることが判明した。

(5) 周湟 (第48～51図)

周湟については、発掘調査以前の観察ではつくられなかったか、さもなくば小規模なもの予想していたが、第1次調査で設定したT-1、T-2、T-3において周湟外縁の立ち上がり確認されたことにより周湟の存在が明らかになった。しかし、それは墳丘の南側に限られ、墳丘の北側においては周湟外縁の立ち上がりは存在せず、また、墳丘の東側及び西側においては今回



- | | |
|---|--|
| 1層 暗黄褐色土 (ローム粒・ローム塊主体, 鹿沼軽石粒少量混入, しまりなくもろい) | 13層 暗褐色土 (ローム粒・ローム塊少量混入) |
| 2層 暗褐色土 (ローム粒・ローム塊主体(1層より少量), しまりがややかける) | 14層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小塊多量, 炭化物粒少量, 今市軽石粒微量混入) |
| 3層 暗黄褐色土 (ローム粒・ローム塊やや多量, 鹿沼軽石粒微量混入, 比較的硬質) | 15層 暗褐色土 (ローム粒やや多量, ローム塊少量, 炭化物粒微量混入) |
| 4層 黄褐色土 (ローム粒・ローム塊多量, 鹿沼軽石粒, 今市軽石微量混入, 比較的硬質) | 16層 暗黄褐色土 (ローム粒・ローム小塊多量, 炭化物粒少量混入) |
| 5層 暗黄褐色土 (ローム粒多量, ローム塊やや多量, 今市軽石粒微量混入) | 17層 黄褐色土 (ローム塊主体, ローム粒多量, 今市軽石粒・炭化物粒少量混入) |
| 6層 暗褐色土 (ローム塊少量, 鹿沼軽石粒・鹿沼軽石ブロック少量, 今市軽石粒・白色砂粒・炭化物粒微量混入) | 18層 明褐色土 (ローム粒多量, ローム塊・鹿沼軽石粒・今市軽石粒少量混入) |
| 7層 暗黄褐色土 (ローム塊主体, ローム粒多量混入) | 19層 黒褐色土 (白色砂粒・炭化物粒やや多粒, ローム塊・鹿沼軽石粒少量混入) |
| 8層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小塊やや多量, 鹿沼軽石粒, 今市軽石粒・炭化物粒微量混入) | 20層 暗褐色土 (ローム粒・ローム塊・鹿沼軽石粒・今市軽石粒・炭化物粒少量混入) |
| 9層 黒褐色土 (ローム粒少量, 今市軽石粒・炭化物粒微量混入) | 21層 褐色土 (ローム粒・ローム小塊多量, 今市軽石粒・炭化物粒微量混入) |
| 10層 暗褐色土 (ローム粒・ローム塊・鹿沼軽石粒少量, 今市軽石粒微量混入) | 22層 暗黄褐色土 (ローム小塊主体, ローム粒多量混入) |
| 11層 暗褐色土 (ローム粒・ローム塊少量, 今市軽石粒・白色砂粒微量混入) | 23層 暗褐色土 (ローム粒・ローム塊少量混入) |
| 12層 暗黄褐色土 (ローム粒多量, ローム塊多量, 今市軽石粒微量混入) | 24層 明褐色土 (ローム粒多量, ローム塊少量, 白色砂粒・炭化物粒微量混入) |
| | 25層 明褐色土 (ローム粒・白色砂粒少量, 今市軽石粒・炭化物粒微量混入) |



第54図 大日塚古墳後方部南側断面図

の発掘調査では周湟外縁の立ち上がりの有無を確認するまでに至らなかった。

墳丘の南側で確認された周湟は、後方部側、前方部側ともに存在していた。しかし、その平面形状については、周湟外縁の立ち上がりが確認できたのが後方部側で2か所(T-2, T-3)、前方部側で1か所(T-1, 大半は水道管の埋設溝によって削り取られ、確認できたのは下端の一部。)と限られ、全容を把握するまでには至らなかった。少なくとも後方部側の周湟外縁は後方部墳裾部の線とほぼ平行した直線状の形状であるものとみられるが、くびれ部付近では未確認であることから、後方部側と前方部側の周湟外縁が直線的に繋がるのか、あるいは墳形に等しくくびれる形状となるのか不明のままに調査を終えた。また、周湟の断面形は、周湟底が比較的平坦で、下端幅より上端幅の方が広い台形状で、周湟外縁の立ち上がりの勾配は後方部側で30~50°、前方部側で約30°であった。

南側周湟の規模は、後方部側では下端幅5.0~5.9m、上端幅6.4~6.6m、整地面からの深さは周湟底の標高が83.7~84.3mで整地面の標高が85.1m内外であることから0.8~1.4mとなった。一方、前方部側(T-1での規模)では下端幅7.3m内外、上端幅8.8m内外、整地面からの深さは周湟底の標高が84.0m内外であることから約1.1mとなった。

墳丘の東側及び西側においては、今回の調査で周湟外縁の立ち上がりを確認するまでには至らなかったものの、前方部南隅を確認したG-5では周湟底が西に行くほど徐々に浅くなっていることから、南側周湟は前方部南隅付近で一旦途切れる形になるものと予想された。

墳丘の北側には周湟外縁の立ち上がりが存在せず、後方部側では約7.5/100、前方部側中央部では後方部より急で約21/100勾配の緩斜面となって北に徐々に下がっていく一方であった。途中標高83.6m内外のところではローム層から鹿沼軽石層へと移行していることから、地山がある程

場 所	形 態	規 模	構 造
総 体	・西面する前方後方墳	全長 35.8m 主軸 N-65°-E (後方部)	・築造順位は 後方部→前方部
後 方 部	・平面形はほぼ正方形	長さ 20.3m 幅 19.1~19.8m 高さ 4.2m	・整地面は黒色土地山 ・墳丘中央と墳裾部に盛土後全体的に盛土
くびれ部	・前方部側が主軸より南寄りに接続	幅 テラス含む 13.0m テラス含まず 8.5m	・前方部側盛土内にロームの削り残し有り
前 方 部	・両側にテラス有り ・前端線が弧線を描く	長さ 15.5m 幅 16.6m 高さ 2.1m	・ローム層まで掘削後盛土
周 湟	・墳丘南側のみに存在	後方部側上端幅 6.4~6.6m 深さ 0.8~1.4m	

第7表 大日塚古墳の形態、規模、構造的特徴一覧

度人為的に削り取られてできた斜面であることを看取できた。つまり、本来の自然地形も北に下がる緩斜面であるため、仮に墳丘北側の周湟底を墳丘南側の周湟底と同一レベルとした場合には、南側で確認されたようなローム層による周湟外縁の立ち上がりを形成することが不可能な状況であったとみられる。

以上、本古墳を数ブロックに分割して各ブロックごとに確認された墳丘及び周湟に関する事実を記載してきたが、最後にそれらを総合して本古墳の総体的な形態、規模、構造的特徴をまとめてみると第7表のようになる。

3 遺物出土状況

今回の調査で、墳丘及び周湟埋積土内から多数の土器片が出土した。また、古墳の築造状態を知るために入れた断ち割り内からも多くの土器片が出土している。これらの多くは、墳丘下の住居跡との関連が考えられる。第55図に示した遺物は、墳丘面出土という点からこの古墳に伴う可能性のあるものである。また、特にその出土状態から古墳に伴う可能性の高いものに関しては、Aランク（●印）、その他は、Bランク（○印）として示した。

まず、Aランクとした遺物は、鏡の他に14、16、17、19、27の土器片が挙げられる。

鏡は、埋葬主体の壙穴底面からの出土である。近接した位置から朱を確認した。

14は、壺の胴部下半破片のみが遺存していたもの、くびれ部南側の周湟底に、底部を下に置かれた状態での出土。

16、17、19は、施文、仕上法及び胎土から同一個体と考えられる。16は墳頂から、17が後方部南側墳裾部から、19がくびれ部北側からの出土。

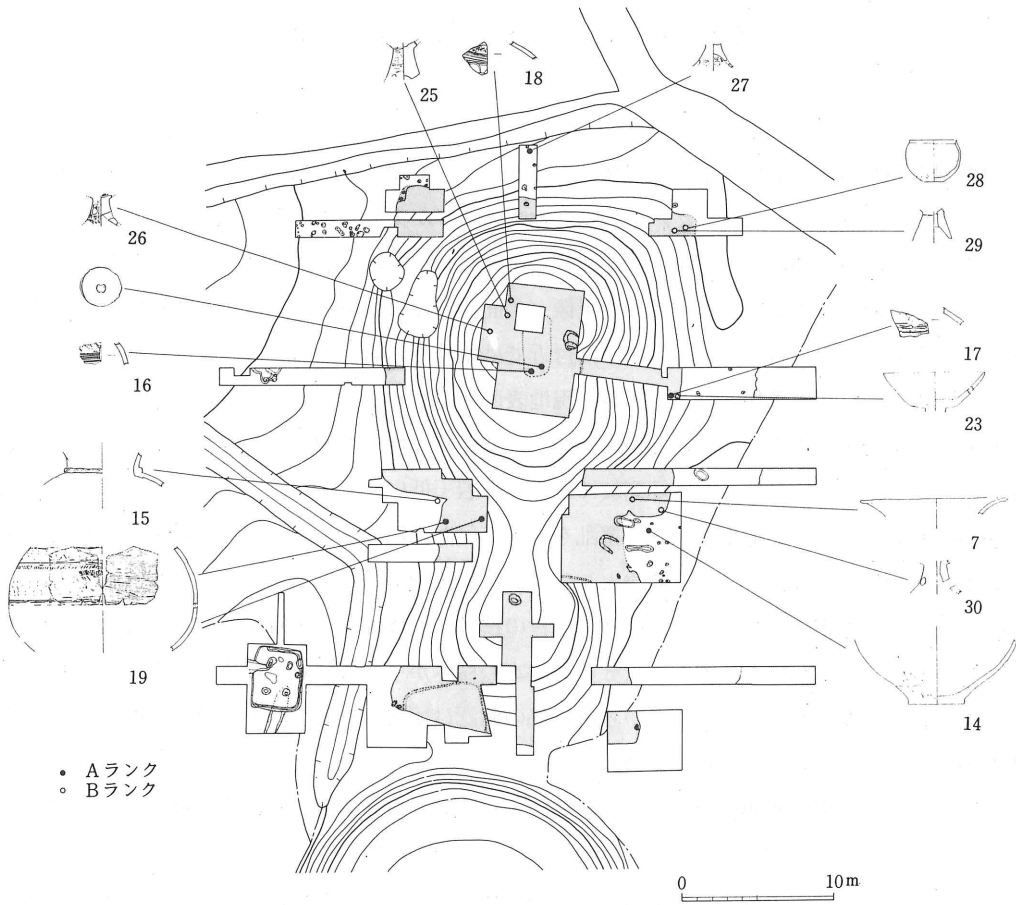
27は、小型高杯の脚部破片。これも14同様周湟底出土であるが、位置が後方部東側ほぼ中央と主軸線上に近い。

つぎに、Bランクの土器片は、その出土位置から墳頂部・北側くびれ部・南側くびれ部・後方部南東隅部の4か所に分けられる。

墳頂部からは、18の壺の破片と25、26の高杯が出土。18は、16、17、19と施文の点で違いを示すが、東海系の壺である。近くに大きな立木があり、攪乱を受けているため破片でしか見つからなかった。これに近接する形で25の高杯脚部の出土がある。さらに、26が墳頂平坦面から若干下がったところで転落するような形で出土した。

19の壺の他に15の壺の頸部破片が、北側くびれ部の墳丘から周湟へ落ちたように墳裾部分から出土した。

南側くびれ部からは、内外面赤色の有段口辺壺の口辺部破片(7)と器台(30)が墳丘から周溝へ転落する状態で出土。また、くびれ部からは少し離れて、23の高杯の杯部破片が墳裾から出土した。



第55図 大日塚古墳遺物出土位置図

後方部南東隅からは、近接した位置で28の坏と29の器台が出土した。この部分は、段がつくような形で傾斜が緩くなり、そこからこの2個が置かれたような状態で出土した。

第3章 埋葬主体部の調査

発掘調査開始当初、墳丘測量図や現状をみると、後方部墳頂に小祠がありその関係で参道部分にコンターの乱れがみうけられた。さらに御神木のスギが大きく根を張っているという若干の問題はあったが、墳頂部に盗掘穴跡はなく比較的良好な状態であったと考えられた。しかし、表土を剥いていく時点で古銭・煙管・土製大黒像・土面など後世の遺物を包含する攪乱部分が各所にあることを確認した。特にG-1の南東隅付近では攪乱が顕著で、この部分はコンターの流れ具合から平坦面の存在が予想された。実際、現地表面から10~15cmほど掘り下げたところに平坦面が現れた。土面・大黒像の破片とともに灰が一面に広がり焼石が散在していた。なお、この平坦面は主体部を確認した底面である標高87.9mよりも若干低い。

主軸線南側もやはり参道部を中心に攪乱を受けていた。第56図のように、断面南側に壙穴底面上約20cmまで攪乱が及んでいる。遺物としては、古銭・煙管類が場所によっては壙穴底面とほぼ同じレベルからも出土している。このような後世の攪乱が主体部の実態解明を妨げる要因になったのであるが、このほかにも神木スギやその他数本の樹木が主体部の真上に根を下ろしていたことも調査の進行を妨げた。以上のことから主体部の確認は困難を極め、壙穴の確認は断片的なものとなってしまった。壙穴と確定した要因は

① 第56図の南北断面図のように、3層と4・5層はローム塊、鹿沼土（軽石）の量に違いがみられることから3層と4・5層を分ける斜めの線を壙穴の掘り込みの縁とは断定し難いが、平面との関係で一応それである可能性が指摘できる。東西断面図では、東西の掘り込みの縁を知る肝腎な位置に立木の存在により攪乱を受け、壙穴の立ち上がりを知ることは難しい。ただ、東西断面図から両方ともこの根の攪乱の部分で壙穴が立ち上がっている可能性が強い。しかし前述のように攪乱を受けている場所であり一概に断定はできない。

② つぎに平面形からみると、鏡の出土とほぼ同レベルに壙穴北側の立ち上がりとはほぼ同位置に東西に延びる黒色土をやや多く含む土層が確認された（6層）。南北断面のように、この6層は斜めに下降する。これと類似するものは南側立ち上がり付近では認められないものの、6層は5・4層と同様墳丘築造の盛土であることがうかがえる。

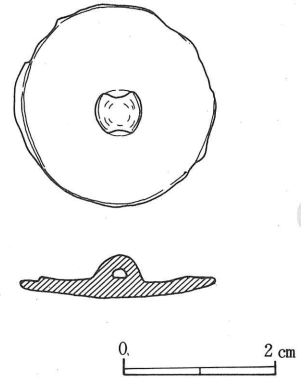
③ 前述した①・②の壙穴の掘形の底面より鏡（第56図）と朱を確認した。後方部中心よりやや南西寄り、壙穴全体の位置関係からしても西よりである。また鏡の西側に朱が位置する。以上3つのことから壙穴を確認するに至った。壙穴の規模を推定すると、上面で長さ約3.6、幅約2.4m。底面で長さ約3.4、幅約2.0m。掘り込みの深さは現地表面から約0.7mである。断面では木棺の形態を推定し得ないが箱式木棺の可能性を推定できる。

第4章 出土遺物

1 副葬品

副葬品は超小型の青銅製素文鏡（第57図）が1面出土した。面径2.6で厚さ0.2cm。鈕があり，断面は半円形。鈕の幅0.6，高さ0.4cm。凸面鏡であり鏡面の一部にまだ光沢がみられる。

三次にわたる発掘調査の結果，多数の土器片が出土した。これらの土器片を出土位置から三者に分けることができる。古墳出土，古墳盛土内出土，住居跡出土である。住居跡出土については次章に述べるとして，本章では古墳出土，古墳盛土内出土について述べる。



第57図 大日塚古墳出土鏡実測図

2 墳丘及び周湟出土土器

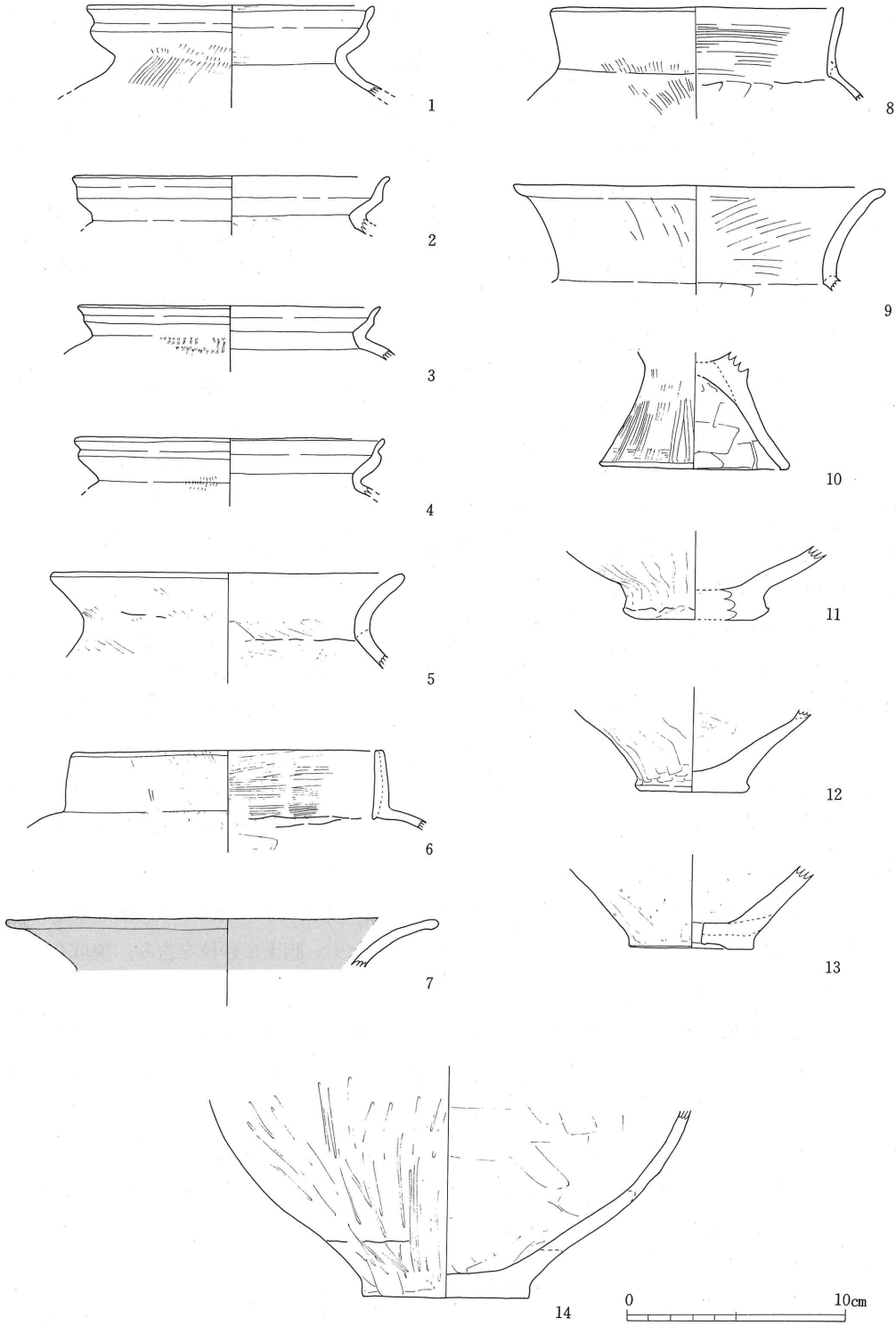
墳丘及び周湟から出土した土器（第58・59図）は土師器で，墳丘及び周湟底での供献用土器あるいは墳丘下住居跡との関連などその性格を十分検討する必要がある。

1) 前方部南側周湟埋積土中から出土したS字状口辺台付甕の口辺部破片である。推定口径は13.0，器厚0.3cmと薄手で，くの字状に曲がるが口辺部は明瞭な段をもたない。内側もくびれ感が少なく。仕上げは口辺部内外面ともヨコナデ，頸部～胴部外面にかけて粗いハケが左傾方向に施されている。頸部内面に横ハケ，胴部内面はナデ，焼成良好，内外面とも灰色。

2) 前方部南側墳丘寄りから出土したS字状口辺台付甕の口辺部破片で，推定口径は14.0cm，器厚0.3cmと薄手である。一端外方に突き出した後，直立気味に立ち上がり，再び外方に曲がる。口縁に炭化物の付着が見られる。仕上げは口辺部内外面ともヨコナデ，頸部内面に横ハケ，胴部内面はナデ。胎土に石英粒，長石粒が含まれ，焼成良好，内外面とも灰白色。

3) 前方部北側から出土したS字状口辺台付甕の口辺部破片である。推定口径は13.5cm。全体としてはくの字状に曲がり，口辺部は明瞭な段をもっている。仕上げは口辺部内外面ともヨコナデ，胴部外面はハケが斜めに施されている。焼成良好，口辺部外面は黒色，胴部は暗褐色，内面は淡褐色。

4) くびれ部南側周湟埋積土から出土したS字状口辺台付甕の口辺部破片である。推定口径は14.0cm。全体はくの字状に曲がるが，口辺部は明瞭な段をもっている。仕上げは口辺部内外面ともヨコナデ，胴部外面はハケが斜めに施されている。胎土に長石粒を含み，焼成良好，内外面と



第58図 大日塚古墳出土遺物実測図(1)

も暗褐色。

5) くびれ部南側周湟埋積土から出土した甕の口辺部破片である。推定口径は16.0cm。ややゆるいくの字状に曲がる。仕上げは口辺部内外面ともハケ後ヨコナデ、胴部外面はハケが斜め、内面横のハケ仕上げ。胎土に輝石粒、チャート粒、石英粒を含む。焼成良好、外面は黒褐色、内面淡褐色。

6) 前方部南側周湟埋積土から出土した甕の口辺部破片である。推定口径は14.0cm。口辺部は直立し、胴部上半が張る。仕上げは口辺部斜め、内外面ともハケの後外面のみ部分的ナデ、胴部外面はハケの後ヘラナデ、内面横のハケ後ヘラ削りが施されている。胎土に白色砂粒、赤色スコリア粒を含む。焼成良好、内外面とも暗褐色。

7) くびれ部南側墳丘寄りから出土した有段口辺壺の口辺部破片である。推定口径は20.0cm。両面とも赤色である。仕上げは横の入念なヘラ磨き。

8) くびれ部南側の周湟底より若干浮いた状態で出土した甕の口辺部破片。推定口径は13.3、器厚0.3cmと薄手である。口辺部はほぼ直立する。頸部内面に稜がある。仕上げは、胴部外面にハケ、口辺部内面に横のハケ後口辺部両面ヨコナデが施されている。胎土に輝石粒、長石粒、赤色スコリア粒を含む。焼成良好、淡橙褐色。

9) 前方部北側隅の周湟底より若干浮いた状態で出土した甕の口辺部破片である。推定口径は16.6、器厚0.6cm。頸部はほぼ直立、口辺部で強く外反する。頸部内面に稜を有する。仕上げは、口辺外面に縦方向のハケ、内面に斜めと横方向のハケ後、両面ヨコナデが施されている。胴部上半内面はヘラナデが施されている。胎土に石英粒、長石粒を含む。焼成良好、淡黄褐色。

10) 後方部南西隅付近から墳丘よりは若干浮いた状態で出土した甕の台部破片である。推定底径は8.6cm。ハの字状に開く。仕上げは外面縦のハケ、内面横のヘラナデが施されている。胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成良好、内外面とも赤褐色。

11) くびれ部南側周湟埋積土中から出土した甕の底部破片である。推定底径は6.6cm。底部は突出し、胴部は球形。仕上げは外面縦のヘラ削り、内面ヘラナデ。胎土に砂粒を含み、焼成良好、外面は橙褐色、内面灰褐色。

12) くびれ部南側周湟埋積土中から出土した甕の底部破片である。推定底径は5.0cm。底部は突出し、直線的に胴部に至る。仕上げは外面縦のヘラ削り、内面ヘラ削り。底部外面に炭化物が付着。胎土に石英粒、チャート粒、輝石粒を含み、焼成良好、外面は赤褐色、内面褐色。

13) くびれ部北側周湟埋積から出土した単孔式甕の底部破片である。推定底径は5.6cm。底部中央に0.5cmの円形の穿孔がある。仕上げは外面縦ハケ後のヘラ削り及びヘラ磨き、内面ハケ後ヘラナデ。底部外面に炭化物が付着している。胎土に輝石粒を含み、焼成良好、外面は黒色、内面黒褐色。

14) くびれ部南側周湟ほぼ直上から出土した壺の胴部破片。推定底径は7.6cm。仕上げは外面底部付近にヘラ削りを残すが全体を縦もしくは斜のヘラ磨き、内面は底部にヘラ削りを残すがその

他はヘラナデ。一部に紐つくり痕が残る。胎土に長石粒、輝石粒、赤色スコリア粒を含み、焼成良好、内外面とも淡黄褐色。

15) 北側くびれ部付近から出土した壺の頸部破片である。頸部はほぼ直立し、頸部と胴部の境には突帯がめぐつている。外面は縦のハケ、突帯上に外面と同様の工具により連続的に刻目が施されている。内面は剥離が著しい。焼成良好、内外面とも淡褐色。

16) 後方部墳頂部付近から出土した壺の胴部破片。外面縦のハケ後、山形文、横線文の順に施されている。山形文の沈線部分には赤色塗彩。内面は外面より粗い横のハケ仕上げが施されている。胎土はチャート小石を微量含み、焼成良好、外面は暗い褐色、内面黒色。

17) 後方部南側墳端部付近から出土した壺の胴部破片である。外面縦のハケ後、山形文、横線文の順に施され、山形文の沈線部分には赤色塗彩。内面は外面より粗い横のハケ。なお、外面には若干の炭化物が付着している。胎土はチャート小石を微量含み、焼成良好、外面暗褐色、内面黒色。

18) 後方部墳頂から出土した壺の胴部破片である。外面の地文に右下がりのハケ後、同様の工具による擬似縄文が施され、中段に7本の横線文、さらにその下段に円弧文が施文されている。施文順位は、ハケ→擬似縄文、横線文→円弧文の順。破片上部に赤色塗彩。胎土は石英粒、長石粒を含み、焼成良好、内外面とも淡黄褐色。

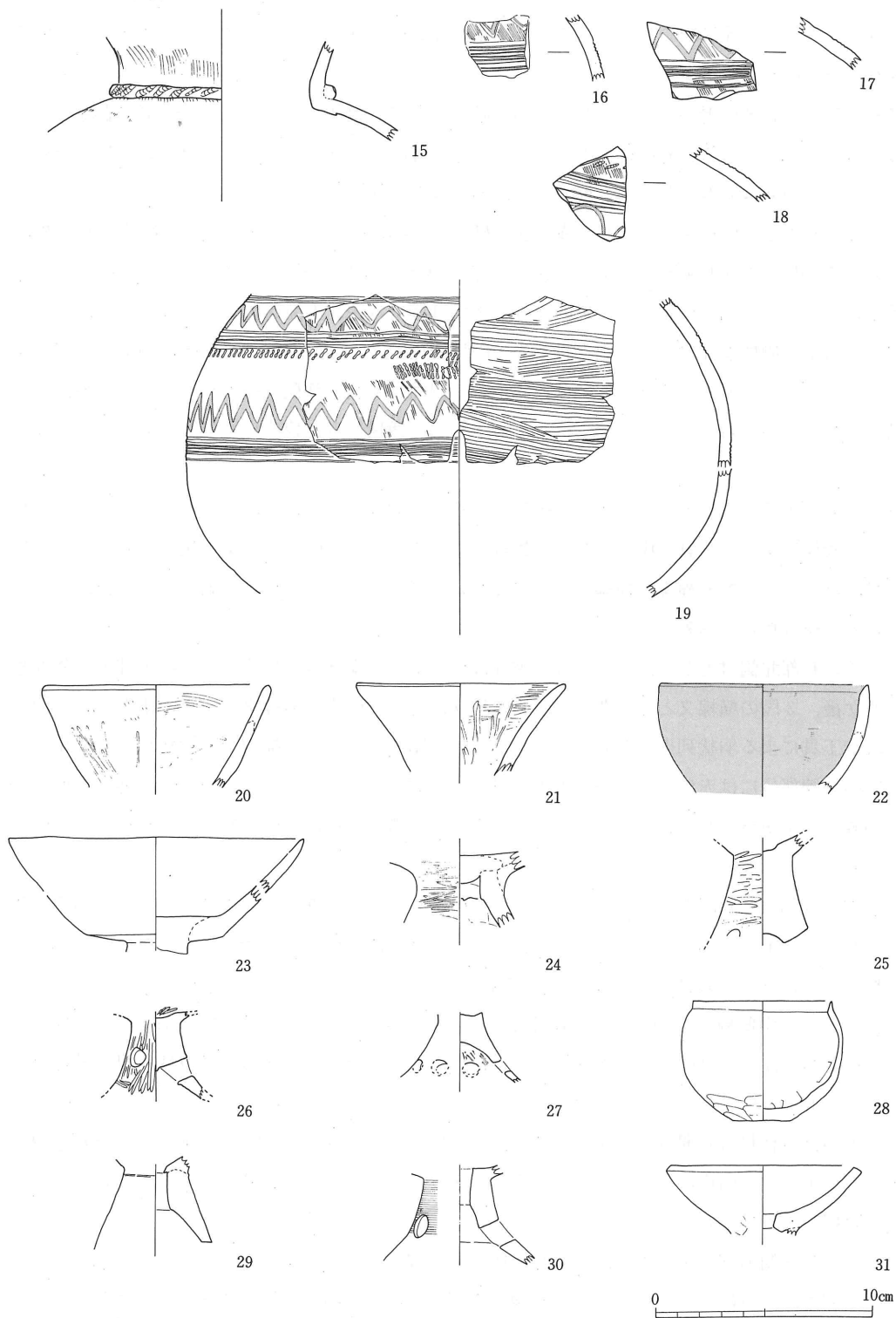
19) くびれ部北側付近から出土した壺の胴部破片である。胴部はやや下膨れ気味の球形。外面縦のハケ後、3段の横線文とその間に2段の山形文、さらに中段の横線文と下段の山形文との間に櫛歯状工具による羽状列点文が施されている。施文順位は山形文→横線文→羽状列点文の順。山形文の沈線部分には赤色塗彩。胴部下半は横のヘラ磨きが入念に施されている。内面は外面より粗い横のハケが施されている。胎土はチャート小石を微量含み、焼成良好、外面暗褐色、内面黒色。

20) くびれ部南側周湟埋積土中より出土した坩の口辺部破片。推定口径は10.6cm。やや内湾気味に広がる。仕上げは内外面ハケ後、外面縦のヘラ磨き、内面横のヘラ磨き。胎土に砂粒、スコリア粒多くを含み、焼成良好、内外面とも乳白色。

21) くびれ部南側周湟埋積土中より出土した坩の口辺部破片。推定口径は9.6cm。やや外反しながら広がる。仕上げは内面ヘラ磨き。胎土に白色砂粒、チャート粒を含み、焼成不良、外面は灰褐色、内面は淡褐色。

22) 前方部南側周湟埋積土中より出土した坩の口辺部破片。推定口径は9.6cm。内湾気味に直立する。仕上げは外面横位のヘラ磨き、内面ハケ後ヘラ磨き。胎土に石英粒、チャード粒を含み、焼成良好、内外面とも赤色。

23) 後方部南側墳裾部付近より出土した高坏の坏部破片。推定口径は13.6cm。くびれ部から横に大きく開き、さらに1つの稜をもって直線的に開いている。内外面とも器面の荒れが著しい。焼成不良、外面は橙褐色、内面淡褐色。



第59図 大日塚古墳出土遺物実測図(2)